KH387-H3
1200700511336

書叢家

—6—

前の婚結

長與善郎著

新潮社出版

1917

■新進作家叢書（6）

結婚の前

長與善郎著

新潮社
出版

目次

結婚の前……一
Yの幻影……六九
生活の一片……一〇一
亡き姉に……一二七
兎……一四五

KH387
H3
国立国会図書館蔵書
I種
W
1200700511336

結婚の前

一

もう三年も前の事になる。

四月の始めであつたと思ふ。――ある晩自分はMから一通の手紙を受け取つた。自分は一寸不思議に思つた。何故ならMは自分と最も親しくしてゐる友達の一人で、少くとも三日に一度位は互に往復して逢ふ事を常としてゐたので、もし何かの用事がある場合にも大抵電話か端書で用が足りてゐたからである。

自分は此思ひがけない手紙を受け取つて「何事かしら」と思つた。殊にその手紙はわりに長相（ながさう）であつた。自分はいくら考へて見ても其内容を推量する事が出來なかつた。が、そんな風に訝かつたのはすべて一瞬の間で、ともかくも自分はその封を切つて讀んだ。

「突然にこんな手紙を送つて君は驚くことゝ思ふが、實は……」と云ふやうな書き出しに自分は少し不安をうけ乍ら先きをよんだ。「……F子（Mの細君）が君に紹介し度がつてゐる女の人があるのだ。――其人は僕も二三度逢つて知つてゐる。――僕は今は時が悪いからもう少し待てと云つてゐる。併しF子は頻りに早く君に逢はせ度がつて

ゐるのだ。……」此處迄讀んで自分はドキツとした。自分は其先きを何う書いてあつたか詳しくは覺えてゐない。

とにかくMの細君が或る若い女の人――無論未だ處女である――を自分に逢はせ度がつてゐる事、そして其女の人は信州長野の人で、Cと云ふ女の友達で、美しい人であり、齢は二十一で、名はS・Iと云ひ、洋畫を描く人で――畫は大したことはないらしいが、――且つ又自分の書くものを讀んで自分に厚意を持つてゐる人である事も分つた。さうだ。それから未だ「ミケランジエロを非常に好いてゐる人」だと云ふ事も書いてあつた。

自分の性質をよく知つてゐるMは非常に遠慮深く書いて寄來した。で、彼の文句の終りには「――しかしかう云ふ事は却つて單純な女の言葉に從つた方が自然かとも思ふので」自分は敢へて此手紙を書くのだと云ふやうな意味の事が書いてあつた。

何れにせよ、此手紙はMの推察通り自分には全く思ひがけないショツクであつた。併し自分はそれを讀んで案外に喜び得なかつた――強ひて云へば――二つの理由を持つてゐた。と云ふのは其頃の自分はMが「今は時が悪い」と云つた如く、丁度前年の秋に起つた失戀に疲れ切つてゐたので、さう云ふ戀愛の沙汰にはいゝ加減食傷してゐ

た當時の自分は今又更に引きつゞいて一刻の猶豫もなく、新しい戀愛の渦中に自分を投げ込む氣力がなかつた。それがもう一年前の事であつたならば、自分は恐らく貪るやうに昂奮して此Mの手紙を迎へたことであらうに、今では漸く苦しい諦めの中に先きの戀人に對する自分の感情が鎭まりかけて、いろ〳〵の切ない記念がどうかかうかの一つの神聖な偶像に纏まつて來た許りの處なので、自分はその偶像を靜かに胸の奥深く守り乍ら專心仕事をして行き度い氣持でゐたのであつた。又混沌の狀態から漸く沈澱の狀態に落ちついて來た記念を視つめたり味ひ嚙みしめたりする暇もなく、直ぐ次の事件を以てゴチヤ〳〵にかき亂して了ふと云ふのも惜しい氣がした。自分は製作に沒頭する事が出來る爲めに能ふ限り外部の刺戟と心の動搖を避けて安靜を求めた。そして其安靜な努力の裡に「戰ひ」の夢を味ひ〳〵、其處から限りなく湧き來る淸い泉を掬み取り、其寂しい孤獨の裡に深く、嚴肅に生活して行き度く思つてゐた。「今迄は無我夢中に鬪つた。併し之からは嚙みしめるのだ。」と自分は思つた。そして其「寂しい孤獨」に愛と希望とを感じてゐた。

それがMの手紙を案外に喜び得なかつた一つの理由であつたが、も一つ其處に不滿があつたと云ふのは自分は自分の運命に如何なる他人からも決して手を觸れられる意

識を喜ばなかつたのである。Mは素より「他人の運命に干涉する事の怖ろしさ」を知り拔いてゐる。それ故Mは躊躇し、又遠慮してゐるのだ。而も猶ほ彼がかく云ひ出すのは彼が自分に對する厚い信用と、愛と、打ちとけた友誼とがあるからでもあり、且つ此手紙によつてそれを自分に示したものであるとも自分は思つた。自分はそれを嬉しく思つた。自分も亦同じやうにMを信愛し、そして嘗て彼の結婚事件がうまく行く事を厚意を以て祈つた一人であつた。併し自分の運命の絕對的獨立と云ふ意識（それの事實が不可能である事は知つてゐたが）を欲する念の無暗に强かつた若い自分は今Mが遠慮深い周到な手を以て親切にそれに觸れて呉れた厚意をも或る侮辱のやうに感ぜずにはゐられなかつた。そしてそれが自分の愛するMとの事であつた丈け一層自分には不快であつた。

「Mは此俺の性質をよく知つてゐる筈なのにどうしてこんな事をするのだらう。」と自分は訝つた。「何方にしろ之はいけない。斷らう。」と自分は卽座に思つた。勿論或る女を自分に紹介すると云ふ事は其女を自分に娶はせ度く思ふと云ふ事である事は云ふ迄もない。併し又うまく行かなかつたらどうだ。自分の女に對する自信は愈々なくなつてゐる。「俺の作物を愛するからと云つて俺を愛するとは限らない。のみならず俺がM達

の親切に對する義理の爲めにそれ程すゝみもしないのに「否」と云ひにくゝなるやうだつたら馬鹿氣てゐる。その女の人にしたところでさうだ。女だから尙さう云ひにくいだらう。つまりM達の親切の熱心さが强ければ强い程俺達は强ひられる傾きになる。M達は或る處から先きは表向きの干涉を避けるだらう。さうして素より自分等をその親切の犧牲にする事を望まない事は明らかである。だから自分等の何れにせよ否なものは否だと云へば彼等もそれを失望はしても怨みはしないだらう。だがそれは事實としてはわりに具合が惡い事だ。兩方が互に嫌ふか、好くか、何方かになればいゝが、——殊に俺の方でさう云ひ出す事があれば、それはその女を侮辱する事になり、まかり間違へば隨分氣の毒以上に怖るべき目に遭はせないとも限らない。俺はそんな事は望まないし、又俺ももう失戀は御免だ。」

が、とにかくMの厚意と、細君の親切とは疑ふべきでないと思つたので、自分は早速丁寧に其返事を認めて、「折角の厚意は嬉しいが」どうも今自分が其女の人に逢ふ氣のすゝまない理由を書いた。勿論第二の理由は書かなかつたが。

「……又そんな事の爲めに折角君達の厚意を無にして、させ度くもない心配や、迷惑や、失望を君達にさせるやうな事があれば猶更心苦しい事だから……」こんな事も書

いたやうに思ふ。そして終りにM夫婦に厚く禮を述べて筆を擱いた。

しかし「事がうまく行かない時」の心配を理窟の上で自分が書く事は空々しくも思はれ、また蛇足のやうにも思はれた。何故と云つてそんな心配はM夫婦が既に十分慮つた上の事である事は明かであつたから。殊に思慮の行き屆くMが敢へてかゝる大膽な申し出を寄來して吳れるには十分の自信があるからであらう。卽ち「屹度うまく行くに違ひない」と思つてゐるからであらう。と自分は思つた。しかしさう自信される事が自分には自分の心意を斷定されたやうに不服であつた。「俺の事が何で人に解るものか」と自分は思つた。さうして自分が何となく女には甘い男であり、自分をある女に戀させる事は譯ない事に思はれてゐるやうな氣もして、自分乍らその事實を或る處迄は認めながら、又さう思はれてもそれは別に自分に對する彼等の輕蔑にもならない事も知りながら餘り滿足には感じなかつた。併しそんな風に曲つて解釋する事は凡て無用な事であり、且つM達の折角の親切に對しても失敬で、惡い事であると思つたので、自分は何處迄も此Mの厚意を厚意として快く、素直に受けておかうと思つた。

「とにかく俺の事は一切俺に任せて放つておいて貰はう。俺にもしさう云ふ運命が來るべきものならそれは俺が自分で直接に呼び寄せた時の事だ。さもなくば此前の時の

やうに俺が何處かで偶然に「其人」に遭つて、直接に戀を感じた場合でなければならない。どうも後の方は六ケしいが。(かう自分が思つたのには理由があつた。と云ふのは自分は丁度此一と月許り以前に自分の作を愛讀するある女に戀されて、其女と二度許り逢ひもしたが、どうも自分の方からは戀する事が出來なかつたからである。で、今自分は其女の顏を思ひ浮べながら考へた。)どうも俺が自分で呼び寄せたんでは迚もメーテルリンクのルブラン夫人を夢想すると云ふのは無理だらうが、それでも他人から周旋される位ならむしろ俺は一生獨身でゐるさ。」かう自分はそれの可能を疑ひ乍ら腹の中で獨り言を云つた。

二

併し自分は此斷りの返事を出して了ふと同時に少し未練が心に起つた。何か惜しいものを逃がして了つたやうな氣がした。それは自分の運命にM夫婦を通じて贈られるべきものであつたのだ。「此女は俺のものを讀んで厚意があると云ふ。何だかあてにはならない。しかし事實かも知れない。とすればどの位の程度か知らないが、もし此事が事實となつて發展すればそれはM達丈けの意志によるとは云へない。幾分か俺の力

もあり、向うの意志もある事になる。つまり半分は俺が自分で呼び寄せたやうなもので、それを只M夫婦が取り次いで呉れたのだ。」こんな事を自分は思つた。そしてMの手紙を又繰り返へして讀んだ。

自分にはある疑問が起つた。それは此女が自分の作に現はれてゐる自分に厚意があると云ふのは極く淡い程度のものか、それとも存外牽きつけられてゐ乍らそれを處女の羞恥の爲めに隱くして現はし得ずにゐるのか、或は又自尊心の爲めか、抑と云ふ疑問であつた。自分の眼は「美くしい人」と云ふ字句の上をさまよつた。「どんな人だらう。それにMが美しいと云つてもMと俺とは多少趣味が異ふやうだから俺には左程美しく思はれないかも知れない。尤も圖拔けて美しい人ならそんな事もないだらうが。どんな人かしら。」と自分は思つたがどうも空想ではそれは美しい人にしか思はれなかつた。「それにMの書き振りには何となく自信がある處を見ると確に美しい人らしい。それからミケランジエロが好きか。うむ。それなら俺のものが好きだと云ふ譯も解るには解る。いゝ趣味の人らしい。」と自分はほゝ笑みながら思ふと、その「惜しいもの」は一層大きな損失のやうに思はれた。

「一つアテなしに、偶然に逢つたやうにして此女を見る丈け見て見るか。堅苦しい「見

合ひ」と云ふやうな譯でなしに。もつと自山に。氣輕に。」ふとこんな考へが自分に起つて、それも惡くはないなと自分は思つた。「さうすればいけなければいけないで簡單に濟むだらう。事件を起さずに。又もしよかつたら今度は本式にやるのだ。」

しかしさう思つたら流石に氣が咎めた。自分が惡魔のやうに思はれて來た。「それは餘りにいけない。始めから「見合ひ」の心算で遭つて、向うを退けるよりも動機に於ては更に向うを侮辱した事になる。道樂者が女を見て擇ぶのと違ひはない。(と考へると其惡さは非常なものに思はれた。)のみならずもう斯うして知つて了つたからにはその會見は何處迄も必然であつて、偶然にはならない。だから事實に於てそんな風に氣輕に逢つて見ると云ふことは全然不可能な事であり、且つ自分自身にとつてもそれは自らの尊嚴を蹂み躪る事に等しい。何方道それは問題にならない。」

かう思つた時自分の意識の下にかくれてゐた先きの戀人が「良心」の衣を被て現はれた。それは自分を見下げ果てたやうに「お前の心は既うそんなに浮はついてゐるのか。お前は妾に何と云つた。」と云ふやうに自分を睨んでゐるやうな氣がした。確かに自分は先きの失戀に於て「貞節」と云ふ感じを得たのだ。そして自分は此貞節な心を愛した。自分の心は未だカナリ彼女に牽かされてゐた。彼女の事を靜かに思ふ時自分

の眼には淨い涙がうかんだ。そして彼女のみに自分がさう云ふ意味で結びつけられてゐると云ふ意識を自分の運命のやうに感じてゐた。自分は其運命を愛し、又人からそれを尊敬され度かつた。而も自分は今既に自ら其運命を瀆がし、人からも輕蔑されたやうな氣がした。

「そんな事が出來るものか。」と自分は思つた。「何と云つても俺の戀人はあの人の外にはないんだ。又それでいゝのだ。さう何人も持てるものか。」そして自分は此思ひがけない刺戟の爲めに又も燃やされた愛戀の眼を以て其遠い戀人を思つた。

「まあいゝ。どうせもう斷つて了つたのだ。それも自然に斷つたのだ。だからMからは何も云つては來なかつたのだと思つてゐればそれでいゝのだ。Mだつてそれを不審には思ふまい。却つて豫期通りの返事位に思ふだらう。何でもない。俺は矢張り心を靜かにしてしんみり仕事をするのだ。それがいゝ。もう事件にも、不安にもうんざりだ。」

かう自分は思つた。するとそれはそれでもう濟むだ事のやうに思はれて氣は樂になつた。

三

翌日Mから來た手紙には彼が自分の返事を讀んで少しも意外には思はなかつた事、自分の斷りを無理なく思つた事が書いてあつた。「それ見ろ。俺の云つた通りだ。……と僕はF子に云つてやつた。」こんな事も書いてあつた。そして自分がきつぱり斷つた事をむしろ快く感じてゐるらしく見えた。

自分は一方安心した。と、同時に又も「惜しい」と云ふ氣が起る事を避けられなかつたが、其未練は抑へなければならないと思つた。「仕方がない」と自分は呟いた。そしてMも厄介な運命への關係をのがれた事を滿足に感じてゐるのであらうと思つた。

「何しろかう云ふ事は會つて話し度くないので、君と會つた時には此事に就いては何も語り度くない爲めに手紙を書いたのだ。」自分はかう云ふ意味の事がMの手紙に書いてあつた事を思ひ出す。それは自分も同感であつた。それはある神經を持たない人々には不思議に思はれるかも知れないが、自分等にとつては如何にも自然な事であつた。

で、その後間もなくMと逢つた時には自分等は何事も互の間にはなかつたかのやうに（或る人々には空々しく思はれたであらう程に）他の話、即ち仕事の話や毎も話すやうな話をのみ交はした。それはある意識の爲めに毎も程自由に、自然な調子では出來なかつたが。

そして自分は極く稀れに未だ先きの戀人元山と云ふ女の家にひどく苦しまされる事を知りつゝ訪ねて行く事を止めなかつた。自分はよく一人で泣いてゐる事があつた。彼女の自分に對する態度は何故か分らない程冷酷であつた。しかし自分はそれを恨む力はなかつた。そして自分の愛は次第に利己を超越して、神聖とも云へる美しいものになつた。從つて彼女はいよ／＼氣高い近寄り難いものに自分には思はれた。此自分には痛ましい出來事を拙ない製作に飜譯する事を其頃の自分は日課としてゐたのであつた。

しかしMの細君は自分の返事によつて此新しい事件を斷念はしなかつた。（自分は其親切に感謝する。）彼女は自分のMに送つた返事をCと云ふ女の手を經て、其Iと云ふ當人の許に送り屆けて呉れた。のみならず自分が嘗てMに與へた自分の寫眞をも添へて渡した。勿論そんな事が運ばれてゐやうとは自分は後に到る迄知らなかつた。が、Mの細君はもし一度自分と其女の人とが落ち逢ふ事がありさへすれば必ず事がうまく行く事を信じてゐるやうであつた。

自分はよく覺えてゐない。しかし兎も角も一旦表面上立ち消えになつてゐた話は再發した。再びMの手紙を通してゞあつたか、それとも直接の話によつてであつたか忘

れたが、ある時Mが自分の家に來た時自分等はわりに氣輕に此事に就いて話してゐた。
自分等はゴヤの繪の本を見てゐた。そして自分が「どんな人だ。」と云ふやうな事を訊いた時、Mは其畫像の中の一つを指して「これに似た人だ」と云つた。
それは「或る令孃の肖像」であつた。寫眞は小さくて版もよくなかつたが、凛とした威嚴のある美しい女であつた。「こんな人なのか。」と自分は思はずほゝ笑みながら云つた。かくて全で見當の附け樣もなかつた自分の想像は多少それによつて見當をつけられた。と、同時にそれは自分を牽きつける一つの力となつた。既に一つの戀に充たされてゐた自分は其爲めにある淡い苦痛を感じた。しかし嬉しくも思つた。
Mの歸つた後で自分は何遍となく此畫像の女を見た。ゴヤによつて畫かれた此威嚴ある令孃の美しさには少し親しみ難いやうな強いものがあるやうに感じた。それはレムブラントの畫く女のやうに溫かい愛の親しみを感じさせる優しい美しさとは違つてゐた。しかしこれも亦自分の好き得る善い美しさであつた。そして何れ本物の人は此畫の女とは隨分感じが違ふにはきまつてゐる。藝術には藝術の魅力があるやうに、實在の人間には又人間の魅力があるからである。それ故此當人に逢つたら案外フアミリアを感じるかも知れないと自分は思つた。

此ゴヤの畫集は自分には不思議な因緣を持つてゐた。と云ふのは此「或る令孃の肖像」から十頁許り先きには「或る若い婦人の肖像」があつた。そしてその肖像は自分の先きの戀人の元山に「活き寫し」と云へる程よく似てゐたからである。自分は元山に戀して後ある時ふと此肖像を見た時打たれたやうに驚いたことを記憶してゐる。それは自分が姪の手を經て手に入れた彼女の寫眞よりも其「感じ」に於て遙かに彼女に近かつた。それ以來自分は此肖像を見る事を怖れ、愛し、それを見ると自分は必ず赤面した程強い感じに打たれるのであつた。(自分は此肖像を態々元山の處迄持つて行つて彼女に見せた事がある。「これは誰かに似てゐませんか。」と自分は訊ねた。「分りませんね。」と彼女は氣の拔けた調子で答へた。「何處か貴女に似てゐると私は思ふが。」と自分は云つた。うつかり「よく似てゐる」と云つて彼女の氣に障る事を怖れたのであつた。しかし彼女は只「さうですかね」と答へたのみであつた。)
少し横道に外れたが、さうして自分は此二つの畫像を見比べた。併しIには未だ一度も逢つた事のない自分は、其「令孃の肖像」によつて「或る若い婦人の肖像」から受ける十分の一の感銘をもうけなかつた。そして只自分に女性との交渉が先きの戀愛以來俄かに開かれた事を意識して思ひがけないやうな、むしろ滑稽な感をも抱くのであ

つた。しかし一方怖ろしいやうな氣もした、

四

自分の氣持は其後少しルーズになつた。女との會見に對して前程嚴格の意識を持たなくなつた。「事件と云つても他の事件とは違つて何しろ「美しい女」との事件だから。さうして自分は戀愛は好きだ。女も好きだ。只「今」と云ふ時が生憎少し早過ぎるのだ。せめて此秋頃迄待つて呉れたら。」と云ふやうな意識がそろ〳〵自分の裡に働き出した。

其處へ又Mの細君から話が持ち出された。それによると四月の二十三日にMの處に其女の人が來るから自分にも來て見たらどうだ。何、Mの處に遊びに來たと云ふ事にして其處で偶然に逢つたと云ふ事にすれば何でもないと云ふのであつた。自分はそれを笑つて聞いてゐた。しかし其女の人はそれを知つてゐるのか。自分と同じ程度の意識を以つて來るのか。自分はそれを訊いた。彼女は知つてゐると云ふ事であつた。「それなら未だいゝ。」と云ふ氣が自分はした。

自分はよく知らないが、此Iと云ふ女の人をMの細君が知つたのもさう舊い事では

ないらしかつた。何でも電車の中でCと一緒にゐるのを見たらしい。そしてMの細君はCと知つてゐたのでIを紹介された。其時に「美しい人」だとMの細君は思つたらしい。

それから此Iは二三度Cと共にMの處に繪を見に行つた相である。M夫婦は彼女を厚意を以て迎へた。其中にMの細君は彼女を自分に逢はせよう、世話しようと云ふ氣を起したものらしい。自分の性質や趣味をわりによく解してゐて呉れるMの細君はIが自分とよく調和するやうに、そして恐らくIも亦自分を嫌ひはしまいと思つたらしい。(自分はかう獨りで推量する事を許され度い)そしてある日Cの處に自分をIに紹介し度いといふ手紙を送つた。それは自分がMから最初の手紙を貰ふ以前であつたらしい。此Mの細君の手紙はMの手紙が自分を驚かした以上にIを驚かした。そしてIは矢張り自分と同じやうな意味で其「見合ひ」を斷つたのである。

其頃IはCの家に泊つてゐた。Cは其後自分の寫眞を面白がりながら二階にゐて机に向つてゐたIの處へ持つて行つて笑ひ乍ら見せた。Iは羞かしさの爲めにそれを見ずに疊の上に放つた。しかしCが階下に降りた後でそれを又そつと取つて見た。自分は自分の寫眞がこんな風に扱はれてゐやうとは夢にも知らなかつた。

しかしMの細君は自分がMに送つた斷りの返事をIに屆けた。そして此巧妙な策は有効であつた。Iは此自分の返事に同感を感じ、自分の態度を好ましく思つた。其處へMの細君が自分に對する褒め言葉を注いだ。そんな事から彼女は事によつたら自分に逢つてもよいと云ふ氣を起した相である。

自分はCを餘り好かなかつた。Cは所謂「新しい女」の一人であつた。それにIとつき合つてゐると云ふ動機が自分には氣に入らなかつた。Cは同性の愛と云ふやうなものゝ爲に多くの若い美しい娘を自分の妹分にしてゐると云ふ噂であつた。其の妹分の中にIもゐるのだと思ふと自分は不快でならなかつた。無垢なIはCのその忌はしい友情の動機を知らずに體よく慰まれてゐるやうな氣がした。Mも亦その點は自分に同感であつたらしい。しかし自分は未だ其頃それ程Iの爲めにCを不快に思ふにしてはIに冷淡であつた。

が、自分にはある迷信が起つて來た。即ち事によつたら此Iと云ふ女は自分とある運命の緣が結ばれてゐる女ではないのか、元山に失戀し、其次の女を失戀させた自分は三度目の正直で此女と結びつくのではないか。猶ほ一歩を進めて云ふと、自分が元山に失戀し、二度目の女を好き得なかつたのは、とりも直さず此Iとの戀愛を成就させる爲の運命の計みではなかつたのか、と云ふやうな迷信であつた。自分は此迷信を却けやうとした。が、一方どうもさう云ふ氣がする事を禁じる事が出來なかつた。

其後Mから二十三日に逢ふと云ふ豫定はIの方の都合の爲めに二十五六日頃に延ばす事になつたと云つて來た。で、自分はそれを矢張り「逢はない方がいゝ」と云ふ暗示なのだらうと思つた。「さうだ。矢張り止さう。どうも其方がいゝ。」と自分は思つた。

二三日して自分はMを訪れた。自分は彼の細君がいろ〳〵自分の事の爲めに働いて親切に心配して呉れてゐるのを見ると氣の毒なやうな濟まない氣がした。Mの細君は日延べになつた事をやきもきしてゐるやうな風に見えた。自分はそれを見ると又逢ふのを素氣なく斷るのも惡いやうな氣もした。折角かうして呉れるのに——と云ふ氣もした。併しその義理の意識に束縛されるやうに感じると又それを振り拂つて逃げる權利が自分にあると云ふ氣もした。自分は迷つた。そして一方では元山に對する戀の意識が働いた。「如何なる外部の事にも係はらず平靜に仕事のみをして行き度い。誘惑を遠ざけて。」と云ふ欲望が働いた。しかし此未知の運命に對する冒險家のやうな好奇心もあつた。自分の心は複雜であつた。

Mから端書が來た。二十六日の晩によかつたら來てほしい。はCや、Cの妹と一

緒に來る。しかし君の勝手にしてほしい。自由にして呉れ玉へ。と云ふやうな事がそれに書いてあつた。

自分はどうしていゝのか分らなくなつた。怖ろしい事は近づきつゝある。行き度くもあり、行き度くなくもある。Mも自分に同情して、自分を不安にした事を濟まなく思つてゐて呉れる。併し行つていゝか、悪いか、は誰にも分らない。行くのが善ければ自分は行く。しかし行かない方がいゝと云ふ氣もわりに強くする。少くも行かなければ安全である。平和である。自分は今平和を亂されるのは厭である。しかし既に此處迄リズムが進んで來てゐると厭でも行かない譯に行かないやうな變な誘惑をも感じる。此心の平和を亂す事なく、且つ何人の運命にも些かの不安を與へる事なく、全く無事に其人を見る事が出來るものなら見て見度い。と考へたがそんな事はどうしても不可能な氣がした。蟲が好いと云ふ氣もした。自分か、彼女か、少くも何方か一人が不安な狀態に陷るであらう。それを知り乍ら逢ふと云ふ事は少し罪のやうに思はれて氣がひける。併し何故か大丈夫だと云ふ氣も少しはする。そんなに美しい善い女の人がさうひどく自分を戀すると云ふ事は有り得ない。そんな事を心配するのは自惚のやうな氣もする。どんな運になるか、一か、八か、一つ當つて見ろと云ふ氣もする。ど

んな事があつたつて少くも自分は大丈夫に定まつてゐる。そして自分は運命の與へる物は皆取り入れて生涯の經驗を豐富にし度いと云ふ望みもある。「與へられたものだ。却ける必要はない。」と云ふ簡單な氣も起る。

併し自分の胸は自分の頭が大膽な考へを起せば起す程不安になつた。それが自分一個丈けの事でない事を考へ、又その相手がいくら「しつかりした勝ち氣な人」だとは云へ、か弱い花のやうな乙女である事を考へると自分は此「運命の冒險」が怖ろしくなつた。その人が自分と當然相逢つて、生涯の結合を契るべき運命を持つた唯一人の人だと云ふ事が明かであり、そしてそれが双方の幸福である事が定まつてゐるものなら自分は進んで逢ひもしよう。併し素よりそんな事が分らう筈もない。從つて其「つい定まつて了つた運命」が二人の爲めに幸か、不幸かは分らない。「さはらぬ神に祟りなし」と云ふ氣がする。しかしそれは「どうなる事か全で分らない」事である爲めに其處に好奇心が起り、その盲目の中に却つて興味もあつた。而も之れは興味の問題ではない事を知つてゐる。

自分は深夜の書齋を一人彼方此方歩き廻つた。壁にはトルストイや、ドストエフスキーや、ストリンドベルヒや、ゲーテ、マーテルリンクの額が懸けてある。「どんなもの

でせう。逢つたものでせうか。逢はない方がいゝでせうか。どうか教へて下さい。私には判斷がつかないのです。」自分は其一人々々にかう質問をかけるやうな氣持でそれ等の顏を順ぐりに見た。

自分は葉書で斷りの返事を書かうとして机の抽斗を開けた。しかし葉書はもう一枚も無くなつてゐた。それは其時の自分にはある暗示のやうな氣がした。「輕卒に定めて了ふな。もつとよく考へろ。斷るのは譯はない。併し之は大變な事だ。」そんな氣がした。自分は葉書がなくなつてゐた事が却つてよかつたやうな氣もした。自分は微かな安堵を感じた。かくて迷ひは又引き延ばされた。自分は床に就いてとり止めもないいろいろの事を考へた。全つきり他の事を考へたりしながら。

翌朝自分は例の如く創作をした。氣分はわりに落ちついてゐた。しかしとにかくMには何とか返事をしなければならないので自分で端書を買ひに行つた。毎(いつ)も自分は十枚づゝ端書を買ふ習慣になつてゐた。十枚位の端書は直ぐなくなつて了ふ。いつそ澤山買つておいた方がいゝのだが、矢張り十枚づゝ買ふ。此時も二十枚買はうかと思つたが、矢張り十枚買つて歸つて來た。

ペンを取り乍ら自分は又考へた。しかしいくら考へても同じであつた。之は「考へ」

の問題ではない。それ以上の「經驗」の問題だ。だからいくら考へた處で解決は得られない。と云ふ氣がした。「運を天に任せて定めて了ふよりない。それならいつそ斷つて了はう。矢張りそれがいゝ。」と自分は決心した。實際自分はこの自分を惑はし、心の平和を奪ふ事件――それは最早未發の事件ではない。既に始まつてゐるのだ。――が少しうるさくなつてゐた。邪魔物に感じられた。それで早く此幻のやうな仕事の障害を追ひ拂つて自由になり度い氣がした。

自分は思ひきつて「斷り」を書いた。「いろ〳〵君達に心配をかけた。其君達の厚意と親切は忘れないが、どうも僕は行かない方がいゝと思ふので、折角だがお斷りしようと思ふ。惡しからず思つて呉れ玉へ。僕の氣持は君はよく解つてゐて呉れると思ふ。どうか君の細君にも宜しく。君達にお禮を云ひ度い。」こんな意味の事を自分は書いた。それは四月の二十六日であつた。

自分は之を書いて了ふとほつと重荷を卸したやうな氣がした。煙草を喫かし乍ら自由な氣分になつた。

しかし自分はそれを女中に出させようとしたが、或る者がそれを引き止めるやうな氣がして暫く机の上に載せて置いた。「そんなに急ぐ必要はない。」と自分は思つた。

雨は降つてゐた。書齋は薄暗かつた。自分はしよんぼり机に向つてゐる自分を意識した。その姿は淋しくて、如何にも孤獨な感じを與へるものであつた。自分は一人で此机に向ひつゝ淋しさの爲めによく泣いた。失戀の淋しさと、彼女の運命の爲めに泣いた。嚴肅な人生を慕ふ緊張の爲めに泣いた。しかしわきにゐて自分を慰めて呉れるものは友以外にはない。自分の仕事と、遠い西洋の天才達と、その仕事とは自分のわきにゐる。しかし自分の内の或る者は猶ほ其他の手近い慰安者に飢ゑてゐる。異性の慰めに飢ゑてゐる。そしてもし此Iと云ふ人が自分のわきに來る事になれば自分の味氣ない生活はどんなに色附き、華やぎ、愛のうるほひを帶びて來る事であらう。どんなに明るくなる事であらう。然らば何故其幸福を拒むのだ。

自分は又ゴヤの本を開いて「ある令孃の肖像」を見た。

迷ひは又來た。「斷る事は不可能だ。」と云ふ氣がした。自分はグィ〳〵自分を引張る或る牽引力を感じた。そしてそれと戰つた。

抑壓力は再び優勢になつた。「何を何時迄迷つてゐるのだ。斷る理由は十分ある。斷れない事があるものか。」自分はかう思つた。しかし自分は苦しくなつた。それで時間を潰ぶす爲めに公園へ散歩に行つた。歸つて來て相變らず母と差し向ひで夕食をした。

云ひ忘れたが自分はずつと母と二人で暮してゐたのだ。

「母は自分の結婚を望んでゐない。少くも後四五年は未だ望んでゐない。それが遲ければ遲い程いゝと思つてゐる。母と自分とがかうして何時迄も一緒にゐられる爲めに。母自身の爲めに。」と自分は思つた。たしかに母は自分に結婚の沙汰が早く起る事を怖れてゐる事は自分には明かであつた。

自分は今母に反感を感じた。自分を可愛がつてゐ乍ら母自身の爲めに自分の幸福を犧牲にさせ度がつてゐるやうな氣がした。自分は母と狹い室で食事をし乍ら母の束縛を感じた。母との味氣ない單調な生活に厭氣を感じた。自分はもうそれに飽きた。さう何時迄も「母の子供」でゐてはたまらない。自分ももう二十七だ！など、思つた。自分は母が何と云つても碌に返事もせずに無愛想にむつつりし乍ら飯を食べた。さうして「今夜彼處へ行けば其人が來てゐるのだ。逢つてやらう。」と云ふ氣がした。

併し書齋に上ると又氣は變つた。母が不愍に思はれた。いろ〳〵の母の愛を思ひながら七十近い彼女を一人にするのが可哀想に思はれた。自分は母を愛してゐる。机の上には未だ先刻の端書が其儘に置かれてゐた。ゴヤの本も載つてゐる。又自分は迷つた。もう七時になつてゐる。もうそろ〳〵其「美しい人」はMの處に來てゐる時分だ。

行くのも恐ろしいし、行かないのも苦しい。今夜行かずに自家にゐたら自分はどんなに苦しいだらう――と思ひながら何處か他に行く處はないか、氣の變る場所はないかと思つたが、之と思ふ處はなかつた。いつそ又元山の處へでも出掛けて見るかとも思つたが、此前に出掛けてひどい目に逢つた事を考へると迚もそんな勇氣はなかつた。

自分はいよ〳〵落ちつかなくなつた。時計を見たり、ハガキを見たり、室の中を歩いたりした。とう〳〵自分は此ハガキを出しがてらに何處か足の向く處へ出掛けて見よう。迚も此儘で自家にじつとしてはゐられないと思つた。そして自分は其斷りの葉書を懷に入れて表へ出た。四月としては肌寒い風が吹いてゐた。

五

自分はポストの前へ通りかゝると懷に手を入れて例の端書を出さうか出すまいかと迷つた。自分は立ち停まつたが併し端書は出さなかつた。さうして自分は何と云ふ事なしにMの家の方に向つた。とにかくに逢はう。Mに逢ひ度い。Mと逢へば落ちつくだらう。と思つた。しかし其人が來てゐたらどうだ。自分の肌身は緊張してをの〻いた。丁度自分が怖る〳〵元山の家に近づく時のやうに。併しもつとアテのない不安を

以て。自分は或る力に牽きつけられるやうな氣がした。しかしかうして出歩るいてゐれば自分の書齋にゐるよりはずつと樂だ。とにかくMの家のわき迄行つてMの室に客が來てゐない樣子だつたら入つて見ようか、それがいゝと思つた。Mの室は表の通りに直ぐ面してゐるので外からでも自分等には室の中の樣子が大抵分るのである。

自分はとう〳〵Mの家の前迄來た。Mの室には灯りが點いてゐたが、客の來てゐる氣合はなかつた。で、自分は門の方へ引き返して其處から「離れ」になつてゐるMの室に廻つた。

Mの夫婦は待つてゐたやうに出迎へた。自分達は顏を見合はせるとお互にほゝ笑むだ。自分はフアミリアを感じた。やつと落ちついたやうな氣がした。素より其の女の人は未だ來てゐなかつた。

自分はMに斷りの端書を書いたが、自家にゐると餘り落ちつかないので、來る心算でもなく來て了つた事を話して申し譯に笑つた。M夫婦も笑つた。そしてもう少し經つと其人がC達と一緒に來る筈だと云つた。

Mの細君は此晩普段着を着てはゐなかつた。さうして二室並んでゐる室の一つ、卽ち細君の居間になつてゐる室には中央にテーブル掛けを被つた臺が据ゑてあり、其上

には饗應の用意がちやんと整へてあつた。小さな花瓶も置いてあつた。自分はそれを見て少し驚いた。しかしある興味も感じた。自分はほゝ笑むだ。すべてのものがほゝ笑むでゐるやうに感じた。

自分の性質をよく知つてゐるM達は自分が此晩來ずにはゐられないだらうと云ふ事、屹度來るに違ひないと云ふ事を豫知してゐた樣子であつた。しかし自分はM達とさうして自由に話しをしたり、Mの細君のいそ〳〵した快活な調子を見たり、此室のかく用意された空氣を吸つてゐる中に何となく其Iと云ふ女の人に逢ふ事も自分が自家で一人で想像してゐたやうに六ケ敷い事ではない。それ程大變な面倒な事でもない。もつと氣輕に出來る事のやうに思はれて來た。そしてそれはむしろ面白い、樂しみな事のやうに思はれて來た。

自分は來てよかつたと思つた。そしてこはい氷の張つてゐたやうな自分の氣持は解けてくつろぎ、恐怖の好奇心には樂しみと、興味とが交つて來た。自分の心は矢張りをの〻いてゐた。しかしそのをの〻きには明るい希望と、甘い樂しみとがあつた。自分は此何となく嬉しい不安の爲めに興奮するのを抑へようと骨折つた。

M夫婦は此運命に樂觀してゐる樣子であつた。殊に細君の方は樂觀しきつてゐるや

うに見えた。それは自分を心配させまいとして態と樂觀してゐるやうに見せる事を努めてゐるのだとも思はれた。併し事實樂觀してゐるらしくも見えた。それが自分には不思議であつたが、有り難い事であつた。自分は二人の顏に表はれる眞情を讀まうとした。しかしMもわりに樂觀してゐるやうに見えた。又それなればこそ彼等も此冒險を敢へてするのだらうが、內心多少氣がゝりでない譯でもあるまい抔と思つた。

「屹度大丈夫ですわ。うまく行くに定まつてゐますわ。」と云ふやうな事を細君はほゝ笑みながら云つた。「どうだか。そんな事が分るものか。」と自分は思つた。しかし何となく凡ての容子がうまく行き相にも思はれた。細君は自分にIの家がしつかりしてゐる事抔を話した。

自分はMと例の如くいろ〳〵の雜談をしてゐた。さうしてゐる中に八時は過ぎて八時半になり、もう直き九時にもなると云ふ時刻になつた。細君は頻りに待遠しがつた。Mも「おそいね。」と云つた。

「どうしたんでせう。屹度Iさんはゆつくりおめかしをしてゐるのよ。一世一代の大事な場所だと思つて。尤もこんな時におめかしをしなかつたらする時はありませんからね。少しは手間が取れるのも無理はありませんわ。」こんな事を細君は云つて笑はせた。

自分も少しおそいと思つた。そして或は來ないのではないか。來なければ來ないでいゝ。此方も永久に逢はない丈けだ。矢張り其方がいゝのだらう。此處迄來て向うが來ずに逢はないのなら此方も諦めがよくていゝ。とも思つた。しかし一方少し物足りない氣もした。結局「何方でもいゝ。なるやうになれ。」と云ふ氣になつた。

細君はCの家に電話をかけに行つた。其返事によると「今出掛けた處だ」と云ふのであつた。自分丈はその呑氣な悠長を笑つた。しかしいよ／＼來るのだなと思ふと自分は又少し不安になつた。と、同時に「もうどうしても逃げられない」と云ふ氣が強くした。何となく自分が或る見えない力によつて其處に牽きつけられ、此避くべからざる運命の關を通過する迄はもう否でも自分の力では此場を動く事は出來ない。と云ふやうな氣がした。

自分は落ちつかない氣持でMと話しをしたり、畫を見たり、細君の云ふ言葉に注意深い耳を傾けたり、起つたり坐つたりした。自分は不安を祕さうとしたがそれは困難であつた。自分の平氣らしく云ふ言葉は何となく空々しく、上つ面であつた。

猶ほ三十分が過ぎたと思ふ頃「御免下さい。」と云ふ女の聲が上り口にした。ハツと自分は思つた、思はずMと赭らむだ顔を見合はせた。細君は自分に輕い笑ひを見せ乍ら

飛ぶやうにして上り口へ行つた。賑やかな女の聲が笑ひ聲に交つて聞こえた。Mも起つて行つた。

自分はCの聲を聞いた事はなかつたが、Iの化粧が手間取つた爲めに遲くなつた辯解を大きな聲でMの細君に話してゐるのがCであると云ふ事は分つた。もう揶揄つてゐるなと自分は思つたが別に不快は感じなかつた。Cの妹らしい人の聲も聞こえた。しかしIの聲らしい聲は殆んど聞こえなかつた。三人の女の客は上り口の處でコートを脱いでゐる容子であつた。素よりそれは自分には見えなかつた。自分は其處に坐つてゐる譯に行かないで、一寸機械的に立ち上つたが、立つた處で仕方がないので又坐つた。Mが笑ひ乍ら戻つて來た。自分の胸には動悸が打つた。

其時襖の先きにCが見えた。自分はCを見た事はあつた。彼女は顏色のよくない大きな女であつた。Cは笑ひ乍ら愛想よく自分に御辭儀をした。自分も多少氣まりが惡いのを微笑を以て胡麻化し乍ら輕くお辭儀をして頭を上げるとCの後ろに白粉をつけた女が見えた。其女の人を知らなかつた自分はハツとして「之」がさうかと思つた。しかしさうではない、之はCの妹なのだと思ひ乍ら其人と同じやうに挨拶を交はした。すると又その後ろに女の束髪が見えた。自分はその束髪を一見して直ぐ之だなと思つた。

しかしその顔は見えなかつた。其人は自分の方を向かずに強ひてMの細君の方を向いてゐた。それで自分は猶更さうに違ひないと思つた。併し自分は其方を見る勇氣がないのでMの方を向いたり、疊の上の繪の方を見たりした。

自分は又頭を擡げた。其時Cは退いてMの細君にすゝめられた場所に著いた。それでCの後ろにかくれてゐた三番目の女の人の姿は、自分の眼に映らなければならなかつた。自分はあわてゝ眼をそらした。しかし自分は其時既にその女の人から最初の善い印象を受けてゐた。が、自分がその印象を意識する間もなくCの次ぎにゐた女の人も其處を退いて自分の席に移つた。それ等の動勢は凡て其第三の當人を露はに自分に見せる爲めの所作のやうに自分には思はれた。

Mの細君は、窮し切つてゐる自分に笑ひ乍らその第三の女の人を紹介した。自分と其女の人とは挨拶しない譯には行かなかつた。逃げ場所のない自分は赤面し乍ら仕方なしに切ない苦笑をつゞけた。併し——自分はそれに無意識であつたが——自分は怖れ乍ら其女の人を鋭く見る事を忘れなかつた。再びハタと善い感じが自分に當つた。

「之はいゝ。馬鹿にいゝ。之ならラヴ出來る。」と自分は感じた。其感じは自分には全く思ひがけないもの、豫知し得なかつたものであつた。その現實の美感は自分のアテ

のない想像を遙かに超えて強かつた。そして自分はその特別ないゝ壓迫の感じ——それは眞に驚くべきものであつた——の爲めに意識を混亂されて、譯が分らなくなつたやうであつた。

實際自分は少からず驚いた。「こんな人だとはてんで思ひもつかなかつた。見當がつく筈がなかつたのだ。こんな人がゐやうとは。何と云ふ善さだ。美しさだ。之は自分には善過ぎる。美くし過ぎる。迚も駄目だ。」こんな氣が誇張なくした。

自分は此時の感じを正確に詳しく此處に書き現はす事は到底出來ない。言葉は餘りに部分的なものであり、記憶と云ふものもさう當てにはならないものだから。しかしまあ危げな記憶を辿つて書ける丈けは書いて見よう。

六

自分は、しかし、此Iと云ふ人を見てある親しみ難い感じをうけた。何故と云ふに自分はかゝる種の異性の美には餘りに慣れてゐなかつたからである。自分の見慣れてゐた異性の美は此Iの美とは餘りに違つてゐた。從つてかゝる種の美しさを全(まる)で想像する事の出來なかつた自分がIを見た瞬間に或る驚異の感に打たれたと云ふ事はどの

道不思議はない事であつた。誰でもさう云ふ場合にはそんな感じを受けるものだと人は云ふであらう。併しさうは限らない。自分の慣れてゐる種の美に接して戀を感じる事は一層珍らしくない事である。現に自分は元山を見た時かゝる種の驚異を感じなかつた。そして直ちに自分との共鳴を彼女の内に感じた。近似を感じた。然るに自分は今此Iを横から見て何等の近似を感じる事は出來なかつた。彼女の裡には自分は少しもないやうな氣がした。自分の裡にも亦彼女の分子は見出す事が出來ない。二人は全くたちの違ふ、緣の遠い人間であるやうに自分には思はれた。

自分は自己に失望した。自分の醜さを意識した。體の穢れを意識した。さうして自分には彼女に接近する資格のないやうな氣がした。それにしては彼女は餘りに清く、餘りに高潔で、神聖であるやうな氣がした。

Mの細君が次の室から自分を呼んだ。自分を正座に着かせやうと云ふのである。八疊と六疊との二つの室は並んで間の襖は開けてある。だから何方にゐても一つ室にゐるやうなものである。自分は女客の方に脊を向けてMの方を向いてゐた。併しMも亦起つて次の室へ行つて自分を呼んだ。自分は困つた。自分は女達のゐる次の室へ、殊にそのIのゐる室へ圖々しく出掛けて行く氣には中々なれなかつた。行つて見たい氣も

なくはなかつた。さうして結局行く事になる事も知つてゐた。併し自分は其厚かましさには閉口であつた。自分は其處に意識的な意味を以て行かなければならない。よし意味があつたにせよ、それに無意識で行くならそれは割りに樂に出來ない事もあるまい。若い女達の席へ交つて著くと云ふ事は自分には意識的にならずには出來ない事であらうが、それでも露骨に「見合ひ」と云ふ意味で行く程困難ではない。人間の生涯には隨分氣まりの惡い閉口な機會もあるものである。併し氣まりの惡いと云ふ事は自分が女々しく卑下されて感じられる爲めに自分のやうな勝ち氣の男には一層閉口な事である。「どうしようかな。」こんな獨り言を呟き乍ら自分は起つたり坐つたりした。その室に殘つてゐる者は最早自分一人であつた。さうして皆は隣りの室から自分の子供らしい逡巡を笑つた。自分はもつと自分に權威を感じよう、自分の前に連れて來られる女を見下ろす帝王のやうに尊大でゐようと思つて努力した。さうしてとう〳〵思ひ切つて次の室へ行き、MとCとの間の正座に坐つた。かうなるとM一人が賴りになる味方である。もし此時Mが傍にゐなかつたならば、自分は云ふ迄もなく疾くに此席を逃げ出したであらう。

角に坐つてゐる自分の右にはMが坐り、其先きにはMの細君が並んで坐つてゐた。

自分の左にはCが坐り、其次に少し隔つてIが坐り、自分の眞正面にはつい其頃ある畫家との婚約が整つたCの妹が坐つた。

いろ〳〵の御馳走が持ち運ばれた。自分は何を喫べたか覺えてゐない。さうして自分は依然としてMとのみ上つ面な調子で何かと話しをした。しかし自分は自分の云ふ言葉や自分の聲を「彼女」が聞いてゐる事を意識するので何時ものやうに自由には饒舌れなかつた。さうしてそれとなく氣取つた調子で談してゐた。なるべくガザツにならないやうに、誰に聞かれても馬鹿にされ、卑しまれないやうに、品よく談さうと努めてゐた。

中々賑かであつた。Iは默つて、なるべく下を向いてすましてゐた。さうして女の中では重もにMの細君とCとが饒舌つてゐた。殊にMの細君は賑やかなたちなので其二人丈けが饒舌つてゐても陽氣であつた。それにCの妹が時々饒舌つた。Mも亦話し上手で座を白けさせるやうな事はなかつた。さうして好い調子で折々冗談を云つて一同を笑はせた。自分は此場の「氣のおけない」氣分に引き込まれた。さうして暫く其處にゐる中に段々自由になつた。意識が柔かく、樂になつた。

Iは無論盛裝をしてはゐなかつた。そして普段着と他所行きの間位に思はれるなり

をしてゐた。むしろCの妹の方が丁寧な扮裝をしてゐた。しかしIは眼立つなりをしてはゐなかつたけれどもどんな晴れの席へ出ても見劣りのしないやうなキチンとしたなりをしてゐた。さうして見かけよりはその裝りの凡てに念が入つてゐる事は自分にも分つた。手の入れ方が上手で、垢抜けがしてゐて、趣味が非常にいゝと自分は思つた。髪の結ひ方や、顏の化粧には殊に自分をよく自覺した巧妙さが現はれてゐると思つた。又それ等と着物との配合や、恰好のつくり抔も最も要領を得てゐると自分は思つた。そして滿足を感じた。

矢つ張り抜け目なく眺めてゐたのだなと人は笑ふであらう。然り、勿論自分は次第に落ちつきを感じると同時に何かの折をうかゞつてはIの方を貪るやうに偷み見てゐたのであつた。勿論自分がIに見恍れてゐるやうには人に氣づかれないやうに注意してゐたが。自分は既にIがすつかり氣に入つてゐた。さうして素より、Iからも好かれる事を望んでゐた。それ故自分は自然眼立たないやうにつゝしむ氣になつた。

自分の處からは矢張りIの横顏しか見られなかつた。而も自分は其横顏を恐しく美しいと思つた。後で自分が知つた範圍では、Iは横顏が最もいゝので此時Mの細君達が態と自分の席からはIの横顏が見えるやうな場所にIを据ゑたものであるらしい。

Ｉ以外の女の連中は此會合に興味を感じてゐる容子であつた。彼女等はＩの美しさの爲めに自分がＩを氣に入る事は疑ひない事と思つて其方は樂觀してゐるらしかつた。只Ｉが自分を好くか、嫌ふか、それが彼女等には懸念であつた。併しそれは恐ろしい冒險である丈けに殊に女の傍觀者には興味の深い事であつたに違ひない。彼女等は自分とＩとの氣合ひに注意を傾けた。しかし此場合、自分はその興味を少しも不服には思はなかつた。自分はとにかくＩのやうな女の人に逢つてゐると云ふ事が滿足だつたからである。此席の空氣が愉快で、樂しかつたからである。自分の内には此時彼女に對するいゝ感じの導火線によつて愛の火が點されてゐた。で、自分はその溫愛の光りを一同の人々に向つて放たずにはゐられなかつた。自分はＭ夫婦に一層の親愛と感謝とを感じた。Ｃに對しても自分は少しも不快は感じなかつた。むしろ彼女が自分に對して意外な厚意を示して自分とＩとの間に運命の合一が成立する樣に望んでゐるらしく見える爲めに此方からも厚意を感じた。

一座には段々興趣のリズムが高まつた。齡の話が出た。誰は十二支の何の齡に當ると云ふ話が出た。自分はその順番がＩに廻つた時返答をしなければならないＩの心に同情した。「妾「午」ですの。」と彼女は困つたやうに愛苦しい善良なほゝ笑みを以つてＭの

細君に答へた。自分はＩのほゝ笑みを見ると一緒にほゝ笑まずにはゐられなかつた。さうして益々Ｉが好きになつた。自分につり合ふにしてはＩが少し無邪氣で溫良に過ぎるやうな氣も一方にしたけれど。「丙(ヒノエ)？」と誰かゞ云つた。彼女は笑ひ乍ら「まあ……」と云つて打ち消した。皆は笑つた。

Ｍの細君の用箪笥の上には鋼で出來た昔風の小さな箱入りの鏡があつた。Ｃは何氣なしにそれを取つて開けた。そしてそれをＩに渡して「一寸御覽なさい。」と云つた。Ｉはその鏡に自分の顏を映すのを羞かしがつた。しかしＣやＭの細君に强ひられてそれを一寸見た。自分は氣の毒な氣がした。しかし彼女の羞恥が或は自分がゐる爲めかと思ふと嬉しい氣もした。

しかしそんな事の内に自分は次第にＩに對してあるファミリアを感じて來た。全然自分とは緣の遠い人と始めには思はれてゐたＩの内にはいくらか自分と共通點もある。從つて自分の内にも亦彼女の分子もあるのだと云ふ氣がして來た。自分は朧氣ではあつたが、彼女の内に自分の俤を段々に見出したやうに感じた。さうして自分に缺けてゐる光明の美德を生れ乍らに備へてゐるやうに思はれる彼女に自分が接するやうになつたならば自分は今よりもずつと淸められ、高められて善くなるであらうと云ふやう

な氣がした。そしてもしそんな運命になれたらどんなに幸せだらうと思つた。彼女は氣高い性質を持つた女であると信じた自分はそのデリケートな善美に觸れるにしては目分が餘りに荒々しく、猛惡で、あくどい人間であるやうに思はれた。素より自分はそれ程簡單な者でもない。併し彼女が餘りに白く、清いので、その側に並ぶと自分が如何にもどす黑く濁つてゐて粗野であるやうな氣がしない譯に行かなかつた。がとにかく自分は今しんみりした善い氣持ちになつた。さうして如何に表面では快活な空氣に浸らうとも自分の深い意識は嚴肅であり、且つ眞劍であつた。

自分は恐悅の爲めに調子に乘り相になるのを怺へた。さうして自分が如何にも悅に入つてゐるやうに皆から思はれないやうに努めた。自分は彼女が一度位は自分の方を向いてもよさ相なものと思つたが、彼女は遂に終り迄一度も自分の方を見なかつた。自分は其處にある努力があるやうな氣がした。しかしその努力をはつきり「有望の印し」に解釋する丈けの意識的な自信もなかつた。

自分は彼女の笑顏を見ると安心して喜んだ。何故ならば彼女がもし自分に不快や、反感を感じ、自分のゐる事が厭であつたならば彼女はそんな風に快い笑みを洩らす事は出來ないであらうと思つたからである。自分は彼女が自分を滿更嫌つてはゐないの

だらうとも思つた。しかし溫和しい彼女は女らしい善良な性質と、Mの細君やM達に對する遠慮の爲めに强ひて自分に對する嫌厭の情を押し隱してゐるのかも知れないとも思つた。自分には彼女の心は解らなかつた。で、どうかして彼女に善い感じを與へたいものだと思つた。

十一時頃になつてI達は歸る事になつた。Mの細君はもう少しと云つて止めたが餘りおそくなるので一同は互に挨拶した。自分はIにもわりに丁寧にお辭儀をして彼女に對する自分の厚意を示さうとした。しかし皆んなの手前さう露骨には出來なかつた。

O達は立ち上つた。Iは一番後から立ち上つた。Iは何方かと云へば小柄な女であつた。何でも大きいのが好きな自分はIの脊が高ぐないのを見て些か物足りなさを感じた。五尺五寸ある自分とすれ〳〵なCは非常に大きく、その妹の人もわりに大きかつた。それでIはその對比の爲めに一層小じんまり見えた。「もう少し脊が高いといゝが。」と自分は思つた。「しかしあれ丈けの美しさを持つてゐればあれで十分だとしなければならない。」とも思つた。三人は歸つて行つた。自分はIの去り行く後ろ姿を見た時ある淋しい愛を感じた。

自分は後に殘つた。見合ひは濟んだのである。そしてそれは自分にとつては十二分

に滿足なものであつた。自分は先刻の樂しい空氣が未だ漂つてゐる其室に何時迄も殘つてゐたいやうな氣がした。其室にゐて、M達と會つてゐれば落ちついてゐられるが之から表へ出て自家に歸れば不安になる事は定まつてゐる。それは辛らいことだと思つた。しかし自分の受けた心持ちを今直ぐに打ち明ける譯にも行かず、餘り遲くもなるので自分も亦M夫婦に愛と感謝とを感じ乍ら「左樣なら」と云つて表へ出た。

自分はMの家の門を出ると其處にI達三人は未だ立つてゐて、何方の停留場に行くのが近いかを談じ合つてゐるのを見た。自分はハッとした。自分は何か云はうかと云ふ氣もした。しかし三人の女は先刻室の中で會つてゐた時とは全で違つて、如何にも他所〳〵しく近寄り難くしてゐるやうな氣がした。で、自分は三人の方に、併し實はIに向つて帽子を取つた。そして女達がお辭儀をしてゐるのを横に見乍らさつさと自分の道の方に進んだ。どうか電車には一緒に乘り度くない。早く行つて了はうと思つて足を急いだ。

七

混沌とした頭をかゝへて十二時頃自家に歸つて來た自分は眠られない事は知つてゐ

たが、ぼんやり只起きてゐても仕方がないのでとも角も寢床へ入らうと寢室へ行かうとした。自分は母を起すのを怖れてそつと歩いた。しかし母は毎ものやうに矢張り眠覺めてゐた。

「今歸つたの。」と母は寢室から聲をかけた。

「え。只今。」

「Mさんの處で何かあつたの。」母は又かう訊いた。自分は「察してゐるな」と思つた。しかし「え、一寸。人が集まつたのです。」とごまかした。そして逃げるやうに自分の寢室へ行つた。自分は母の神經に觸れるのを厭ひ、又母からも自分の神經にふれられるのを厭ふ。「ぶつかる時が來ればいくらでもぶつかつてやる。此方の話が定まつた時には。しかし定まらない中に心配させる必要はない。」と自分は思つてゐた。さうして其時が來る迄はなるべく當らず觸はらずに此話を避けてゐやう。殊に今そんな事を打ち明けた處で只母を一晩空しく夜明かしさせて弱らす丈けの事であつた。

自分は寢床の中でいろ〳〵の事を考へた。Iの印象が強く〳〵頭に漲つてゐた。そして自分は彼女を最初に一見して、「これは馬鹿にいゝ。之ならラヴ出來る」と感じた瞬間に既に戀し始めてゐた。彼女とは遂に一言も口を利かず、一度の視線すら交へなか

つたけれども。さうして今ではすつかり戀に陷つて了つてゐる事を――それはMの家にゐる時や、電車の中で既に感じた事であつたけれど――一層明かに意識した。「とうとう又戀して了つた。大變な事になつた。」と自分は興奮して思つた。

と、自分は直ちに元山を聯想した。Iに逢ふ迄は元山に對してそれを不義な事のやうにも思つたが、今ではそれも避くべからざる運命に迫られた結果で、別に自分の罪ではない、仕方がない事だと思つた。とは云へ元山の事は矢張り氣になつた。自分は自己のIに對する戀愛を辯護する理由を探しながら此二人の甚しく異る戀人を對比してゐた。そして元山に對する自分の戀は無理であつたが、今度の戀には無理がない事、又深い必然性がある事、さうして自分の配偶者になるにしてはいろ〳〵の點に於てIの方が適當である事抔を考へた。そして自分はそれ等の必然性の爲めに今度は何となくうまく行き相な氣もした。迚も駄目だらう。Iは自分を好くまいと云ふ氣もカナリ強くしたけれど。自分は到底眠れる處ではなく、不安の興奮の爲めに我身を持て餘した。

自分は一方に又どんな風に此話を母達に持ち出すかとか、又此話が自分の家族にどんな風に反響するか、誰はどんな顏をして何と云ふかとか、そんな事を最早起つた事

のやうにあり〳〵と想像する事で一層興奮した。皆は喜ばないであらう。或者は驚き、ある者は反對し、蔭で惡口を云ひ、嘲笑し、輕蔑するであらう。自分の兄達は三十を大分越してから遲く結婚し、そして自分は未だ一文の金も取らない彼等の輕蔑する文士である。しかし無論自分はどんな事があらうとも必ずそれを打ち破つて自分の運命の爲めに鬪ふであらう。そして無理にも自分の意志を通すであらう。縱令家出をしようとも、どんな物質的窮迫に逢はうともそんな事は何でもない。自分は此點の自分の暴力に對する怖ろしい自信を意識し乍ら思つた。かくて甚しい「戀のエゴイズム」は邪推深い反抗心によつて煽られた。併し自分の意識には到底其盲目な力を制する丈けの力も意志もなかつた。「だが俺が非常な勢でぶつかつて行く必要もなく、此事は存外易易と片がついて了ふかも知れない。それに母はわりによく解つてゐる。兄達も解つてゐる。大丈夫だ。」自分は彼方此方寢返へりを打ち乍らかうも思つた。

翌朝自分が起きたのは十時過ぎであつた。午後Mが丸善の歸り路だと云つて來た。Mは自分がどんな容子であるか、昨夜の結果はどんな風であつたかをそれとなく探らうとして來たのであつた。

とう〳〵自分は先きに口を切つた。Mは遠廻はしに謎をかけるやうに「わりに善い

人は善い人だ。」とIの事を云つた。自分のIに對する感情が未だ彼にはよく解つてゐなかつたので「わりに」と遠慮して云つたのであつた。

「わりに處ではない。非常に善い人だ。」と自分は聲高く云つた。Mは喜んで笑つた。自分も笑つた。

「ではわりに氣に入つたね。」とMは云つた。

「勿論。すつかり氣に入つた。昨夜は夜明しゝて了つた。」自分は笑ひ乍らかう答へた。

「君の氣に入つた樣な氣も一方してはゐたが、それはまあよかつた。」とMも重荷を卸した樣に安心して云つた。自分はしかしIの方で何うだか、それが心配だと云ふとMは「そんな事はあるまい」と云つた。自分はさう云つてほしかつたのだ。Mは「今日F子がCの家に行つてゐる筈だが、安心してゐていゝと思ふな。向うだつて屹度君と同じなのに違ひない。確な事はF子に聞いてからどうせ直ぐ君に知らせるけれど。」と云つた。

二人は猶ほその事に就いて暫く話をした。Iの家に就いても。しかし餘り多くは話さなかつた。自分はMの歸りを公園迄送つて行つた。

希望と、感謝と、喜びと勇氣とが自分の内に湧き立つた。自分は興奮して腕を鳴らし乍ら力一杯に踏んで歩いた。「屹度うまく行くぞ。どんな事があつても旨く行かせず

におくものか。」と獨り言を云つた。

自分の運命に干渉すると云ふのでMに對して抱いた不服は今や更に無くなつて感謝に變つた。さうしてむしろMが此事によつて自分等の運命に干渉して呉れた爲めに自分とMとの運命的友誼の鎖も一層永久的な堅固なものになるであらうと思つてその事を喜んだ。又希望した。

其晩Mから端書が來た。自分は飛びつくやうにそれをよんだ。それにはIも自分と同じやうに昨夜は夜明かしした事、さうして口では云はないが、自分を戀した事は明かである事が書いてあつた。「もう殆んど全部安心していゝと思ふ。」と終りに書いてあつた。自分は躍り上つて喜んだ。しかし之でいよ〳〵自分の女に對する運命も落着したのかを思ふと何だか飽氣なかつたやうな氣もして喜びと同時に變な氣もした。しかし見かけは飽氣なくてもいゝのだ。內容はいくらも深くなつて行く事が出來る。それでいゝのだ。なるべく事件は少い方が自分のやうな仕事家にはいゝ。片がつくものは早く片づいた方がいゝ。これは運命の意志で、自分が早く自分の仕事に沒頭する事が出來る爲めであるに違ひない。而も新しい生活が其處に開けて行くのだ。決して飽氣なくはない。と思ふと又不安にもなつた。しかし未ださう思ふのは早過ぎる。未だ確定

した譯ではないのだ。二度三度と逢ふ中にIが自分を嫌はないものでもない。餘り早くいゝ方に取り過ぎて後で又アテが外れて苦しむでは堪らない。少し惡い方に取つておく方が安全だとも思つた。實際自分は未だ不安であつた。

八

二十九日の午後自分は又Mの端書によつて彼の家を訪ね、其處で再びCと一緒に來たIと逢つた。事件は進んだ。併し自分はIの態度が先夜始めて逢つた時とは大いに變つてわりに落ちついてゐるのを見て驚いた。彼女は自分にもう慣れてゐた。自分は彼女の顏を正面から見た。

自分は次の室でMの机に倚り、Iに宛てた手紙を書いて見たがうまく書けなかつた。自分は彼女に嫌はれ、輕蔑されてゐるであらう。と云ふ事許りをくどくゝ書いてゐた。實際そんな氣がひどくしたのだ。自分は彼女と二人でMの室に入れられた。併し二人は何も話す事が出來ないので、自分は筆談しようと思つたのであつた。

自分はそれを彼女に直かに渡す事が出來ないでMに賴んで渡して貰つた。彼女はそれを讀んで驚き、笑つた。彼女は其返事を書く事になつた。併しIにも書けなかつた。

何と書くか、書く術を知らなかつたのである。實際こんな時にうまく書けるものではない。只彼女は口で「貴方の被仰る事は全で反對です。」と羞しさの爲めに笑ひ乍ら、しかし眞劍に疊に指で何かを描きながら云つた。その愛らしさに自分はをのゝいた。さうして「そんな事はない。」と云ひ乍ら興奮して二つの室を虎のやうに歩き廻つた。Iは暫くしてCと共に歸つて行つた。自分はCにそろゝゝ不快を感じ出した。同時にIに對する戀愛は益々火の手を加へた。

翌日であつたと思ふ。二人は又Mの家で逢ふ事になつた。もう事は定まつてゐた。しかし自分は彼女が最早自分との結婚を定まつたものと思つてゐるかのやうに彼女の家の方は斯々であると云つた時、喜ぶと共にハツとしてあるたじろぎを感じた。そして內心彼女を厚かましく感じて、少し驚いた。彼女は少しも圖々しい譯ではない。併し自分は餘りに話がうまく行き過ぎて、豫想外に早く定まつた故か內心いさゝか面喰つたのである。自分は彼女を強く愛し、彼女からの愛の返報を熱望し、そして彼女と結婚する事の一日も早い事を望んでゐた。明日でも、今直ぐ此場でゞも出來る事なら早くさうし度いと望んでゐた。さうして彼女は殆んど自分の理想通りの返答をしてゐるのだ。それにも拘はらず自分は丁度非常な熱心を以て求めてゐた所の望みの品が意外

にも先方から進んで與へられて、それを受け取る前に自分の幸運にたじろぐ者のやうに自分の女性に對する永久の運命が此一刻で定まり、生活に大變化を來たすと云ふ瞬間の前にあるたじろぎを感じた。「では愈々此人が俺の妻になるのか。それは確かに有り難い事だ。だが世界には未だいくらも他に美しい女はゐることはゐる。だから俺が今此人と結婚しなかつたら先へ行つてどんな人に逢はないものでもない。俺は今此人と結婚することによつてあらゆるさう云ふ未知の女性との關係を永久に斷たなければならないのだ。」强ひて云つて見ればこんな氣が暗々の裡にしたのであらう。自分は運命に彼女を押しつけられてゐると云ふ事、自分の自由は絶對的ではなくて、矢張り束縛されてゐるのだと云ふ事を感じた。

彼女を戀する自分は素より彼女との結婚を望んでゐる。しかしそれを主張するのは飽く迄も自分一個の自由に屬する事で、彼女からさへも云ひ出さるべきものではない。彼女がそれを自分と同じやうに決定した事として云ひ出す時自分はある幸福な束縛を感じる。不自由を感じる。押しつけを感じる。彼女は默つて、それを望みながら逃げてゐるがいゝ。それを自分は追ひかけて無理に捕まへるのである。その時に彼女は始めて「妾は貴方のものになつた。」と一言云へば足りる。自分が捕まへようとする時、

彼女も亦同じやうに自分を捕まへようとして手を出す時、自分は捕まへられたやうな氣がする。捕まへるものは何處迄も自分で、捕まへられるものは彼女でなければならない。さもないと自分の意力よりは運命の意志の方が優勢に感じられる結果として或る不安か生じる。自分の意志が運命のそれよりも優勢に感じられてゐればその不安は少いであらう。こんな氣が殆んど無意識の裡に働いてゐたのが、今や本能的な力を以て意識の上に飛び出したのである。それを見た自分は我れながら驚いた。

そのくせ彼女が冷やかに默つて逃げる時自分は不服を感じるに定まつてゐる。自分は彼女も亦自分の方に手を差し出してほしいのである。捕まへるものは自分一人ではなく、お互に捕まへ合ふ事を自分は望んでゐる。それにも拘はらず自分は今彼女が自分等の運命の合一を彼女の方でも定めてそれを當然な事として結婚の話を云ひ出すのを聞いた時一方は喜びながら他方ではたじろぎを感じた。運命の壓迫と押しつけを感じた。逃げられない束縛の不自由と不安とを感じた。さうして內心彼女を圖々しく思つた。

それは自分の彼女に對する愛が强くないからであると人は思ふかも知れない。實は自分も其時或は「さうか」と自らを疑つた。そして自分をたじろがすものを憎くんだ。

併し自分のたじろぎはそれ丈けの理由ではないのだ。たとひ前の戀に於て元山が自分の最初の要求と共に直ちにそれを受け入れ、直ぐ彼女の方から結婚を決定して其話を持ち出したならば自分は素よりそれを喜んだには違ひないが、同時にある矛盾したたじろぎと押しつけを感じたに違ひない。そして自分が馬車馬のやうに驀地にそれに向つて突進した運命の前に、しばし啞然としたに違ひない。向うが逃げてゐる限り此方は安心して何處迄も猛進する。併し向うが亦それを迎へて突き進んで來る時、此方は一時前進を躊躇しなければならない。それは自分の力が弱いからではない。運命を怖れる本能である。同じやうに自分は素より彼女との結婚を望まないのでは毛頭ない。併し只餘りに早く來た新しい運命の結着の前に立ち停まつたのである。自分は向ふ見ずになれるにしてはいろ〳〵の意味で餘りに運命を畏れ過ぎてゐる。

しかし素よりそんな惑ひは一瞬時の事で、自分の驚きと、たじろぎとは直ちに喜びと希望と感謝とに變つた。さうして自分を愛し、自分のやうな者に一身の運命を投げ出して來る彼女が信じられない程嬉しく、可愛く、いぢらしい氣がした。「有り難う。」と自分は思はず小聲で云つた。二人は顏を見合はせる羞恥と愛との炎に赤面しながらほゝ笑んだ。二人は心の中で緊く抱き合つた。二人の運命は互に燃えながらうなづき

合つた。かくて自分は更に前進する勇氣と希望とを得た。

自分は自分の家の方は大丈夫だから安心してほしい。自分は家中の者から怖れられてゐる事、別者扱ひにされてゐる事、自分の意志の通らない事はない事、などを話し、今夜にでも母に打ち開けて納得させて了ふと云ふ事を斷言した。彼女も亦彼女の家が昔風で、さう簡單には行くまいが、承知するに定まつてゐる事、さうしてなるべく早く結婚出來るやうにすると云ふ事を話した。自分達はいろ〳〵先の事を夢心地で話してその希望の嬉しさに醉つた。

M達は態と自分等を二人にする爲めに奥の本館の方に退いてゐたが、やがて戻つて來た。自分はほゝ笑むで凡てを眼によつて談した。

其日はCは來なかつたので自分は彼女が宿つて居る本郷のS女塾のわき迄彼女を送つて行く事になつた。自分は彼女を送る事が出來る事を此上なく喜んだ。彼女も亦同じやうに喜んだ。さうして二人は夕暮にMの家を出た。其時は少し氣まりが惡かつた。

二人は五番町の裏通りに出た。自分は昨日自家(うち)で書いた二通の手紙を思ひ出して彼女に手渡した。彼女は自分と同じく、最初の會見に於て自分がてつきり彼女を嫌つてゐるものと信じてゐたと云ふ事を打ちあけた。さうして翌朝の九時頃Mの細君がCの家

を訪れて「御免下さい。」と云ひ乍ら玄關の格子戸をあけた時にはまだ寢床の中でうつら〳〵してゐた事抔を話した。何と云ふ自由と愉快さとを以て自分等は歩いたであらう。自分を愛する戀人を連れて、外を歩くと云ふ事、それは自分には實に思ひがけない事であつた。凡てが新奇であつた。自分は紫の被布を着て、ザウリをパタ〳〵させ乍ら嬉し相にほゝ笑むでは自分を覗き込むやうにして話すIを見ると喜びと、滿足と、愛とにふるへずには居られなかつた。ビク〳〵と怖れ乍ら、竊かに戀する暴君の女王の伴をする奴隷のやうな有樣で元山と並んで歩いた時との相違を自分は思はずには居られなかつた。

「貴方かう云ふ家お好きではありませんの？」とIはとある西洋人の家を指して云つた。それは芝生に圍まれた蔦に被はれてゐる感じのいゝ家であつた。

「えゝ嫌ひではありません。」と自分は云つた。

「貴方がお好き相な家だと思ひましたわ。」と彼女は云つた。

「貴女はこんな家お好きですか。」暫くして自分は又一軒のいやな趣味の成金らしい家を指して訊いた。

「まあ妾いやですわ。こんな家。」と彼女は笑ひ乍ら云つた。

「さうですか。僕は貴女の好き相な家だと思つてゐました。」

こんな笑ひ話をし乍ら歩いてゐる中に四邊は暗くなつた。

自分等は暗い細道を選つて夢中で歩いた。

彼女は元山の事を訊き出した。自分はそれを聞かれるのを怖れてゐたのだ。併しIに對する愛に自信のあつた自分は强ひて嘘を云ふ必要はなかつた。しかし餘り云ひ度くないのでいゝ加減にしておいた。彼女も未だ遠慮をしてさう追窮はしなかつた。

自分等は遠路をしてゐる事を知り乍ら却つて一緒に永く歩ける事をいゝ事に思ひながらぐる〳〵變な所を出鱈目に歩いた。神保町の明るい電車道に出た時自分は何處だか方角が分らなかつた程であつた。自分等は又暗い道に入つた。自分は彼女の手を握れたら握らうとして彼女の手を探した。しかしそれに自然に觸れる事が出來なかつた。遂に本郷の大學のわき迄歩いて來た。彼女はもう歸つて呉れ。誰かに逢ふと工合が悪いからと云つた。自分は別れを惜しみ乍ら握手しようとしてそれとなく手を差し出したが彼女はそれに氣が附かないやうにして握らなかつた。

自分は八時頃自家に歸つた。さうして母が又訊いたのですつかり事件を打ち明けた。自分はガミ〳〵云ふ必要はなかつた。母は「屹度そんな事があるのだらうと思つてゐ

た。」と云つて猶ほIの事を根掘り葉掘り訊ねた。彼女の容貌から、性質から、色から、齢から、家の容子抔を。自分はIを褒めちぎつて話した。さうして自分は意外な程容易く成功した。最早かうして打ち明けて母が承諾したからには自分はもう大びらである。自分は運命と周圍の愛とに深く感謝せずにはゐられなかつた。慾に限りのない自分も今や彼女を失なつたらどんなに辛らいか、どんなに悔み悲しむかは明らか過ぎる事であつた。又もし彼女を失つたら彼女丈けの者を二度と獲る事は迚も出來ない事であらうと思つた。然しIに對する愛の火の手が加れば加はる丈け一方元山に對する慘ましい戀はやゝ色褪せて行つた。元山から受けた多くの虐待は思ひ出された。かくて自分は彼女を恨んだ。「どうだ。君に失戀しても俺にはこんないゝ愛人が出來るのだ。もう參りはしないぞ。」と云つて子供のやうに凱歌をあげ度いやうな氣がした。

自分は其翌日の午後Iから始めての手紙をうけ取つた。「……自分程幸せな者はないと信じてゐます」と云ふ文句が繰り返し書いてあつた。（自分もそんな氣がした。）自分は郵便箱にそれが入つてゐる時有頂天に喜んだ。さうして幾度となく讀み返へしては接吻した。

九

其後自分とIとはMの家を寄り合ひ場所にしては一日おき位に逢つた。自分が先きに行つてゐると彼女は何時も時刻より遲れてやつて來た。自分は笑ひ乍ら飛んで上り口迄出迎へに行つた。彼女は羞かし相に笑ひ乍ら毎も隣りの室に坐つて此方の室に入つて來やうとはしなかつた。そしてMが「此方にお入りなさい。」と二三遍云ふと掌を口許に當てゝ笑ひ乍ら入つて來た。しかし自分は彼女がその掌を口許に當てる癖を可愛く思つたが、止した方がいゝと思つた。何故なら彼女の手はその濃く白粉を塗つた顏の色に對照して薄穢く見えるからであつた。

彼女は咽喉をいためて咳をしてゐた。Mの細君が隣りの室で親切に彼女に吸入をさせてゐた。吸入をしてゐる彼女、自分にそれを見られるのを羞かしがる彼女は可愛い以上であつた。自分は彼女の胸に何か故障があるのかと思つたが、彼女は自分の身體が非常に健全である事に醫者が感心した話をして聞かせた。此日自分は彼女から寫眞を貰つた。

M夫婦はもう彼等の遠慮して手を引くべき時だと思つたので、ある距離迄退いて自

分等の自由と幸福とを祈つて呉れたが、彼等の家をいくらも自分等の寄り合ひ場所に遣つてほしいと云つて呉れた。自分等は其親切を喜んだが、餘り度々の事でM達の迷惑になる事でもあり、又自分等も二人丈けの自由を樂しみ度く思つたので其後は半藏門の處で彼女と落ち合ふ事にした。半ばすぼめた薄い色の蛇の目傘をさして雨の中に立つてゐる彼女を見ると自分は一分間の遲刻をも謝まらずにはゐられなかつた。

自分は雨の中を歩いてゐても落ちついて話も出來ず、彼女の咽喉を惡くしてもいけないので赤坂見附にあるT館といふ旅館のやうな家に行つた。其家は嘗てMの細君もMとの結婚前に逗留してゐた事のある家で自分も行つた事があつた。

其處で自分が始めて彼女の手を握り、戀人との最初の接吻をした時に何んな感銘を受けたか、それが自分の生れて以來嘗て知らなかつた、又忘れることの出來ない如何に怖ろしい經驗であつたかは自分は他の作に於て度々書いた事がある。

「妾の手はきたないでせう。寫生に行くのでこんなに日に燒けましたの。」と彼女は云つた。矢張り氣にしてゐるなと自分は思つたが、「別にきたなくはない」と云つた。それから自分は彼女の畫を見度いものだと笑ひ乍ら云ふと「妾下手ですわ。」と彼女も笑ひ乍ら云つた。「そんな事は貴女に聞かなくても分つてゐますよ」と自分は云つた。二

人は笑つた。自分は幾度も彼女を抱きしめた。さうして二人の運命を考へた。二人はフアミリアになればなる程互の共通を感じた。自分等はMの善い人間である事を褒めて話し、細君の親切を話した。

其次に逢つた時には自分等は互に始めからT館に向ふ豫覺でゐた。何か恐ろしい事が起り相な氣がした。盲目なリズムで其處迄行かずにはをさまらないやうな戰慄を感じた。案の定二人は又一歩深入りした。

ひどい後悔が自分を襲つた。二人はをの〻いた。自分は自分の醜さを恥ぢ、又憎くんだ。出來得る限り神聖なものであらしめ度く思つた戀の本性は「そんなものだ」と何かに嘲けられるやうな氣がして不愉快であつた。又自分は彼女を眞に戀してゐる心算でゐるが、實は彼女を弄び、戀を弄んでゐるのではないか……抔と云ふ疑ひや不安も起つた。「そんな事があるものか」と自分は思つた。そして其疑ひの不安に打ち克たうとして自分は自分等の戀を瀆がした事を悔みながら彼女に辯解的な感想を熱心に說き聞かせた。如何なる場合にも善い人間は善いのだと云ふやうな事を。彼女の自分に對する愛を未だそれ程には信じきる事の出來なかつた自分は、此深入りの爲に夫れ迄彼女に抱かせてゐた自分に對するIの尊敬を悉かり滅ぼして了つたやうな氣がした。そし

て彼女の愛が如何なる自分の醜さにも拘はらずそれを赦して餘りある深さを知つた時驚いた。自分は嘗てそんな人間を想像する事が出來なかつた。併し此事以來自分は自己の運命的責任を逃れる事の出來ない事を益々痛切に感じた。自分等の甘いイリユージョンは消えたけれども、自分等の愛は却つて一層眞劍になつた。そして眞の人間同志として命賭けの事實に於ける夫婦として生々しく觸れ合ふやうになつた。夜靜かに一人机に向つて彼女の寫眞に視入り乍ら熟々彼女の事や、自分等の運命や、未來に就いて考へる時自分はおのづから涙ぐまずにはゐられなかつた程緊張した。自分は彼女と逢つてゐる時自分の優越を感じ、彼女と離れてゐる時彼女の優越を感じ勝ちであつた。凡ての驚くべき新奇の經驗によつて自分は一々考へさせられ、疑はせられ、そして少し宛新知識を得た。

二人はT館の歸りに（それは毎も黄昏であつた。）Mの家のわきを通り、往來からM夫婦を呼んで笑ひ乍ら挨拶した。それは唯二言三言の挨拶に過ぎなかつた。しかしそれによつて取り交はす愛は深かつた。自分は九段坂の上で俥を呼んで彼女を乘せた。そして闇の中に消えて行く彼女の俥を暫らく見送つた。

手紙は頻りに往復された。多くの人のやうに自分は彼女と深入りして以來結婚後の

生活や、仕事に不安を感じたが、大丈夫だと思つた。仕事の障害になるやうな事が起ればあべこべにその障害を仕事に打ち込んで活かしてやるぞ。それ位の事が出來なくて何うする、と思つた。今や自分は殆んど彼女によつて生活し、彼女は自分によつて生活した。「……私は貴方に逢ふ迄はもう少し自分がしつかりした利口な女だと思つてゐましたの。それが貴方に逢つてからはそんな玩具のやうな自信を持つてゐた事が羞しいよりは可笑しくなりました。」彼女の手紙にはこんな事が書いてあつた。

自分等の愛と理解とは一日々々とリアリスチツクな深みを加へて行つた。自分は彼女の凡てを愛した。彼女の内に滅びないものも、滅びるものも。そして其等の凡てに神聖を感じた。平凡のやうで平凡でない彼女の眞の美は淺薄な俗人には解らない抔と自分は思つた。彼女も亦死ぬるのだなと思ふとどうかしてやり度い、救つてやり度いと願はずにはゐられなかつた。そしてそれは自分に嚴肅な涙と、勇氣とをそゝり、向上欲を勵ました。

一〇

自分はしかし元山との事件の小説を書く事の日課を休止しなかつた。元山との痛い

記念に觸れるとそれは生々しく自分の創作欲を焚きつける力があつた。そして時が經つと共に彼女に對する一時的怨恨や反感は又消えて、遼遠な感謝に變つた。そして自分はIに逢ひつゞけた。或時は共に目黒に行き、或時はCの家へ出掛けて風呂から上つて來た彼女を連れて谷中の墓地の中をさまよつた。しかし彼女が餘りに遲れて指定の場所に來る時、自分は彼女がいくらも自分を待たす權利を持つて居るやうに思つてゐる氣がして怒つた。併し彼女に怒る事は苦しかつた。二人はよく喧嘩した。自分は時々野蠻性を發揮した。さうして大森の海岸へ一緒に行つた時自分はある料理屋の人のゐない二階で彼女を抱きかゝへて室の中を歩き廻つた。彼女は快活に歌を唄つた。希望に燃えてゐる二人は元氣であつた。

彼女は長野へ歸つた。

「……私はすぐ先きに待つてゐる大きな幸福を、どんなにして迎へやうかと小さな胸を躍らせてゐます。小鳥が春のやはらかい日をうけて嬉々と悅んでゐるやうに私は元氣よく囀り乍ら飛び廻つてゐます。……」こんな文句を彼女の手紙の中に見ると自分は微笑まずにはゐられなかつた。自分はよく此結婚や未來に對する眞面目な感想を書い

て彼女に送つた。「此結婚をして眞に自分等の祝福にしよう。」とか、「自分に眼が眩んではゐけない。彼女こそ自分の缺點をよく知り慈母の如くそれを直して、自分を高く引き上げて呉れる者でなければならない。眞の結婚は救ひ合ひだから。」とか、いろ〳〵書いた。又彼女自身にもつと權威を感じて強くならなくてはいけないと書き、彼女の勇氣を鼓舞した。併し一日か二日彼女から便りがないと自分は何にも手がつかない不安の爲めに腹を立てゝ彼女の疎遠を責めた。自分の名によつて直接に彼女へ手紙を出す事が許されず、Mの細君やCの書いた狀袋に手紙を封じて出すと云ふ事も自分には腹立しかつた。又自分の手紙が彼女の兩親にあばかれて彼女が酷い叱責を受け破談が持上つてゐる事を想像して若しさうならば長野迄掠奪に出掛けやう抔とさへ思つた。そして女の家の舊弊を罵り、彼女の弱さを詈つた手紙を書いた。自分は始終落ちつかずにいら〳〵してゐた。

彼女は其後結婚の仕度を整へる爲めに東京へ來た。電話に出る彼女の聲はいゝ聲であつた。しかし早口に言ふ自分の言葉をよく聞き取れずに二三度彼女が聞き直すと自分は癇癪を起して喧嘩つた。

或晩彼女はおそく電話をかけて今銀座の果物屋の二階にゐるから之から一寸來て呉

れないかと云つた。自分は直ぐ歩いて出掛けた。其二階はカフェーの様になつてゐた。

Iはcと來てゐた。「又か」と自分は思つて直ぐ不快を感じた。Iを我物顔に連れて歩いてゐるやうに見えるcが身の程知らずの惡婆のやうに見え、不快でならなかつた。自分は碌に挨拶もせず直ぐ彼等からは離れた次の室へ入つて一人で飲み度くもない茶を飲んだ。自分はステツキで床をたゝき、足で其邊を蹴りつゞけた。さうして遠くのcを睨みつけた。而もそれは自分の凡て望まない事であり、自分には不可能である事を意識する爲めに苦しかつた。

Iとcとは心配した。Iはcを捨てゝ自分の處へ來る譯にも行かず、cは自分を怖れた。併し自分は彼等の氣のつかないやうにしてこつそりその果物屋を出て了つた。そして明るい銀座通りを少し歩いた。自分は不快と憎惡との絶頂にゐた。しかしIが屹度後から心配して自分を追ひかけて來るであらうと豫知してゆつくり歩いた。そして若し來なかつたならば、今後Iと會ふ事は止めて了はうと思つた。而もそれは自分の凡て望まない事であり、自分には不可能である事を意識する爲めに苦しかつた。

自分は後を振り返つて見た。と、案の如くIは其店のザウリをはいた儘あたふたと追ひかけて來て自分に取り縋つた。

「何故來るのです。早くお歸りなさい！　貴女のいゝ姉さんのゐる處へ。馬鹿。」自分はかう苦々しく云つた。彼女は泣き相な顏をして辯解した。自分も泣き叫び度いやうな氣がした。併し遂に振りもぎつて彼女と別れ、苦しみ悶えながら自家に向つて淋しい道を歩いた。さうして自分は時々吼えた。

一時間許りして又cから電話がかゝつた。自分は出ない譯には行かなかつた。cは自分の感情を害した事を心配してゐる事を訴へて謝まつた。自分は電話では怒る事が出來なかつた。二人の女中は電話口のわきに坐つてゐて例の如く自分の會話に興味の耳を峙てゝゐた。自分は譯の分らない返答を一言二言云つたなり、夫を切つて了つた。

自分はIをcから早く引き離すやうに努めた。しかし凡ての事は非常な好都合の中にどん〳〵早く進んだ。媒人はMのすゝめによつて友人のAに定まつた。Iの寫眞は自分の家では評判がよかつた。そして一同は結婚に贊成した。どうせ自分も何時か一度は結婚する以上は飛んでもないえたいの知れない女を連れて來られるよりはいつそ早く之れに定めて了つた方がいゝと云ふ理由もあつた。彼女の家に於ても自分に先づ不服はなかつた。

かくて自分等は結婚する事になつた。六月十三日の日に、既に長野から再び一家族

の者と上京してゐた彼女は、自分との結婚の簡單な儀式を濟ました。自分は彼女と結婚しても其當座は未だ誰かゞ彼女を掠奪に來はしないかと心配したが、それも暫くの間で、Cに對する不快も其後直ぐ消えて了つた。

今や自分等の間には最早二人の子供が出來てゐる。二人共女の子である。上の子は自分に似てゐると云ふ噂さであるが、下の子は母に似てゐるらしい。共に可愛いゝ事は非常である。子供の誕生は自分には結婚にも優る驚異であつたが、それと同時に此苦勞であると共に喜びであり樂しみである二人の「天使」の到來は自分等の結婚の運命を一層堅實にし愛の地盤を一層深くした。

自分も彼女も三年前からすると大分年も取りいろ〳〵の經驗も積んだ。今から思ふと前の事は凡て「簡單であつた」とのみ思へるが、それでも自分は全力を盡しては來たのだ。三年間は要するに泰平であつたが、其泰平の中には相當の變化や小波もあつた。そして自分はそれ等のおかげで多少修養も積み、人生といふものを少しは知つて來たやうに思ふ。彼女や二人の子供は云ふ迄もなく、凡ての者は自分には恩人である氣がする。

そして又自分等の愛は月日の重なるに從つていよ〳〵濃く深くなりつゝあるのを自分は感じる。自分の彼女に對する愛が更に深くなればなる程彼女の自分に對する愛も亦更に深さを加へた。そして自分等の生活が時日を經れば經る程自分は二人の深い調和を感じる。運命の落つきを感じる。

「自分等は幸福である。」――不幸な人々の多い前で、かく云ふ事を自分等は遠慮する必要はないであらう。各自は皆それ〴〵の運命に自信を持つてゐていゝからである。之から先き自分等はどう云ふ運命になつて行くか、……自分は此記念の作を畢るに望んである靜かな「祈り」を感じる。

――一九一六、一二、二――

Yの幻影

「子は兩親の仲を一層かたく結ぶ鎖である。何となれば子を持つ夫婦は子のない夫婦よりも一層仲の善い必要があるから。子のない夫婦は仲が惡くとも其爲めに直接第三者の運命を不安にする事が少い。併し兩親の仲がぐら〳〵してゐる程小さい子の運命にとつて不安な事はないのである。子の運命が安全に發育する爲めには兩親の愛はそれによつて一層深く結びつけられる必要があるのだ」かうYは思つた。

實際彼はその愛する妻によつて子を獲る毎に不思議に妻に對する愛を新鮮にされ、深くされた。そして妻も亦彼に對してさうであつた。彼等は子に於て自分等の運命の結んだ實を見た。そしてその結果は彼等に感謝の念を起させた。彼等は元來愛を以て成り立つた夫婦であつたから。

併し二人の女の子を持つた彼等は最早其子を思ふ事なしに自分等の運命を考へる事が出來なかつた。それ程三つのものは一つの有機體になつて同じ愛を通はせてゐた。そしてどの一つを抜かしても互の事を考へる事が出來なかつた彼等は子によつて一夫一婦の制度の自然である事を理解した。彼は妻に對する本來の愛以外に彼女が子供をよく愛育するが故に猶更深く彼女を愛し、彼女は又彼が其子をよく愛するが故に一層彼に對する愛を深くした。そして同樣に子供は又父母に對する本來の愛以外に父が母

を愛するが故に猶更父を愛し、母が父を愛するが故に一層母を慕ふべきものである事を知つた。その三者はたとへ何人の子がゐやうとも一つの圓かな輪になつて、其中のどの一つに何か一寸した不幸が起らうとも、心配を共にし、一寸した吉い事が起らうとも喜びを分け合ふのである。そして互に切つても切れない因緣を感じ合ふ事によつて純潔な愛を充實させ、同じ艱難や哀樂を重ね經て行く處に深き運命のさゝやきを聞き、寂しいしかし美しい人生の樂しみを味ふのである。其處には嚴肅な秩序があり、圓滿な自由がある。それが本當だと彼は思つた。彼は十五六の時父母の間にある衝突があつた爲めに何の譯か分らずに姉と共に心から悲觀した事を覺えてゐた。

子がなければいゝと彼は思つた。しかし運命は彼に子を授けた。そして子は彼を「父」にし、又「父」の意識は彼を嚴肅にした。嚴肅は彼を涙脆くした。彼は啻に自分の妻の子守唄を聞いて涙ぐむ許りではなかつた。電車の中なぞで子に乳房を當てがつてゐる女を見てすら涙ぐまずにはゐられない時があつた。以前は其處に只肉慾を感じる位であつたのに、それは今の彼には凡て神聖な美しい感じのするものとなつた。彼にはそれが他人事ならぬ氣がした。そして其時彼は其子の丈夫に育つて呉れる事と其母や家族の幸福であることゝを祈らずにはゐられなかつた。

かくて彼等は平和な家庭の意識の中に心配もあつたけれど、幸にして恙なく健全な幸福の日を送つた。彼は兩性間の制度として此の家庭の生活が最も自然で、合理的な生活であり、從つて誰の爲にも一番善い、又最も有益な生活である事を疑はなかつた。彼等は美しい年頃の娘を傍に見て樂しむ未來の父母を想像してほゝ笑みながら、此平穩な調和を亂すやうな不幸の到來を怖れた。そして父母としての夫婦として彼は出來る丈け善き父であらうと欲し、彼女は又出來る丈け善き母であらうと欲した。

Yは眞に生き度いと云ふ欲求を内に持つてゐた。其欲求は彼に嚴肅になる事を強ひた。そして其人生に對する嚴肅な感じは妻子の運命に對する嚴肅な祈りの感じと調和し、抱き合つた。彼の眞理に對する貞節の心情は、妻に對する貞潔の心と結びついた。

が、それにも拘はらず彼の中の盲目な男性的慾情はをさまらなかつた。殊に彼にとついて惡い事は不潔な過去を持つてゐた。彼の中に不潔な記念が正直に殘つてゐた事であつた。彼はそれを自分の奥深い祕密の地下室に閉ぢ籠めておかうとした。しかし彼の内に現在の情慾が起る時、それは其有力な仲間を引つ張り出さうとしてその鍵をはづした。恥かしい幻影は屢々彼に現はれた。而もその幻影は過去の實際の記念によつて、一層明かに彩られ生々しくされた。そして惡魔のやうに彼を内からそゝのかす事

によつてジリ〳〵彼を煩はせるのであつた。

今日も彼は午後になつて精神がだるくなると共にある　慾？を生理的にと云ふよりも心理的に感じた。それは彼の妻が産褥に就くわりに永い以前からそれが彼の内に蓄へられてゐた故でもなかつた。彼はそれと戰ふ事もあつた。そして今又彼は仕事に倦むだと云ふよりも其襲撃の意識をまぎらさうとして緣側に出て遠くの空を眺めた。懶い眼がシパシパした。

夕立が向うから次第に襲つて來るのが見えた。前ぶれのやうに冷たい風が吹いて來てサラ〳〵と木の葉を鳴らした。大粒の雨がバラ〳〵と近所の屋根に落ちる音が聞え出した。そして遲い速力を以て夕立はやがて彼の頭上に來た。二分間許りひどい音と、冷たいしぶきとが彼を取り圍んだ後でそれは後ろの森の方に去つた。さうして明るい夕陽の空が黑雲を追ひかけて、又其後から來る黑雲に追ひかけられながら徐々と此方に向つて來た。黑雲の影と、明るい光線とが交り〳〵に街の連つた屋根の上を匐つた。

彼はうと〳〵とした。と、やがて黑雲の中に或る男の顏が現はれた。それはだん〳〵黑雲と共に近づいた。そして黑雲が彼の頭上に蔽ひかぶさつた時其男は颯と云ふ風と

共に彼の處に降りて來て彼の肩をたゝいた。それはXであつた。
「二度目のお子さんが生れた相でお目出度う。」とXは云つた。
「子供の生れた事は目出度いか目出度くないか分らないが、とにかく安産で母も子も丈夫だと云ふ事は祝してもいゝ事だと思ふ。」Yはかう云はうとしたが、只「あゝ、無事に生れて幸だつた。」と答へた。
「益々御繁榮だね。」
「あゝ、勿論。」
「はゝ。では君は幸福だらう。」
「あゝ、少くも不幸な者よりは。不幸な者は多過ぎるから。」
「全く多過ぎる。だが斯して久振りに君の處に來て見ると僕等には實際平和な別世界の樣な感じがするよ。幸福な感じがする許りでなく。」Xは煙草に火をつけ乍ら云つた。
「外面的に平和でない必要はないからね。」
「さう。殊に君達のやうな仕事をしてゐる人にはさう云ふ平和は何よりも必要だらうからな。」
YはXの此言葉によつて彼が「さう云ふ平和は誰にだつて必要なのだが、それを實

際に獲てゐられる君は餘程幸福なのだ。」と云ふ事を自分に當てつける心算である事を感じた。併し彼はそれを感じない者のやうな鈍い顏をしてゐたので、其外見の鈍感はXを苛立たせた事をYは又覺つた。Xは云つた。
「處で其平和で幸福な君の身の上にある波風を持つて來る事は素より君の友として僕の望む所ではないが、實は茲に一つ據處のない厄介な出來事が起つたので、君の力を借りる事を止むを得なくなつたのだ。それで今日は突然お邪魔に出たやうな譯だが。」
「どんな事でだね」とYは相手が相手なので多少不安を感じ乍ら何氣なき體で云つた。しかし彼は心では「此奴俺をゆすりに來たな。俺の財布はかりではなく、精神をも。」と思つて閉口した。私は元から此Xを好かなかつた。と云ふのはXは彼には殊更自分の醜い處ばかりを映す意地の惡い鏡のやうに思へたからであつた。
「實は僕は此處に一つ君に宛てた手紙を賴まれて持つて來てゐるんだが。」と云ひながらXは懷中を探し始めた。
「手紙を？」
「あゝ、まあ誰からだか當てゝ見給へ。」
「分らないね。」Yは考へるのが何故か無氣味な氣がして厭だつたので考へようともせ

ずに云つた。
「分り度くもあり、分り度くもなしか。はゝ、」とXは下品に笑つて「とにかく君のある記念からには違ひないよ。」と云つた。
「僕の記念から？」
かう云つてYは思はず顔を赧くした。彼の胸の中に何所とも知れぬ動悸の小さな漣が立ち始めた。併し彼はそれを平氣らしく抑へた。
「うむ。だが記念と云ふと君は直ぐ、も一つの方の記念を頭に浮べるだらう。君にとつて自信の持てる體裁のいゝ方の美しいおきまりの記念を。全でさう云ふ記念しか君が持つてゐないと自分でも思つてゐるかのやうに。」
「自ら自信の持てない事を平氣で云つたりしたりするのは餘程の無良心か、恥知らずの奴でなければ出來ない事だからね。」とYは嘲笑ひ乍ら云つた。「それに美しい記念を書き、美しい感じのするものを書くと云ふ事は、要求の強い者にとつて當り前の事である許りでなく、其事は又何も美しくない記念を持たない醜い過去を持たないと云ふ事にもならないからね。もしさう思ふ者があればそれは人間と云ふ者を全で知らない馬鹿者だ。のみならず、あの僕の美しい記念は僕の持つてゐる他のどの記念よりも實

際僕にとつて根深いものでもあり、意義多いものでもあり、刺戟の強いものでもある事は事實なのだ。今ではもうずつと淡くなつて普段は忘れてゐるが、何しろ僕が最多く眞劍になつた事件だつたからね。」Yは此處迄續けた。
「從つて收穫も多かつたのだな。しかし經驗の與へる氣持はどん〳〵時と共に變化して行くが、容易に變らない物は善かれ惡かれ内にある經驗の本尊さ。」とXは云つて「だが僕が今此處に持つて來た記念は同じ君の舊疵の中でも一番君の閉口して持て餘してゐる處のものだと云ふ事は豫め承知してゐて貰ひ度いのだ。はてな。何處へやつたかしら。」と猶ほ彼は懷や袂を探つた。
「一體誰からの手紙なのだ。」Yがかう云つた時Xは丁度其手紙を探し出して云つた。
「こんなものを今君の前に差し出したからと云つて怒つて呉れては困るよ。僕は何も意地惡く、君が自分でも觸れたがらずにそつと祕密に藏してゐる扉を無斷にあばいて君を苦しめようと云ふのではない。君に何の恨みもない僕には自分一個としてそんな意志も、權利も、暇もないのだ。だが僕も之には全く餘儀なくされたと云ふのは僕も未だ人並には人情も道義心も無くさずにゐるのでね。君からの憎まれ役を引き受けなければならなくなつた事を却つて君に同情して貰ひ度い位なのだ。君は蟲が好過ぎる

と思ふだらうがね。」Xはかう云ひ乍ら其手紙をやゝ蒼褪めてゐるYの前に出した。

Yは機械的にそれを取つた。併しその上書を見る前に彼はそれが誰からの思ひがけない手紙であるかを直覺的に覺つた。彼は唾を飲み込んだ。苦しいのか、苦しくないのか自分では分らなかつたが、動悸の激しい事は彼がカナリ不安である事を示した。刺戟は彼の素早い警戒の豫防網にぶつかつた。そして彼は重苦しい努力を以て其網を前に押し乍ら「Y……Z様」と云ふ下手な女の字を讀んだ。裏には小さく「T……より」と書いてあつた。網は破れた。そして彼の前に其女が坐つた。立つた。寢た。笑つた。

――そして其傍に肉慾に負け過ぎて惡魔に身を任せた蒼い顏の彼が。その女の室で。

併し其古い幻は彼が祕して恥ぢてゐたものであるに拘はらず(前にも云つた通り)惡い時間を屢々持つ彼にはさう珍らしいものではなかつた。彼はそれに對してもつと强く恥づべきであつたらう。實際彼は恥ぢてはゐた。しかしそれが今更恥ぢても追つかない事を諦めてゐた故か、又それ程眞に恥ぢ得るにしては今の彼が未だ不純過ぎた故か、その幻を實際に行つた事のある程の彼にとつてそれの與へる刺戟は多くの場合痺されてゐた。むしろ其事が彼を不安にした。

併し今他人によつてそれを自分の前に見せつけられた彼は其ひどい侮辱に堪へられ

なかつた。彼は人格も何もない單なる賤しい者にされた氣がした。彼のあらゆる自尊心は泥濘に踏みつけられた。彼は餘りに恥かしい自分の醜い姿に情けなくなるのを通り越して腹が立つた。何もXからそんな罰を受けるには當らない。そして其腰を打ち碎かれた反抗心と、Xに對する侮蔑とを以て此事に冷淡でゐてやらうと決心した。

「君が驚くのは無理はない。併しまあ讀んで見給へ。」とXは彼の顏を見乍ら云つた。

「誰が讀むものか。」YはXに對する憎みを露はし乍ら其手紙を放り出して云つた。

「何故。」

「讀み度くないからさ。」

「君が讀み度くない氣持は分る。併し君は讀まなければいけない。僕が困る。」とXは云つた。

Yはむつとした。しかし默つた。

「讀まないのか。」

「君は僕を强ひる力があると思つてゐるのか。」

「讀んでも始まらないと云ふのか。」

「始まらない許りではない。だが僕の事は僕に任せ給へ。干渉はよして貰はう。」

「誰もさう行けば世の中は世話はないのだ。自分に都合の惡い受け身の時は自分の事は自分に任せろと無干渉主義を唱へておき乍ら、自分に都合のいゝ時は勝手にドシシ他人に干渉して向うの迷惑は關はない。勝手なものだ。併しそれでは弱い者は割りが惡過ぎるからな。自然はさう出來たものかも知れないが、少くも「道德派」と云はれてゐる君に於てそれは少し矛盾してゐはしないかね。」

「道德派。ふん。君達のつけ相な名だ。だが僕は未だ純潔な贖罪的愛を以て此追憶にふれる事が六ケしいのだよ。僕はそれを見乍ら一方不純な心を起す事を避けられないだらう。それは殆んど同じ罪を繰り返す事になる。僕はむしろ未だそれにふれてはならないのだ。」

「すると君はあの女の運命に對して何の責任も持たないと云ふのかね。君がよく遣ふ運命と云ふ言葉を遣つて云ふとだ。」

「勿論持たないとは云はない。併し僕には未だ其時は來ない。又其責任を擔ふにしろ僕の擔ひ方は直接な擔ひ方ではない。それは所謂社會改良家でない僕には出來ない。文士である僕には只間接に自分の仕事によつて其を償ふ事が出來る許りだ。僕はそれでいゝと思つてゐる。して了つた事はいくら悔んでも仕方がないのだ。併し其取り返

しのつかない過去の業蹟の爲に一生を棒に振る事は出來ないし、又してもならない。」

「勿論君があの「復活」のネフリュードフだとは僕も思つてはゐない。」

「又僕はネフリュードフがしたやうな事はしない。似たやうな事はしたが。そして僕はネフリュードフを尊敬するが。僕もネフリュードフの樣な事を過去にして、あゝ云ふ事情に迫られたらどうするか知らない。勿論あんな風には出來ないだらうが。しかし僕の使命はネフリュードフのとは違ふ。僕は彼の良心と、眞劍さと、誠實と、勇氣と、意志とを思ふ時、そして其苦しみを思ふ時涙ぐまずにはゐられない。そして自分に恥ぢる。ネフリュードフをえらいと思ふ。僕もあの小說を讀んで泣いた一人だ。他人事ならない氣がした。矢張り自ら審判されてゐるやうな氣がして頭が下つた。トルストイの愛に跪き度い氣がした。あの惱むでゐるネフリュードフの姿は人類の姿のやうな氣がした。それでも僕はネフリュードフにならうとは思はなかつた。彼はある意味に於て自分の敬愛する懷しい兄さんのやうな氣もする。しかし僕は少くも「復活」の中に出て來る間のネフリュードフにならうとは思はない。ネフリュードフになる位ならあれを書くトルストイのやうになり度く思ふ。僕は何か永遠な仕事を文藝によつてコツ〳〵靜かにして行き度い。」

Xは莫を喫ひ乍ら默つてゐたのでYは續けた。

「それに僕は慾つかな事はし度くないのだ。僕がどうしてあの事を忘れきる事が出來よう。殊に何をするにも臆病で、直ぐ不安を感じる質のこだはりやの僕が故ら二十遍近くも接した事のある女の事を。尤も其頃の僕には何故それがそれ程惡い事かゞ未だ本當には分らなかつたと云ふのは事實だ。只何となくそれは切なかつた。それでも僕はあの女よりも自分の獸慾を愛してあの女の處に毎も後で後悔する爲めに行つた。僕は一體誘惑に對して抵抗力の强い人間ではない。むしろ其方には弱い男だ。殊に一度味をしめたものに對しては猶更。それを思ふと僕は恥かしい。そして其弱い事が僕に拭ふ事の出來ない恥かしい歴史を作り、又その爲めに未來に於ても人一倍愼しまなければならないのだ。が、一番僕にとつて瞬間的に辛い事は嘗てそんな事をした自分は一體何か大事な感情が少し不足してゐる人間なのではないかと云ふ疑問が自分に起る事なのだ。直ぐ「そんな事はない」とも思ふけれど、とに角それ等の意識が僕よりも淨い過去を持つてゐる人達と此世のひどい暗黑面に就いて語る時に僕を責めて口を引き止めるのだ。其人達は自ら又自分を淨くないと思つてゐるだらう。然し僕がしたやうな事はしなかつたのだ。僕は酷いと思ふ事は酷いと云ふ。然し少しでも云ひ過ぎ相に

なると僕は矢張り氣が引けて了ふ。」

「確かに君はあの頃から見ると變つた事は變つたよ。」とXは口を挾むだ。

「當り前の事だが、あの頃分らなかつた事で今分つてゐる事もあり、あの頃出來なかつた事で今は出來る事も少しはある。そして少しづゝ愛や知慧が增して來るにつれて人生に對する眞劍さももつとはつきりして增えて來たやうにも思ふ。今ならあの頃したやうなあんなひどい事はどんな事があつてもしないと思ふ。今日も僕は往來である盛裝してゐる藝妓を見て思はず顏を背向けずにはゐられなかつた程不愉快を感じた。其藝妓は一體感じの惡い藝妓だつたのかも知れないが普通の意味では決して醜い方ではなかつた。そして僕はそれを醜く感じた事を喜んだ。厭らしい意味で美しいと思ふよりはましだと思つたから。僕はその藝妓の氣も知れないし、又それを弄んで快樂を感じる男の氣も知れないと思つた。が、とにかくこんな事は元の僕にはない事だつた。勿論僕は未だ眞の美しさ許りに惹かれる人間ではない。戀や、結婚や、子供の誕生等は僕を大分洗つては吳れたが、染み込んでゐる臭氣は到底拔けきる處ではない。ある瞬間には僕は全くそんな肉感的な煩ひから超越したやうな氣持を經驗する事もある。併し次の瞬間には又全く泥だらけの心になつて了ふ。時には美しくもなるが未だいく

らも汚なくなれるのだ。あの頃の事は未だ全く過去の事とも思へない。あの頃の僕を惱ました問題は依然として現在の僕を惱ます問題なのだ。要するにあの頃の自分と未だ大差のあらう筈のない今の僕は迚もあの頃の疵を洗ふ資格はないのだ。僕は未だ同じ病人なのだ。それでどうして他の病人を癒せやう。僕が今他の病人にふれゝば向うに自分の病氣を更にうつして惡くするか、或は自分が傳染を受けて猶ほ惡くなるか何方かだ。そんな無意味な事は御免だ。僕が本當に其病を去つて健康な體になり、全く危險性がなくなつた時に來るなら來玉へ。今來ても駄目だよ。お互の爲めにならない。」

「では五六十年も待てと云ふのか。そしてあの女も僕も死んで了つた頃に來いと云ふのか。誰に。どうせ君の事だから何時だかそれは分らないと云ふに定まつてゐる。」

「しかし仕方がない。」

「人の苦勞は三年も我慢すると云ふ譯だね。苦勞のない君はいくらでも氣の長い事を云つてゐられるだらう。しかし君等によつて苦勞を負はせられてゐる向うの身は一つ時でもそんな事を聞く耳は持たないのだ。」

「君等によつて」と云ふXの言葉はYの胸にこたへた。然しYは云つた。

「併し愛があつて人の苦勞を三年我慢するならその人間は餘程えらいよ。君には詭辯

のやうに聞えるだらうが。」

「君は自分の事ばかり云つてゐる。」とXはトゲ〳〵しく笑つた。「君のやうなエゴイストにあつては叶はない。」

「當り前だ。僕は自分の精神の平和を護る權利は持つてゐるからね。僕はある時は自分のエゴイズムを憎らしく思ふ。しかしある時にはもつとエゴイストにならなくてはやりきれないとも思ふ。又直ぐ氣は變るが。」

「君の云ふ事はあの女にとつても僕にとつても何の關係もない事だ。いくら長たらしく饒舌つても。」

「無論それでいゝのだ。だから君も僕に關係を無理に強ひるのは止し玉へ。」

「では君は僕に君の負ふべき負擔も脊負へと云ふのか。それは少し蟲が好過ぎる。僕にはそんな義務はないからね。君が讀まないと云ふなら、仕方がない僕は口で云はう。」

「止し玉へ！」とYは強く遮つた。「餘り失敬な事をすると僕は怒るよ。もし金が入用だと云ふなら早く其金高を云ひ玉へ。事情は聞き度くない。」

「それなら僕も其方が面倒臭くなくていゝ。では早速五十圓出して貰ひ度い。」

「五十圓？」

「あゝ、たつた五十圓だ。」
「搖すり奴。」とYは思つたが默つた。
「それ、君はその金を何うするのだと僕に訊かずにはゐられまい。それで僕は矢張り君が納得するやうに其理由を一通り君に說明する必要があるだらう。僕が其金をあの女の名で君から詐僞しに來たと君に疑はれない爲めにも。」
「いけない。いけない。そんな事は思はない。」とYは打ち消した。
「だが君あの女は死ぬかも知れないのだよ。」
とXはYを嚇かすやうに睨みながら云つた。
「何、死ぬかも知れない？ 嘘だらう。」
「何故本當だと云ふ事が有り得ないのだ。あの女は僕の處にやつて來て君に言づけして吳れと非常に恐縮して賴んだのだ。かう云つた處で君は只澁面を作る丈けだらうが、あの女も多勢の男の中で變に君の印象丈けは忘れずにゐると云つてゐたよ。が、あの女は僕の處へ來て云ふのだ。「あの方は妾のことなんぞもう疾くの昔に忘れてゐらつしやるでせう。どうせあの方も只妾を御自分の氣まぐれな嬲り者にしに入らしつて御自分の御用がお濟みになるとさつさと慌てゝ後をも見ずに逃げ歸つてお了ひになつたので

すから。男と云ふ者は皆現金なものですよ。香水やら簪やら色々のものを持つて來て吳れたり、優しい言葉を浴せたりするのは皆只さうして自分の娛しみを濃く味はひ度い丈けの爲めなので、一つ目的を達して了へばもう後は反古紙同然に人を投げ捨てゝ又次の慾情が起る瞬間迄は見向きもしないのだと。そして先々では懇に世話をして、自由な身の上にさして吳れるやうな甘い事を散々云つておき乍ら何時の間にか體裁のいゝ奥さんを他所から迎へて家庭の幸福だの何だのと云つてゐる。又女の方でも始めからそれは知つてゐるからそんな蟲のいゝ夢には引つかゝらないのだ。男は皆口先き許りの者だと云ふ事をうんと知らされてゐるから。で、君なんぞは自分のやうな者の在在を無論忘れてゐるに違ひない。「何だ。そんな奴がゐたのか。俺は知らない。何、俺が嘘を吐いた？ 馬鹿。人が醉つてゐる時に云つた事を本氣で取る馬鹿があるか。」かう云ふだらうと。尤も君は酒は飲まなかつたが。自分の肉慾に醉つてゐたのだから同じやうなものだ。處であの女も今度は止むを得ず君に此手紙を書いたのだが、それを書くと直ぐ又引き裂いて了つたのだ。そして「あゝ、馬鹿だ。馬鹿だ。妾はあの方から、獸だ。不潔な道具だ。穢ない〳〵ごみ溜だ。人間ではない、と思はれてゐる事を忘れてゐました。あの方にはもう立派な奥樣がおありになるのです。こんなものは見せら

れない。こんなものをあの方に今御覽に入れたらどんなにお怒りになるでせう。どんなに侮辱された氣がなすつて、「おのれ身の程知らずの腐れ女奴。穢はしい蛆め。黴菌奴。俺の面に泥を塗すらうと云ふのか。失せろ、畜生！」こんな事を被仰つて唾を吐きかけてお怒りになるに定まつてゐます。御無理はありません。妾は本當にさう云ふ穢はしい蛆なのです。黴菌なのです。」かう云つておい〳〵體を搖すつて泣くのだよ。そして矢張り自分のやうな者は早く死んで了つた方が社會の爲めにいゝのだ。「あゝ何の爲めに生れて來たのだらう。死に度い〳〵」と云つて氣違ひのやうに自暴になつて泣くのだ。僕だつて困るぢやないか。「そんな事はない。君は餘り日本の女過ぎる。そんな自暴を起してはいけない。Yだつて君が人間だと云ふ事位は知つてゐる。併しYは人間の尊さを知らなかつたのだ。そして君を辱しめたのだ。君が獸物ならYは猶ほ獸物だ、君はYの名譽を踏み躙つてやる權利を持つてゐるのだ。Yは君のあらゆる貴いものを踏み躙つたのだから。名譽の復讐をしてやり玉へ。その位の事でYはへこたれる奴ではないから。」と僕は云つてやつた。併しあの女は君一人を恨んだつて始まらない。第一自分にはもう人を恨むなんて氣力さへない、只生れた事が恨めしいと云つて泣くのだ。」

「一體どうしたのだ。」とYは胸を壓しつけられ乍ら息を吐く爲めのやうに訊いた。

「簡單に話すとあの女はあの後間もなく年期があけてあの「屈辱の牢獄」の門を出たのだ。そして東北の鄕里に歸つた、併し强欲な繼父はあの女が早く、と云つても五年の後で——歸つて來た事を不愉快に思つた。そして虐待した。近所の者はあの女を物珍らしげに見物に來て輕蔑した。あの女は誰からも對手にするのを恥辱とされた。併し運の惡いものには不思議に不運ばかりが重なるもので、一年たつと其處へ又更に恐ろしい運命が迎へに來たと云ふのは東京のある劇團が芝居の興行に其町に來たのだ。興行主はGと云ふ酷い奴だつた。するとあの女の繼父があの女を其處へ連れて行つて女優にして貰へまいかと訊ねた。興行主はあの女を一眼見て迚も女優になれる女ではないと見込んだけれど、その何處か見處のある顏と、肉感的な體格とに惚れて心の中である事を企らみ乍ら「よし、ではとにかく引き取りませう。」と約束したのだ。哀れなあの女は其團體に加はつて下働きをし乍ら再び恐ろしい東京へ出て來た。「あの女も女優に出世した」と其鄕里の者は云つて笑つたさうだ。丁度さう君があの美しい初戀を始めてゐた時分の事だ。

「處が……」とXは一服してから又續けた「東京へ來て見るとあの女は勿論舞臺には

出されずに、直様其Gと云ふ者の女中として妾にされた。Gには元ある紳商の後家であつた細君があつた。Gはそれと旨く金の爲めに關係して引つ張りこんだのだ。「どんな女だつて俺の手管にあつちやあ參らない者はない。」と云ふのが自慢の口癖であつた。Gは全くさう云ふ馬鹿な女を引つかける手腕には妙を得てゐた。やがて後家はGとの惡緣を後悔し出した。併し一旦陷つた恥辱の穽から何の面下げて二度と逃げ出す事が出來樣……と云ふ事をGは知つてゐた。又變に其女もあのTも猶々ながらGを憎めなかつたのだ。で、Gはいゝ氣になつて手當り次第に女を拵へた。そしてそれが嫌なら何時でも出て行けと其妻君に云つた。そして一つの狹い室にGは其妻君とあのTと三人で一緒に寢たのだ。」

「こんな話に慣れてゐない君の綺麗な耳には少し話が酷過ぎるかも知れない。併し君も小說家だ。而もそれは滿更君に關係のない話でもないのだからまあ辛抱して聞くさ。さうかうする中にGのあのTに對する虐待はだん〳〵露骨になつた。と云ふのはあの女が以前あゝ云ふ商賣をしてゐたのにも拘はらずGの種を宿して、Gの計畫を狂はせたからだ。「腐れた豚の癖にしやがつて人並みに孕んだりしやがる。生意氣な野郎だ！子が出來たつて俺の知つたこつちやねえぞ。」とGはうるさく毒吐いた相だ。其虐待の

爲めに泣き叫ぶあの女の聲は近所に聞えた。そして六ケ月目に其子は流產した。處が酷い話だが警察ではそれを墮胎だと疑つたので一旦埋めた墓を又ほじくり返して其子の屍體を檢査したのだ。其時にはあのTも氣違ひのやうになつて首を縊る繩を探し廻つた相だが、警察の疑ひは當つてゐたのだ。――」

「もう止さないか！」とYは堪へ切れなくなつて遮つた。「どうせ世の中には酷ど過ぎる話が多い事は分つてゐる。」

「恰度お仕舞だ。それから暫くごたくさがあつてからあの女はGから蹴離されたのだ。何故そんないやな處を早く出て了はなかつたのだと僕は云つてやつたが、あゝ女が絶望して了ふとそんな氣にもなれないものと見える。そして方々をうろついた後で僕の處へ來たのだ。」

「そして其五十圓を出せばどうなるのだ。」

「先づあの女の借金を拂つてやるのだ。それにあの女は今は乞食同然なのだ。方々に女中奉公にも行つたが風儀が惡く賤しいと云ふので何處の家からも出されて了ふ。强ひて行かせれば未だ何處かに口のない事もないのだらうが自分ではもう厭だ、自分には何も勤まらないと云ふのだ。かと云つて國に歸る事は猶ほ怖ろしい。で、僕は救世

軍に賴まうかと思つてゐるのだ。」
「先づそれがいゝだらう。」とYは辛やく云つたが、後は只々嘆息した。世界は只暗い一面丈けに見えて來た。彼は其金を出す事を承諾した。
「君がぢかにTに逢へば猶ほ安心して渡せるだらうが、何しろさう云ふ譯だからな。」
「いや、それよりは失敬だが君に賴む事にしよう。明日中には屆ける。」
「一度Tは君に電車の中で逢つた事がある相だ。併し君は確かにあの女を見たのだ相だが、矢張り知らぬ振をして本をよんでゐた相だ。其時にはあの女も心から、侮辱され、誰からも排斥されてゐるやうな賴りない淋しい氣がして世の中が呪ひ度くなつたと云つてゐたよ。」
Xはかう云つたがYはそんな覺えは全くなかつたので、それを打ち消した。彼は眼鏡をかけてゐない時は少し離れてゐる人の顏を見ても分らなかつた。
「まあどうでもいゝさ。何方にしろそんな事は。とにかくあれもかうして君に手紙を書くといふのはよく〳〵なのだと少しは察してやり給へ。今ではもういくら遠慮しても君にでも賴むより外に賴む處はないのだ。」
Yの心は全く打ち碎かれた。怖ろしさにしびれた。そして心からTに謝まり度くな

つた。彼の心は罪人のやうにハムブルになり、眼には涙が溜つた。しかし彼には今更どうする事も出來なかつた。
「怖ろしい事だ。」と彼はつく〴〵思つた。彼はGと云ふ男に對して腹は立つたけれども餘りに酷い話を聞くと人は個人を憎む事は出來なくなるもので、彼は漠然と只心を暗くしたのみであつた。そしてGよりは自分自身の事を考へた。
「五十圓。何と云ふ安い金だ。それはあの女とは何の關係もないものだ。出し度い事はいくらでも出し度いが、僕も未だ人の世話になつてゐる體だ。其他の償ひは未だ餘りに駄目なものではあるけれど、僕の仕事でさして貰ひ度い。五十圓でよければ、それが少しの罪亡しになるとも思はないけれども、僕は進んで出し度い。」Yはかう云つてゐる中に流すまいとした涙をつい流した。
眞(まつた)個く惡い事はしないものだと彼は思つた。つゞしまなければいけない。彼が一人あのTを穢がした事があらうとあるまいと、それは畢竟Tの全體の運命に取つては大した變化ではなかつたかも知れない。(かく云ふのは恐ろしいが)併しTに關係した者が彼のやうな男の大勢の代りに彼一人であつたとしたらどうだ。一人でして惡い事は大勢でしたから荷が輕くなると思ふのは間違つてゐる。少くも彼のしたやうな怖ろし

い事をする男がもし少かつたら啻にT一人のみならず、多くの女の運命の上に落ち來る呪ひは何の位少くなるか知れない事は明かである。そしてかゝる男性からの呪ひは女にとつての他の如何なる呪ひよりも怖ろしいものであらう。強ち男ばかりが惡いとは云へまい。が、少くも彼のやうな男は「お互だ。」と云ふのは少し蟲が好い氣がした。

醜く暗く見えたXの顏は次第に明るく見えて來た。Yが自分を邪推して猜鬼のやうに恨み、憎む者と思つてゐたXはYの心の溶けて涙さへ流すのを見てYを親しみを以て見るやうになつたと同時に、Yも亦Xを同胞に對する愛の眼を以て見るやうになつたからである。Xの中には未だYの醜さは映つて居たけれど、それを彼が責める代りに宥してゐることがYには感じられた。そしてその宥しを僭越だと思はずに有り難く思ふ程Yはハムブルになつてゐた。

「僕にも妻子がある。」とXは云つた。「其處には君の云ふやうな純潔な家庭が持つ美しい人生がある。然し凡ての人生は皆つながつてゐると僕は思ふ。妻は始めTに訪ねられて僕を詈つた。しかしTの身の上を詳しく聞いた時はすつかりTに同情して僕と共にTの爲めに泣いた。しかし僕は貧乏だ。だから僕はその金の方を君に負擔して貰つて、夫れ以外の世話を自分でしてやらうと思つてゐるのだ。」

「僕も妻に此事を話さう。それは僕には怖ろしいが、妻は何時か僕を宥して呉れるだらう。僕も實は偶にあの女の事を思ふ時それは實に怖ろしい事であり、未だ早いとも思ふけれど、何かあの女に就いて謝罪的なものを書かう。さもないと濟まないやうな惡い氣がする事もあつたよ。其誘惑に又打ち克たうともしたけれど、何しろあの女によつて象徴されてゐる僕の中のある姿はいろ〳〵の事にも拘はらず猶ほ現に僕の中に生き〳〵と働いてゐるのだ。僕は品よくそれから逃げて知らぬ振をして許りはゐられない。祕密なものは時々日光に曝して蟲干する必要があるのだ。祕密の蟲は殺さない限り暗中で繁殖する。それは危險だ。僕のした事は恥かし過ぎる。それを思ふと或る時は何だか嘘のやうな氣もして、此自分がそんな事をしたのかとも思はない事はないけれど、何と云つてもそれは欺けない事實なのだ。いくらひど過ぎても打ち消せない事實なのだから仕方がない。せめて之からは二度と同じ罪を斷じて重ねず、出來る丈け善くなつて行くより仕方がない。僕の親友の一人が云つた。「過去に善くない事をしたからと云つて其爲めに現在と未來に善い事をしてならないと云ふ法はない。」過去の事實は自分の自信を傷け、慰安を妨げる。自分にハムブルになる事を強ひる。しかしそれ丈け猶更過去に善い事をした者よりも善い事をしてそれを埋め合はせなければな

らないのだ。實に實行すべき事は多いのだ。」

Xは喜んで云つた。「では此手紙ももう必要はなくなつた。こんなものは此處に置かない方がよからう。」と云ひ乍ら其Tの手紙を引き裂いた。するとそこから煙が立つてXの姿は其煙の中にかき消えて了つた。

Yは呆然として約束の五十圓の事を考へた。それは此場合として如何にも僅かな金高である。併し彼はどうして其金を獲るか。彼は先づ母の處へ行つて銀行の札を貰ひ、それを以て銀行から出して來るより仕方ない。それは造作ない事ではあるが、それが直ちに彼の家族中に知れ渡つて、何の爲めにそれが遣はれたかゞ母や、妻や、兄弟達に知れる事は彼の勇氣を衰へさせた。困つた事になつた。嘘を吐かうか。何と。いや、それはいけない。矢張り正直に打ち明けて了はう。たとへどんな厄介な事が起らうと、それ位の事が出來ずにどうする。それが正當の報いだ。彼は興奮して思つた。

すると何處からとなく優しい美しい聲が聞えて、「其お金は妾が出しましよう。」と云ふ者があつた。ふと見ると其處に輝いた葡萄を一杯ざるに入れて持ち乍ら彼の元の戀人が立つてゐた。

「さあ此葡萄をお上りなさい。なるべく澤山ね。これは藥ですよ。だから甘くはありません。そして貴方はこれを上ると眼がしむくなつて涙を流してよ。えゝ、お泣きなさい。そしてなるべく澤山ね。只さう云ふ涙だけが貴方の身そゝぎになるでせう。そして貴方が落した涙を拾ひ集めて御覽なさい。なるべく澤山ね。貴方の入用なものは其處にあります。」

かう云つて彼女は其輝いた葡萄の實をもいでは室中に投げ散らした。彼はそれを喰べない先から泣き出した。そして其處に泣き伏した。バタ〳〵と葡萄が彼の脊に當つた。はつと彼は氣がついて眼を開いた。其處には二つになる彼の子供がゐて紅葉のやうな手で彼の脊をたゝいてゐた。

「ババ々々々々。」とそれは云つて漸く生えかけた小さな齒を見せ乍ら小天使のやうに笑つた。全くそれはもし翅が生えてゐたならば天使と見えたであらう。そしてそれは其時神々しく見えた彼の妻に抱かれてゐた。

彼はポカンとして起き上つた。凡ては幻であつた。しかし彼は淋しさと、悲しさと、謝罪の念とに充されてゐた。そして彼の眼からは何と云ふことなしに涙が湧く事を止めなかつた。何と云つて謝まつてよいか。誰に謝まつてよいか。彼は會はす顏もないと云ふやうに其處を逃げ出して顏を洗ひに階下に降りた。今こそ彼は眞に神聖なしか

しハムブルな謝罪的愛を以て其幻の女、Tを心に見た。そして眞面目に彼女の事を考へ、其の運命の上に祝福あらん事を心の中に祈つた。「蟲のいゝ奴め！」と何かに囁かれながら。もし此時に誰かゞ彼に「生きるとは何だ。」と訊いたならば「生きるとは本當に泣く事だ。」と彼は答へたであらう。

彼女は何うしてゐるであらう。願くば幸あれ——

彼は子供を抱いて十坪ばかりの庭に出た。子供は彼の腕の上でピョン〳〵喜んで跳ねた。

「ホラ。ノノサンだよ。」彼がかう云つて向うの高臺の上に今しがた現はれた十五夜の月を指して云ふと、子供はクリ〳〵した小さい腕を伸べて月の方を指した。高い〳〵永遠な平和の裡に淸く澄んでゐる月の方を。

彼は何者かに宥しを乞ひ度い氣がした。何者かに自分を護り、善く導いて呉れるやうに祈り度い氣がした。そして自分が未だ餘りに駄目な者だと云ふ事をつく〴〵感じて其恥かしさと心細さとが彼を苦しくした。しかし夕飯がすむだ時には又氣が變つて每もの冷靜に歸つてゐた。

「私を導いてゐる力よ。私は今日貴方があの恐ろしい幻影を私に見せて下すつた事を

感謝します。本當にあれは只もう取り返しがつかない事だと云つた丈けは餘りに濟まない事の氣がします。併しいくらさう云ふ氣がしてもそれは矢張り取り返しがつかないのです。又私は人間と云ふ者が自分の嘗てした事をそれ程痛切に後悔出來る程變り得るものかどうかを疑ひます。もし同じ事を他人がした場合には怒りもし輕蔑もする事であらうとも、そして其甲斐の絶對にない事が明かである厭な事の爲めにそれ程苦しめる者かどうかを疑ひます。かく云ふ私は無良心でせうか。併し此事は私が其エネルギーを後ろに注ぐ代りに前に注ぐべき事を暗示してはゐないのでせうか。私は無暗に苦しむ人間ではありません。私を無暗に苦しむ人間だと思ふ者は私を見誤つてゐます。私は自分に無理な事は望みませんから。が、私はよく泣き度くなる人間です。そしてその涙の中に愛と感謝と、希望とを感じて勇み立たずにはゐられなくなる人間です。貴方に對する私の內の欲求や、私を取り卷く外部のあらゆる事情は私に高潔で正しくなる事を强ひます。が、それにも拘らず私は猶ほ恥かしい迷ひに惱まされるのです。併し又それにも拘らず私は希望を失はずに少し宛貴方の方に進んで行きます。そして又私はいろ〳〵の事が中々容易には卒業出來ない事を貴方に感謝します。苦鬪のない處には生き甲斐がありませんから。私は云はば矛盾だらけな統一です。併し私の

中にも小さい乍ら或る光りはあると思つてゐます。私は其光りを少しづゝ大きくして行く事によつてだん〳〵私の中の闇を闇でなくして行くでせう。どうか私を見捨てずに下さい。」彼は心の中にかう何者かに云つた。

夏の夜は靜かに月は高くむらがる雲の間に輝いてゐた。

――一九一六、一――

生活の一片

（これは小説と云ふよりも日記の一節として讀むでほしい）

一

朝遲く寢床で夢を見てゐた自分は突然小さな地震に起こされた。自分は地震がひどく嫌ひであつた。時計を見るともう九時に近かつた。それでも性來大の寢坊であつた、又昨夜眠りに就いたのが二時頃であつた自分は未だ眠足らないやうな氣がした。自分にとつて一日は大事である。殊に午前の二三時間が大事である。其二三時間の間に自分は一日のエネルギーのエッセンスを仕事に注がなければならない。其爲めには少しでも十分に眠つて頭を休め、その力を養ふ必要がある。——「もう少し眠らう」と自分は思つた。併し地震におびやかされた自分の頭はもうすつかり覺めてゐた。それに地震は自分に向つて「もう起きよ。人々は五時間も前から働く事を强ひられてゐるのだ。」と云ふ警告であつたやうな氣もした。何故と云ふに自分は物置小屋を作つてゐる大工の釘の音を聞いたからである。

自分は起きて物聞きに臺所に來てゐる御用聞きの眼をそらしながらわきの湯殿に行

つて顏を洗つた。十一月の水は冷たかつた。併し自分の寢坊を意識してゐる自分にはその冷たい事が快かつた。

毎も朝顏を洗ひながら自分は其日の頭がいゝか、わるいかゞ豫想出來るのであつた。「今日は駄目だな。」と此時自分は思つた。で、自分は機嫌を惡くしながら二階の書齋に上つた。其處には例の如く新聞と郵便とが机の上に置かれてあつた。自分は一通りざつとそれに眼を通すと放り出して、其日に書くべき豫定の個處に就いて考へ始めた。さうして其製作に頭を集中するのだ。

「爺や」と呼ばれてゐる五十許りになる傭ひ人が其時自分の朝飯として定まつてゐる紅茶を持つて來る跫音が楷子段に聞こえた。自分は慌てたやうに其處にある一冊の本を取つて擴げ、それを讀んでゐる風をしようとした。朝寢坊をして、其上未だぼんやり何もせずにゐるやうに思はれるのが氣まりが惡かつたからで、又自分がどんな素晴らしい事を考へてゐやうと、思ひもつく筈のない彼は其爲めに自分を輕蔑するであらうと思はれるのが厭だつたからであつた。

自分は此爺やを愛してゐた。そして其必要がなかつた爲めに一度たりとも此年寄りの不幸な男に比較して自分の方が勝さつてゐると感じたことはなかつた。むしろ何方

かと云へば自分は此爺やに對してひけ目を感じてゐた。彼は其勞働者になつてゐる可愛いゝ一人息子や、我身の上をわりに裕福で、勝手で、何處へ勤めると云ふでもない、爲度い放題の事をして居られる自由な自分の身の上に引き較べて何かを感じてゐない筈はないと自分は思つてゐた。で、自分には何となく他の女中よりも、其女中と同じ生活をして、より少い給金を受けとつてゐる此爺やの方が——男である丈け——一層憐れな者であると云ふ氣がしてゐた。で、自分は(中々さうは行かなかつたが)なるべく此爺やの仕事が樂であるやうにしてやり度いと思つてゐた。さうして自分の喫ふ「朝日」を幾つか此爺やが買つて來る時には必ず其一個を彼に與へる事にしてゐた。

とにかく今自分は慌てゝ本を讀むふりをした。と同時に今になつて未だこんな下らない見榮を本能的に張らうとする自分に恥ぢた。又もう少しは自信があつていゝとも思つた。で、又本を机の上に置かうとして迷つてゐる時に爺やは自分の處に來た。自分は輕く會釋をして何氣ないやうにそれを受けとりながら本をよんでゐるやうに見せた。そして爺やが行つて了ふと頭を振つて我身を「馬鹿だな」と云つた。自分が未だこんな風である事を人が知つたならば多くの人は嘸ぞ自分に愛想を盡かすだらうとも想つた。しかし自分は爺やが自分の事を「怠け者ではあるがとにかく優しい善い方だ」と思

つてゐるに違ひないとも思つてゐた。

案の定、頭は惡かつた。で、二三枚書くと自分は欠伸をした。自分は少し癇癪を起した。朝から欠伸をするやうでは仕方がないからである。自分は軟かい日光が照つてゐる緣側へ出て見た。すると眼の前で三人の大工が働いてゐた。大工は自分を見て下から挨拶をした。自分も挨拶を返へした。しかし丁度自信の無くなつてゐた自分は又大工に輕蔑される事を怖れて室の中へ引き込んだ。

「此家の若い主人は朝九時過ぎに起きて、而もぶら〳〵してゐる。こんなのらくら者がゐるから自分達は助からないんだ。」と思はれる樣な氣がした。そしてそれは何となく恐ろしい事の氣がした。自分は又机に向つて今度は本をよんだ。丁度其時階下で小さな子供達が何か喋舌てゐる可愛いゝ聲が聞こえた。と、自分はほゝ笑むより早く抱いてあやしてやり度い衝動を感じて、自然に起ち上つた。子供の笑顏が眼に見えるやうな氣がした。小さな手で頰をたゝかれ度くなつた。しかし自分は「未だいけない。今日は未だ碌に仕事もしないのだ。」と思つて一時こらへた。そしてそれから十分許り後に自分が再び子供を抱き度くなつて階下に降りた時には子供はもう午寢をしてゐた。自分は大工に見えないやうにして子供の寢顏に接吻した。自分は寢轉ばうとすると直

ぐ意識してそれを止した。そして少しこだはり過ぎると思つたが此見榮以上のものが含まれてゐるとも思つた。

午後から空模様が變つて夕方には雨が降り出した。此晩自分は二人の友人SとNとに訪ねられた。二人とも畫家であつた。そしてNは近頃自分の友人になつた人であつた。自分達は最近に催される筈の展覽會に就いて何かと話をしてゐた。それは××社と云つて自分の知つてゐる若い畫家の數名によつて成り立つてゐる一つのグループであつた。そしてSもNも其仲間の人々であつた。

此××社は未だ世間的には認められてはゐなかつた。むしろそれ以上に反感を以て無視しようとされてゐた。何故なら此社の人々は日本の洋畫及び日本畫を通じて殆んど唯一つの文藝に於ける自分達と同じ根本的行き方をし、本道を歩みつゝある正しき群であつたからである。自分達は要求を同じくし、人生や藝術に對する態度や、根本の精神を等しくするが故に自づから深き愛を以て成り立つ友達同士であつた。そして共に世間に媚びなかつた爲めに世間から嫌はれてゐた。世間は自分達を等しく無視出來る限りは無視を以て默殺しようと骨折つた。しかし世間以上の世界を知り其處に生きずにはゐられなかつた自分達はその淋しさの爲めに勵まされやうとも弱らされはし

なかつた。そしてだん〳〵各自の內面に眞の自信を築き上げて行く事に努めた。そして各自は又其自信と製作とが心ある人々の裡に確かな種子を少しづゝ蒔いて行く事、そしてそれがやがて眞の勢力となるべき時の來る事を信じてゐた。

今自分達三人は未だ今度の展覽會も恐らく世間からは惡意ある無視をつゞけられるであらうと云ふ事、今が一番惡い時である事、併しもう二三年たつて一同が今の勢で生長して行つたならば屹度面白い時が來るであらうと云ふ事、且つ今さう云へば世間は必ず笑ふであらうと云ふ事、併しそれはたとへ何年先きの事にしろ事實であると云ふ事。そして又世間程力のあるやうで力のないものはないと云ふ事などを例の如く話した。

九時頃になつて二人は歸る事になつた。自分の家は赤坂にあつた。そしてSの家は本郷にあり、Nの家は代々木にあつた。Sの方が未だ便利がよかつた。しかしSは會場の用の爲めに神田へ廻らなければならなかつた。

雨はひどく、道は惡かつた。自分は二人にマントを貸し度く思つた。然し自分の處には學生時代のマントが一つしかなかつた。自分は二重マハシを持つてゐたが、それを貸すと明日自分が出る時に困ると思つた。二人は寒相にしてゐた。自分は其一つの

マントを何方に貸さうかと思つたがSは自分のわりに古い友達でNの先輩でもあり、且つ神田に廻らなければならないのでSに貸す事にした。SはそれをNに讓らうとしたがNは遠慮した。二人共カンバスを持つてゐた。そして二人共低い駒下駄をはいてゐた。自分は足駄を貸さうかと思つたが自分の處には矢張り足駄は自分のが一つしかなかつた。自分は若し入用ならば買へばよいのだが、二人の中一人に丈け貸す事も工合が悪いと思つた。せめて自分の外套でもNに貸せばNは助かる事は明かであつた。しかし自分はそれを強ひてはすゝめなかつた。そして二人は歸つて行つた。

二

翌日は展覽會の開かれる前日で××社の人々は早朝から自分の家に近い三會堂に集つていろ〳〵の仕事をしなければならなかつた。自分は其日母の處にある額縁をNに貸す約束になつてゐたので取りに行かうとしたが、丁度友達のMが來たので夕方迄自家で話をした。そして妻に母の處へ行つてその額縁を三會堂へ屆けさせるやうに云ひつけた。

Mが歸つてから自分は母の處へ行つて母と妻と三人で晩食をした。そして八時過ぎ

に母の家を去つて家に歸る途中丁度間にある三會堂に寄つて見た。

××社の人々は未だ灯りを點して働いてゐた。會場は廣く薄暗かつた。そして額を懸ける釘を打つ音が寒い空氣の中に高く響いてゐた。働いてゐる彼等の多くが足袋もはかずにゐる事を見た自分は絹の襟卷をして溫かい外套を被てゐるのが少し氣になつた。此の人々は皆物質的には貧しい。不幸な人々ばかりであつた。中にはTと云ふ此十二月から三年兵に引つ張り出される筈の有望で熱心な畫家もあつた。自分はとにかく會場を一周して半分程懸けられてある多くの畫を見て廻つた。そして皆んなが多くの物質的迫害にも拘はらず生長しつゝあるのを見て愉快を感じた。

皆は之から蕎麥を取つて食べる處であるとSは云つた。そして自分にもよければ食べて行かないかとすゝめた。それはもう九時頃であつた。皆はカナリ空腹で又疲れてゐるに違ひないと自分は思つた。

其時自分はNが跛を曳いて歩いてゐるのを見た。どうしたのかと訊くと釘で踏み拔きをしたのであつた。踏み拔きは自分も覺えがあるが、思つた丈げでも耐らないものであるから自分は少し氣になつた。Nは顏では笑つてゐたが痛い事は明かであると思つた。自分は少し訊いたがどの位の深い傷かよく分らなかつた。しかしNは重たい臺

を持ち運ぶ時に釘を踏んづけたのであるからその傷はさう淺い筈はなかつた。薄暗い會場では何處に釘が落ちてゐるか分らないのだ。そしてNは無論繃帶もせずに汚れた、冷た相な素足を曳きずつて皆の手傳ひをしてゐた。自分一人其傷の爲めに仕事を缺かすのを皆に惡いと思つてNは我慢をしてゐるに違ひないと自分は思つた。それが氣の毒であつた。

Sも其處にゐて早く藥屋に行つて斯々の藥を買つて附けたらよからうと親切に云つてゐた。自分は考へた。此場合一番善い當り前な事はNを自家(うち)に連れ歸つて、硼酸水でよく傷口を洗ひ、そして繃帶させ、且つ其晩は自家に泊まつて貰ふ事である。自家には大した藥もないが其位の事は出來るし、又何か食物もあり、其上風呂が立つてゐる。さうすれば明朝又早く會場へ來るにしても遠い代々木から態々出直ほして來るよりも何の位樂か知れないし、傷の爲めにも確かに善い事は明かである——併し自分はそれを能う云ひ出さなかつた。それはS達のゐる前でさう云ふのが親切を衒ふやうで厭だからと云ふ譯でもなかつた。何故ならN一人にそつとさう云ふ事はわけはない事だつたからである。さうして自分は大事にするといゝとか、何とか云つてゐた。

尤も自分はその事を餘程Nに云ひ出さうと思はなくはなかつた。又云ふべきである

と云ふ氣もした。自分はそれが（その痛い傷の足を以て此雨の中を代々木迄歸ると云ふ事）Nにとつては中々些細な事でないと云ふ事を知つてゐた。その傷にはもう既に黴菌が入つてゐないとは云へない。もし自分だつたとしたならばそれはどんなに情けない、不愉快な事だらう。それにNはひもじいのだ。Nと自分とは十近くも齢が違ふ。Nは若く、元氣で、さう云ふ遠路に慣れてはゐやう。だから自分が思ふ程それを大變な事に思はないかも知れない。併しそれは止むをえず諦めてゐるからでもあるのだ。それにNは藥を買ふ事が出來るか、——さうしてぬかるみの中を霑れて自家に歸る迄にはよし風邪を引かない迄も多分猶ほ惡くなるであらう。

自分は之等の事を不明瞭にではあつたが感じてゐたのだ。さうして流石遠慮深いNも自分が或る事を云ひ出すのを待つてゐるやうな氣もした。又Sもわきにゐて自分が當然さう云ひ出すであらうと期待してゐるやうな氣もした。併し其時自分の意識の表面には氷が張つてゐたのであつた。それは殊に自分の精神が疲れてゐる時自分の性癖であつた。その氷はもし誰かゞ其場合に極く小さな石片でもそれに投げる事を敢へてしたならば必ず破ける程薄いのである。しかし其儘では破けないのだ。さうしてそれは自分の內と外との間に隔離の障壁となるのである。

此氷はある時には全く解けてなくなつて居り、自分の意識の面は小春日和の溫かい小波のやうに柔和である。かゝる時自分は凡ての人に對して直接に自分に、愛の波を投げかけるやうな氣分になる。自分の心を他人の心に抱きつかせ度くなる。さうして自分の意識は比較的多くの愛の眼を睜いて、何かの機會を「あれかし」と探すのである。かゝる時は自分乍ら氣持がいゝ。

之れに反して或る時はそこを不愉快な氷が一面にとざすのである。或る時は薄く、或時は厚く。何故か。——それは自分にも分らない。只氣分である。さうしてそれは厚くなればなる程自己は外界から切り離されて孤立的になり、又孤立を慕ふのである。そのひどい時は自分は恐ろしい人間嫌ひになり、偏屈になり、冷やかになり、意地惡くなり、かたくなゝエゴイストになり、口一つ利くのも厭になる。そんな時は自分ながら息苦しい。自分ながら恐ろしい位になる。甚だしく不愉快で、窮屈で、心が凝り固つて了つたかのやうに動きが取れなくなり、それでゐてどうする事も出來ないのである。さうして只無暗に外界や人との關係がうるさく不快に思へ、それから逃げ度くなる。何處か遠いゝ處へ家族丈けを連れて行つて了ひ度くなる。——實に淋しい。

かくて此氷の爲めに自分は今Nの生傷(なまきず)を眼の前に見乍ら、且つその難儀をいくらか

の同情を寄せ乍ら矢張り默つてゐたのである。

Nはsにすゝめられて歸つた。自分は彼と挨拶した。さうして又會場を一周り廻はつた。「大した事はないだらう。それに俺はNに額緣も——いやな額緣ではあるけれど——とにかく寄附したのだ。」こんな事を自分は思ひながら一同に別れを告げて歸り路に就いた。

人間には物質的の吝嗇があるやうに道德的吝嗇と云ふものがあると思ふ。それは德の高くない證據ではある。自分がある事を人にする。自分でそれを善い事だと思ふ。するともう其上に又何か善い？事をするのに吝になるのである。殊に氷が心に張つて、愛の眼が閉されてゐる時その吝嗇はひどくなる。自分ばかりを低級な意味に於て意識する自分は今Nにいやな額緣を與へた事を考へたのだ。自分でもそれは詰らない事だと云ふ事を知つてゐる。併しそれを辯解にするのだ。

自分は自家に歸つて子供を抱いて風呂に入つた。妻がそれをうめ過ぎたのを叱つた。しかしいゝ氣持になつて上り、さうして自分の書齋に來た。其處には唯自分のみが味ふ事の出來る精神的な自由がある。自分は此自由に浸りながらゆつくり氣儘をし度かつたのだ。此室の中でのみ自分の氷はいくらか解けるのである。何故なら其室にある

ものは皆自分のものであり、慣れ親しむでゐるものばかりであるから。

かゝるくつろいだ自由の愉快さは今Nにしろ、又其他の誰にしろを連れて來る事によつて破壞されるのである。自分は素よりNに厚意を持つてゐる。そして大抵の場合自分は人の來訪を隨分喜ぶ人間である。併しそれは自分の自由と調和しなければならない。殊に自分は夜になると疲れる。自分は「よく眠れる爲めに」爺やを呼んで葡萄酒を持つて來させた。そして一杯以上それを飲んだ。爺やにも一杯を與へた。酒はうまかつた。自分は快くなつた。さうして自分は一人の愉快を享樂しながらメーテルリンクを靜かに讀んだ。妻が來る。子供が來る。併しそれは自分の自由を傷けはしない。却つて愉快にする。家族丈け——自分の氣に入つてゐる室で、溫かい火にあたりながら、さうして自分の爲度い事をする。こんな事は他人がゐては出來ない。自分は他人のわきで自由になれない性分である。

自分達は寢床に就いた。洗ひ立てのシーツの上にズツと脚を延ばすと自分の足は先刻から入れてある懷爐に觸れた。それは丁度いゝ加減にぬくもつてゐた。自分の感覺は喜んだ。貧血である自分は寒がりで、足は水のやうに冷たい。それで自分は結婚後去年の冬から寢床に懷爐を入れる事を自分に許すともなく許してゐる。妻や子供と共

用にと云ふわけで。

時々女中がそれを入れる事を忘れる。その時には自分はそれでいゝと思ふ。たとへ故意でそれを入れなかつたにしろ。自分はそれをてんで咎める氣にも催促する氣にもならずに却つていゝ事に思ふ。少しその贅澤すぎるのに氣が引けてゐるからである。

併し此晩それは自分に直ぐNを想ひ出させた。否、Nの事は先刻から忘れずにゐたのでそれは猶ほ自分の氣に咎めたのである。Nはあの傷をどうしたらう。そのズキズキ痛む冷たい足を今頃は薄い蒲團の中でどうしてゐるか。しかし自分は厚い蒲團を寒がりだからと云ふので二枚もかけて懷爐に足を溫めてゐる。自分はいくら若い時でもNのやうにした事はなかつた。さうして自分のわきには毎も自分の世話をする母がゐた。多勢の女中がゐた。しかし兩親を失つた貧しいNは同じやうに不幸な友達と共に小さな家に住み、凡て自分一個で自分の事はしなければならない。それはいゝ事であらう。有望な男にとつては要するに何でもない事であらう。自分とてもNの境遇にゐれば又それに應じてやつて行くに違ひない。さうして矢張りなる丈けの者にはなつて見せる。しかしそれは平常の事であつて、今Nは怪我をしてゐる場合なのだ。さうして自分はその當然の責任を其場で逃げたのだ。Nは自分を恨むでゐるであらう。冷酷

な人間であると見下げてゐるであらう。否、さう思はれていゝのだ。不服はない。——と自分は思つた。

「おい。」と自分は妻を呼んだ。そしてNの怪我をした事の顚末を彼女に話した。

「まあ、お氣の毒な。」と妻は驚いて云つた。「何故連れて入らつしやらなかつたの？」

自分は答へを知らなかつた。妻はムキになつてNに同情し、自分を詰つた。

「妾が其處にゐればそんな事はさせなかつたのに。貴方は薄情な人ね。」と妻は云つた。

「併しお前はよくブツ〳〵云ふからな。Nを連れて來ればお前が又ブツ〳〵云ふだらうと思つたのだ。風呂が何うだ。子供が何うだと云つて。」自分は全で理窟もないこんな事を云つた。さうしてさう云ひながら心に恥ぢた。

「えゝ妾はよくブツ〳〵云ふわね。ほんとに惡かつたわ。しかし貴方が何誰を連れて入らしつた時でも妾は不平なんか云つた事はないぢやありませんか。殊にこんな場合なら妾はブツ〳〵云ふどころか却つて喜んでよくしてあげるのに。丁度今晩はお湯も立つてゐましたし。」

妻はこんな事を云つて悔んだ。自分は默つてゐた。さうしてそれ迄はそれ程に感ぜずにゐた自分の爲た事が妻の譴責によつて俄かに惡かつた事がはつきりして來た。

「とにかく貴方にも似合はないしくじりをなさつたのね。」と妻はやがて云つた。

「うん。しくじりだつた。」と自分は永い沈默の後で云つた。「ほんとにしくじりだつた」

自分の後悔はだん〳〵強くなつた。「どうしてあんな事をしたんだらう、」と自分は思つた。基督敎徒でない自分は自分を惡い〳〵とは中々思はない人間であるに拘はらず此時後悔は自分をわりに苦しめた。「どうして默つてゐられたのか。詰らない自分の享樂の爲にどうしてあゝ冷淡にしてゐられたのか、自分ながら分らない。」氣がした。「少ししくじり過ぎた。自分以外の誰でもあの場合あんな過ちはしなかつたらうに。俺一人に違ひない。分りきつた當り前の事だ。友達が怪我をして雨の中を代々木迄歸らなければならない。而も足に怪我をして、腹ばひもじく、藥は持つてゐない。さうして殊に明朝早く再び此處へ來なければならない。のみならず自分の家が遠いと云ふなら未だしもだが、其會場からは僅か五丁位しかないのだ。さうして自分の家には凡ての用意が整つてゐる。たとへ其傷を善くする事が出來ない迄も、より惡くなるのを防ぐ事は無論出來るのだ。さうして恐らくNもそれを望んでゐないと思へない。それを自分は默つて、冷やかに見過したのだ。わりに氣がついてゐながら。——少しひど過ぎる過ちだ。質のわるい過ちだ。少し道德的な人間なら爲し得ない過ちである。」と自分

は思つた。

自分は自分の生活を人に見られるのを――殊に貧しき生活の人に見られるのを好まない。だから大工がそれを見る事をも怖れるのだ。それは只見榮ばかりではない。又只氣まりが惡いから許りでもない。それは何となく怖ろしい事に思へるからである。とは云へ自分の今の生活は素より理想的なものではないが、別に他人のそれに比較して恥づべきものと思つてゐる譯でもない。それにNはよく解つてゐる自分の友達である。故に自分の家に泊つたからと云つて自分の比較的贅澤な習慣や朝寢坊等を見て、その爲めにまさか自分を輕蔑する事もあるまい。凡て考へて見れば何でもない事である。併し自分の頭は中々さう合理的には働かない。殊に氷が張つてゐたりするとそれは全で無意味な變な處にこだはる。そして何でもない事を億劫に思ひ、何よりも自分の氣儘を愛する。

併しそんな事が何だ。僅か一晩の事でNは只大きに助かるのだ。のみならずNは喜ぶであらう。それでいゝではないか。「過ちとは此の事だ。かう云ふのを過ちと云ふのだ」と自分は思つた。「……もし自分の愛がその氷を打ち破る丈けの力があり、さうして眼がばつちりと覺めてゐたならばこんな過失は免れたらうに、俺が惡るかつた。實

に惡かつた。」と自分は心から思つた。「貴方にも似合はない」と妻が云つたのは自分に對するお世辭のやうに思へた。

「しかしこんな事があればもう今度からは二度とこんなことをしなくなるからいゝわね。」と妻は自分を慰めるやうに云つた。

「もうしない。」と自分は強い決心を以て云つた。二度としないと云ふことは云へない迄も少くなる事は事實だらうと思つた。心の氷はすつかり打ち碎かれた。さうして自分は其時善良になつた。

自分はもしNの怪我が黴菌の爲めに重くなり、さうして醫者の入費がかゝり、或は入院か、手術でも要するやうな事があればその費用は自分が全部負擔しようと思ひついた。「無論の事だ。其位は無論する。」と自分は思つた。そして其事を妻に話した。妻も同意した。自分は妻の心を嬉しく思つた。何故なら自分達は些しも餘分の金を持つてはゐないからである。

其時爺やが嘘をした。自分はいろ〳〵の事を考へた。

三

翌朝自分がわりにいゝ頭で仕事をしてゐると母が青い毛氈をわざ〳〵自分の書齋に敷くやうにと云つて持たせて寄來した。自分の父は學者で書齋に支那の毛氈を敷いてゐたからである。母は前から自分の室に毛氈を敷くといいやうな事を云つてゐたが自分は毎もよく聞きもせずに「そんなものはいらない」とばかり云つてゐた。それにも拘はらず母は序での物と一緒にそれを持たせて寄來した。母のする仕事は凡て親切を通り越して執拗いのだ。

妻がその毛氈を持つて來た時分は少し不快に思つた。併し妻が「折角かうして下すつたものですから敷いておいたつていゝぢやありませんか。」と云つたので自分は少し氣になつたがどうでもいゝ事だと思つたので默つて妻の敷くがまゝにさせてゐた。自分の机の上にはキレイに花も活けてある。それは自分が挿したのだ。自分は花の芳香を嗅ぐ事が好きである。自分は花が机に乘つてゐる時今迄の經驗では不思議に頭の元氣がよく、仕事の調子もいゝのだ。それに花を机の上に見る事は自分の頭に一寸氣持のいゝ新鮮な刺戟を與へる。かくて自分の書齋は大分キレイになつた。毛氈も敷かれればキレイでない事もない。が、とにかく今仕事をしてゐた自分はそんな事を構つてゐる暇はなかつた。

それでも自分はやがて又妻とNの事を話した。「どんなだらう。今日はよくなつてゐて會場へでも來てゐて呉れるやうだといゝが、惡くなつてゐはしないか。」などゝ話した。此日も雨が降つてゐた。それで無論Nは來ないであらうと思つた。「もし來てゐなかつたら見舞に行かうか。行かう。」と自分は思つた。しかしさう思ふと。急にそれはひどく億劫な事。虚僞な事、空々しい事のやうに思はれた。「とにかくハガキで簡單に樣子を訊いて見るか。」などゝ思つた。

其處へ友人のRがOと云ふ人と一緒に來た。Rは自分のごく親しくしてゐる友の一人で、矢張り××社の中では先輩の一人として其同人になつてゐる畫家であつた。自分達は今度の展覽會や、Sの非常な骨折り抔に就いていろ〳〵話をした。そして午食後三人で近い會場へ出掛けた。

會場へ行くと自分は何よりも先づNを探した。Nが來てゐるかゐないかを見ようとした。處が多分來てゐまいと思つてゐたNは來てゐた。彼は足に繃帶をして跛を曳いてゐたがにこ〳〵笑ひながら元氣にして近づいて來た。自分は喜んだ。安心した。そして挨拶した。しかし何となくNに容態を訊ねるのが氣がひけるやうな氣もした。

「足は何う?」と自分は思ひきつて何氣なく訊いた。

「有り難う。もう大變よござんす。」とNは謙遜に笑ひ乍ら答へた。自分は此答へを聞き度い爲めに容態を訊いたかのやうであつた。それはNの爲めと云ふよりもむしろ、それを聞いて自分の過失の罪を輕くしたい欲望の動機の方が多かつたであらう。Nの傷が輕ければ自分の罪も輕くなるやうな氣がするのだ。さうして自分の冷淡にいくらか云ひわけが立つやうな氣がするのだ。自分は此自分の利己的な動機に氣がついて心に恥ぢた。しかし自分はNの爲めにもそれの輕かつた事、早くいゝ方に向つた事を喜ばなくもなかつたのだ。

「それはよかつた。」と自分は思はず云つた。そして「昨夜は隨分心配してゐた。」と曖昧に附け足した。しかし自分がこんな事を云つてもNは信用しないであらうと云ふ事、口先き許りうまい事を云つて心は怖ろしく冷淡で薄情なんだとNは思つてゐるであらうと思つた。善良なNは別にそんな事は思はないかも知れないとも思つたがさう思はれるのが當然だと思つた。

Nは昨夜は隨分傷がウヅ〳〵して痛んだ事、夜中に何遍も其痛みの爲めに眼を覺まして傷の重くなる事を心配した事、しかし今朝になつて見たら大分痛みが輕くなつてよくなつてゐた事を話した。自分はNに同情した。そして自分のやり方の惡かつた事

をNに謝まり度いやうな氣もした。

自分は猶ほNに訊き度い事もあつたがそれを訊くのは止めた。又「ほんとに大事にするといゝ」と云はうかとも思つたがそれを云ふ資格がないやうな氣がして云はなかつた。そして丁度其時向うに見えたMの處に行つた。Mにも此前會つた時には少し例の氣分の爲めに無愛想であつたので今日は愛想よくして機嫌よく會はうと思つたのだ。自分はMに對しても勿論深い愛を持つてゐる。何なら此處の歸りがけに又自分の家にR達と一緒に立ち寄つて貰ひ度くも思つたがMは歸る事になつた。しかしみんなに純粹な厚意を見せつゝ機嫌よく談笑した。

自分の妻も其處へ來た。妻は直ぐNの處へ行つた。「そして同じやうに容態を訊いてゐるらしかつた。妻が昨夜心配してゐた事を話せばNも自分の云つた事を嘘でなかつたと思ふであらうとも思つた。

自分の知つてゐる大勢の人間の中で本當に敬愛する事の出來る善い人間は二三の人を除いて皆貧しい人々であつた。自分は××社の人々に少くも展覽會のある間は毎日自分の家に來て食事をしてほしく思つた。殊に昨夜の事があつて以來自分はそれを欲した。妻もそれを自分以上に欲した。電車に乘つて遠い處から會場へ來て其處で辨當

を取る位ならば自分の處に來て食事をしてほしい。それは何でもない事だ。そして當り前の事である。彼等は皆自分の友である。自分はそれをNや二三人の人に云つた。しかし料理屋の主人のやうに呼ぶ譯にも行かなかつた。そして彼等は皆人並外れて遠慮深かつた。

其翌晩Nは他の同人と共に自分の家に來て何事もなかつたやうに毎もの如くして繪を見たり、其他の話をしたりした。彼等と愛の中に打ちとけて語ると云ふ事は樂しい事であつた。

自分は殆んど毎日會場へ行つて見た。會場の景氣がよく、參觀人が少しでも多い事は自分には喜びであつた。自分は文學をやり、彼等は畫家である。しかし自分は、此會が自分と關係の深いもの、云はゞ一族の者のやうな氣がする。そして自分は此××社の人々の生長を祈り、信じ、その祝福を祈り度くなる。

かくて事によつたらNの治療費にと考へた金はNに與へる必要はなくなつたが、それから間もなく自分はその金子をある檢査の爲めに必要な診斷書請求の費用としてN及び自分の貧しき友であるTに融通する事になつた。

Nの傷は幸にも日增しにいゝ方に向つた。その傷はもう直き癒りきるであらう。しかしNが傷をした事、それはたとへ輕い傷であつたにしろ、自分には長い感銘を與へた。自分は此事が一時の小事件として空しく忘れられて了ふ事なく、その受けた心の傷から何かの芽が生え、それが美しい花を咲かせる事を望んで此の小品を終らうと思ふ。

（一九一六、一一）

亡き姉に

それは明治廿七年の夏のことであつたから日清戰爭が始まつてから未だ間もない頃であつた。やつと六つになつて居た自分は毎年の通り數多い兄や姉、それに親戚の人なんかゞ交つて鎌倉海濱院の側に在つた小じんまりした別莊へ避暑に行つて居た。

其時分は何から何迄自分の家にとつては樂かつた時代で、十年の餘獨逸へ留學して居た總領の兄は其一年前に歸朝して間も無く結婚をする。其次の姉さんは他所へ嫁付く。親父はもう五十四五であつたが其れでも未だ中々の働き盛りで彼方此方飛び廻はつて忙はしく活動してゐた時であつたし、母も元氣、其外の子供も誰れ一人患うでもなく賑かに樂しい日を送つて居たのであつた。

鎌倉に行つても一番末つ子の自分は「味噌齒の甘つたれ」とか「坊んち」とか云はれて皆んなに揶揄はれては拗ねたり、泣いたり、巫山戯たり、惡戯をしたりしたが何かにつけて重寶がられ、可愛がられた。其時分の記憶は極くぼんやりとしてゐるが妙なことをよく覺えて居る。

今ではかれこれ一萬近くの人が住んで別莊なんかも撤いた樣にあるが、其頃は鎌倉と云つてもほんの片田舍でYさんとかOさんとか云ふ別莊のあつた事は覺えて居るが其外にはあつても極く僅かのもので、其邊は薩摩芋や西瓜、まくは瓜蕎麥抔が一面に

作つてあつて、西瓜泥棒抔と云ふのが盛に流行つた。自分達も大抵毎晩の樣に書生やなんぞに隨いて大き相な奴を三つ四つのべたらに作つてある近所の畑から造作なく……

……尤も母には內所であつたが……盜んで抱へて來る。買つた處で大きな西瓜が一つ七八錢位しかしなかつたのであるがそうつと夜盜みに出掛けると云ふ事に興味があつたので平氣で度々やつたものだつた。取つて來た小さい奴は後で中實を剔り取り、皮には富士山なんぞを彫り込んで瓜燈籠と云ふのを拵へることに定つてゐた。

吉と云ふ魚屋が居て始終新しい魚を持つて出入りしてゐたが、或時母に「此頃は伜を學校……(其頃長谷に一つ小さな小學校が出來た……)へ出しますんですが、月謝に五錢取られますからねえ……」なんて云つたのを聞いて母が噴き出したのを未だに憶えて居る。

風の凪ぎた靜かな夕方には兄弟五人……自分達は一體八人兄弟であるが此時此處に集まつて居たのは確か五人であつたと思ふ……連れ立つて四邊が暗くなつて少し涼し過ぎる頃になる迄手を繼ぎ合つて海岸や松原の間を愉快に散歩した。自分は何時でも悌兄さん……其中で一番大きい兄……と九つ年上のちい姉樣……藤子と云ふ名だが自分達は恁う呼んで居た……との間に挾まつて元氣よくはしやいで居た。

ちい姉様はよく美しい聲で「風と波とに送られて……」と云ふ唱歌を唄つて居た。皆んなは其れを眞似て唄つたりした。或時は海濱院に泊つて居る西洋人のダンスの眞似をして飛んだり跳ねたり、お辭儀をし合つたりして遊んだ。此時分の樂しさを自分は一生忘れる事が出來ないと思ふ。

數多い兄さんや姉さんの中でも自分はちい姉様が何だか一番好きだつた。ちい姉様は日本人に珍らしい皮膚の綺麗な、心持の優しい善い人であつた。父も母も此姉さんに就ては隨分鼻を高くして居たらしく、今寫眞で見ても此姉さんは決して所謂美人式な定まつた容貌ではなかつたが何とも云へない優美で、奥床しい、そして花霞の樣なほんのりとした溫かい感じを誰れにでも與へる顏立ちであつた事は自分も疑はない。自分がちい姉様を甚しく好いて居たのも、單に此姉さんが自分を可愛がつて呉れたが爲めに得手勝手な心持で反射的に好きになつたのではなく、何つちかと言へば、自分は此姉さんを好くと共に尊敬してゐたのだ。

其頃東京の自分の家は麻布内田山と云ふ岡の上にあつたが、海老色に塗つた木造の西洋館の下に芝生の庭があつた。今行つて見ると些つとも廣くはないが其時分は馬鹿に廣い庭だと思つてゐた。其芝原の緣に木瓜の叢で出來た垣根が西洋館に隨いて曲が

つてあつた。それが四五月になつて軟かい土の間から甘い氣が立つ頃になると桃色や白や赤の花を美しく咲かせたもので、吾々はよく其の花の蕚から甘い蜜を舐めたりした。自分は未だに此處で蓮華草やたんぽゝの花を蹴散らしながら鬼ごつこをした時にちい姉様がキヤア〳〵云ひ乍ら白い脛を露はして自分を追ひかけて來た時のトン〳〵と云ふ足音を明に記憶してゐる。自分は小さい乍ら割に速かつたのだがちい姉様に捕まへられたくもあつたので直ぐ捕まつて了つた。それから朝になると自分は屹度母の蒲團の中へコソ〳〵と匐ひ込んで行つて、溫もつた搔卷の中から首を出したり引込ましたりして巫山戯て居ると、側に並んで居るちい姉様が、

「善つちやん、又あ？……」と云つてニコ〳〵笑つて居た姿をも憶えて居る。

おやつを喰べる時なんかには屹度自分に善い處を澤山つけて呉れた。尤もこれは少し害になつて、自分は其れから何時でも善い處を人が自分に分けて呉れないと直ぐ不平を鳴らして怒つたりした。

ちい姉様は天性慈け深く生れた人で、弱いもの、小さいもの、哀れなものを同情する心が強く、乞食なんかの前も只では何うしても通れない人であつた。そして自分はそれを決して作り飾りから出たのでなく、天心爛漫の慈け深い心からだと今も思つて

居る。姉は自分が一番小さくて父や母に早く別れる運命であるのを知つて居たから、一つは自分に特別の好意を持つて居たのかも知れない。

其頃は女學校で舞踊を教へたものと見えて、姉さんも稽古をやつて居た。尤も幼稚なものに過ぎなかつたのだらうが、自分は何んでもちい姉様の事だから餘程巧いのだと思つてゐた。或晩親戚の宴會へ吾々の家族が招かれた時、姉は同級の友である其家のお光さんと云ふ娘と學校で教はつた「金剛石」と云ふ踊りを踊る樣にと皆んなから强ひられて二人で踊つた事がある。自分は小さい乍ら頻りと姉の最負であつたから、側に居た仲間の女の子に自分の姉さんの方が段違ひに上手だろと云つて譯分らずに自慢した事があるが、舞踊は素より其程のものでもなかつたに違ひない。

此年(二十七年)も吾々兄弟がお盆の爲めか、後に殘つて居る母を措いて、先きに鎌倉に來て居たが、其から一週間許りして母は東京から來た。其時に他の兄弟は皆大喜びでぞろ〳〵玄關迄迎へに出たが、母は自分が見えないので「坊んちは何處に居るの?」と尋ねた相だ。姉は「餘り嬉しいので出て來られずに何處かに隱れて居るのよ。」と云つて笑つた相だが、自分は其時とう〳〵見付かつて母に抱かれた時嬉しいので半分泣ね乍ら泣き笑をして居た相だ。今の自分から想像すると可笑くなるが、自分は餘

程女々しく意氣地なしに育てられて居たと見える。

海濱院に西洋の新聞が來るので、其れに虛報が載つて居たと見えて、なんでも日本の海軍が支那の艦隊に滅茶々々に破られて了つて、定遠とか鎭遠とかと云ふ大きな軍艦が鎌倉の沖の方へ何時表はれて砲擊をするかも知れない。なんと云ふ噂を聞いて怖がつたのも此時分の事であつた。姉は何時でも「大丈夫よ、日本人は忠義ですからね。一旦は負けても仕舞ひには勝つてよ……あんなチャン〳〵なんぞに負けるもんですか……」と力み乍ら自分や美いちやん……二つ上の姉を……慰めては居たが、自分も內心はビク〳〵して居たに相違ない。

吾々の兄弟は皆んな比較的仲善く遊んだ。自分は誰れも彼れも嫌ひではなかつた。偶まに喧嘩でもする時はちい姉さんは何時でも小さい自分の肩を持ち、又他の兄弟を叱りもせず、穩かになだめて呉れたので、吾々にとつては何よりの優しい主權者、仲裁者であつた。吾々は此主權者の云ふ事なら何でも溫和しく聞いてゐた。そして自分達の間からもし此優しい主權者が拔き去られた時は何んなに味氣ない、淋しいものだらうと云ふ氣がお互にしてゐた。

只一度自分は此主權者に對して反抗して怒つた事があつた。それは自分が雨の降つ

た日に、滑川と云ふ川の岸で小さい龜の子を一匹捕まへて大喜びで自家へ持つて來て大切に飼つておいたのを、其晩姉がそうつと逃がして了つた時であつた。其時自分は姉を撲つて迄怒つたが、姉に對して反抗したのは一生に其れきりであつた。

吾々は朝夕二度海水浴をする習慣であつた。考へて見れば其頃自分は海水浴が其れ程に好きでなかつた。自分は一度水際の處で酷く波に轉がされた事もあり。又、四郎さんと云ふ親類の男の太い腕の上に自分の腹を支へさして、危な氣に龜の子の樣に手足を動かすのが恐ろしくもあつたので自分は矢張り砂の上でお城を築いたり、赤蟹を捕まへたりして遊ぶ方が好きだつた。

ちい姉樣は活潑の方であつたから海水浴は好きだつたが、勿論大して泳げもしなかつた。やつと胸の下位迄の深さの處で板子に摑まつてジャボン〳〵やる位が關の山だつた。其外のものも皆んな似たり寄つたりで、脊の立たない沖へ乘り出して泳ぐのは悌兄さんと、瀨戸と云ふ書生と與介と云ふ車夫位のものであつた。そしてかれこれ二十分も泳いだり遊んだりした後で一丁餘りの松並木の道を歩き乍ら歸つて朝飯を喰べ、夕餐をする事に定まつて居た。自分は紫の矢飛白を着て快活に砂山を駈け降りるちい姉樣の姿が未だに眼に付いてゐる。

八月十四日は麗らかな日であつた。朝、自分は何かの具合で海水を止めて母と二人家に殘つて居た。すると美いちやんが向ふの砂山から何となく世話しく息せききつて小さい足を運ばして來たが、別莊の間近迄走つて來た時、泣き相な金切聲を擧げて「ちい姉樣が流された！」と叫んだ。母は何もかも放つて素足の儘緣側から矢庭に飛び降りて海岸の方へ驅け出した。自分も何だか譯が分らなくなつて只大變と思ひ乍ら素足で母の後を追つた。屋根を葺いてゐた職人も飛び下りて一緒に驅け出した。

海岸へ出て見ると強い夏の日光に照らされた海が如何にも穩かに擴がつて居た。其から先き自分は只どぎまぎした許りで何うなつたのかよく分らなかつた。只後で人から聞いた事を自分の記憶の樣に思ひ浮べる丈けである。

其日は強い引き汐の日であつた相だ。母は無論それを知らずに居た。それで姉が少し進まなかつたのを天氣がよかつたので、強ひて勸めて海へ行かした。總楊枝を使ひ乍ら、手拭で髪を締める姉の顏を下から美しいと眺めたのが最後の見納めであつたと母は近頃に語つた。

引き汐は水面のみは鏡の樣に普段と異る處はないが、水底は強い力で沖へ〳〵と引くものだ相だ。聞いて見れば成る程稻村ケ崎や材木座の方から、平常は繁々と漕き出す

獵船も此日は一隻も海面に影を見せずに砂の上に並んで居た。悌兄さんは一人で例もの様に由井ケ濱を左の方へ斜かひに泳いで行つた後に、今日は車夫の與介が一人と其外は女や子供許りであつた。姉は板子に摑まつて例の通りジヤボ〳〵やつてゐる間に、一度後から來る波に強く捲き込まれたが最後、淺い處でも水底の引き行く力はか弱い娘の力では踏み堪らへきれなかつたと見えて、いきなり二丁許り浚はれて沖へ運ばれた。與介は急いで泳いで見たが、其時姉の姿は更に見えなくなつて今度は黄い女の髪が海岸から十丁餘りの沖へポクリと現はれた。勇ちやんと云ふ十二になつて居た兄は一生懸命船頭の處へ驅けて行つて船を出して吳れと賴み、美いちやんも必死となつて別莊の方へ知らせに走つた。悌兄さんも海岸で呼ぶ聲に氣が付いて姉の方へ夢中で泳いだ。船はグズ〳〵し乍ら暫くたつてから出た。けれども萬事遲かつた。母が長大息を吐き乍ら氣狂の様になつて書生や船頭を追ひやつた時は姉の姿は時々稻村ケ崎に近い沖の方に木屑か何かと疑はれ乍ら見えつ隱れつしてゐた時だつた。

與介は然しよく泳いで兎に角姉の處迄行き着いた。けれどもぐんなりした姉の體を押へた時に、與介は既に後へ引き返す丈けの餘力を失つて居た。そして只暫くの間姉と共に沈み、又姉と共に浮き上り乍ら少し宛沖へ〳〵と持つて行かれた。海岸では猶

ほ此時幽かに姉の呼ぶ聲を聞いたと云ふ。けれども二隻三隻と續いて出た船も、空しく海面をうろついてゐるに過ぎなかつた。溺れつゝ遠ざかり行く姉の姿は、下男と共に減多に水面に現はれなくなつた。只終りに黑い影が一つ水面から船の上に曳きずり上げられるのが認められたので、岡の方では其船の近附くのを唯一つの賴みにして首を延ばして居た。そして其救はれた者は姉ではなくて與介であつた。與介は遂に姉を持ちきれずに手放して了つたのだ。與介は暫く介抱を受けて居る間に追々生氣に復して來たが、姉の姿はとう〳〵見失はれて了つた。其時小さい吾々は此助けられた與介を恨んだ。與介が手放しさへしなければ姉も一緒に救はれたらうに不忠な無情な奴だと云つて與介を憎み、與介の爲めに死んだのだ、とさへムキになつて云つたりした。

船は一隻二隻と續いて空しく戻つて來た。悌兄さんが波打際に跪いて「お母さん藤うちやん助かりません……堪忍して下さい。」と云つて泣き崩れた時、一緒になつて泣き出す子供に取り卷かれた母の心持……姉自身の苦しみを思ひ遣るのは勿論だが……を考へると今でも實に堪らなくなる。

何でも詳しい事は忘れたが、之れから別莊では取り敢へず「フジキトク」と云ふ電報を四方八方へ向けて打つた。海では再び捜索の船が出た。元箱根へ官用で行つて居た

父や、東京に殘つてゐた總領の兄の夫婦や、横濱に居た次男の兄、親戚の者も午後には大抵此狹い別莊へ集まつて泣き悲しむだ。母は今日に限つて行かうともしなかつた姉を、無理にとも勸めて海へやつた自分は態々姉を殺しにやつたのだ。姉は自分が殺した樣なものだと居たゝまれぬ樣に悔んで父の前にピツタリ兩手を突いて泣き伏した。普段落ち着いた父も腦充血を起して鼻血を出したりして居た。暫くして「フジデキシ」と云ふ電報は再び諸方へ向けて打たれた。

凡てが無我夢中であつた。何うなつて行つたのか自分は確かと覺えて居ない。只夜の十時頃であつたか、母が急に海岸の方で呼ぶ聲が確かに聞えたと云ひ出した。自分達も細く微かに、而も明かに姉の聲が聞えた樣な氣がした。これで吾々子供は後に殘り、皆んなは提灯を點けてぞろ〳〵又濱の方へ出て當てもなく呼んで見たり、船を出したりした。

其頃は連夜に亘つての明月であつた。月の好きな姉は仲の極めて善い悌兄さんと二人で夜の十時頃からよく月見に濱邊へ出掛けて行つた。多勢で月の光を浴び乍ら鬼ごつこをしたこともあつた。眼をパツチリ開いて床の中にモジ〳〵やつて居た美いちやんと自分は、とう〳〵縁側迄匐ひ出して、黑い松並木の間に輝く銀色の海面を恨めし

くぼんやりと眺め、手に取る樣な波の音を夢心地に憎しみを以て聞いた。昨夜迄よく自分達の小さい枕許に來ては愛苦しく色んな話をして寢つかして呉れたあのちい姉樣が、水衣一枚で呻き惱む力さへなく、冷たい水の上に一人凄い月の光を浴びて、漾つて居られるのかと思ふと聲を上げて二人共泣き出さずには居られなかつた。けれども又一方には其ちい姉樣が實際に死んで亡くなつて了つたと云ふ事にもなれなかつた。何だか只恐ろしい騷きが始まつたのを夢の中に見て居る樣な氣もした。それで人の泣くのを見たり、母の見る〳〵痩せ衰へて氣狂の樣になつて居る樣を見たりすると急に悲しくなつたり、驚いたりしたが、それも心の底からではなくて、四邊に大勢の人が時ならずガヤ〳〵と集まつて騷いで居るのを見ると、又妙に賑かで面白い樣な氣もした。そして玩具や何かを片付けて東京へ歸ると云ふ事が何となく樂みに思へたりする程の餘裕もあつた。が今から見れば何と云ふ事はない只面喰つて居たのだ。

今度こそは屹度助かつてちい姉樣は連れられて來るに違ひない抔と云ひ乍ら落着かずに待つて居ると、曉の五時頃になつて皆は又悄然としてすご〳〵歸つて來た。素より誰れも連れずに。

こんな風にして夢の間に二日許り經つて了つた。其間に船を出したり神樣のお札や、

丸太を何本となく海に流したりして見たが無論何の藝にもならなかつた。

三日目の日に兄や親類の男抔が多勢江の島の方から船を出して七里ケ濱を越えて稻村ケ崎の沖に差しかゝつた時、直ぐ傍の水面に突然娘の體が浮き上つた。海の奥永久に葬られて了ふものと思はれた姉の屍體は夏の赫灼(かくしゃく)い日中に偶然にも此船の上に曳き上げられたのであつた。

自分は母が襷掛(たすきがけ)で板に載せられた姉の屍體を手際に始末して居た時に、怖はゞ眼をねぶつた姉の白いうるんだ顔と、くづれた長い黑髪とをチラリと竊み見た丈けであつた。姉の體には岩に擦(こす)れてか、魚に突つつかれてか、傷が方々にあつて血が滲(にじ)み、髪には藻が一杯からんで居たと後で人が云ふのを聞いた。

恰度其前夜のことであつた。母は餘りの熱さに寢苦しいので夜半に一人月のさしてゐる緣側に出て凉んだ。暫くして母が又寢床に戻らうとして、ふと蚊帳の中を見ると自分の傍に寢てゐたか細い花車な姉の姿がどうしたものか差し込む月明りに丁度皮をはいだ大木の幹か何かのやうに無樣に太く寢そべつて見えた。其氣味惡さに母はぞつとした。素よりそれは何でもない錯覺であつたことが直く分つたが、恰度其時の姉の感じが溺れて上つて來た時の姉の姿とそつくりであつたと母は後に語つた。併し母は

此變な話が姉の美しい、神聖な感じを穢がすことになるのを嫌がつて誰にも云はなかつた。で、自分がそれを聞いたのもやつと近頃のことである。

吾々の優しいちい姉樣は斯の如く十六の夏を最後に無殘極まる死に方をしたのである。

其翌日姉の屍體は棺に收められて嘆き悲しむ父母、兄弟、親戚、知合の者共と共に東京の自家へ運ばれた。蟬のかしましく啼く八月の半ばに薄暗い十疊の座敷に設けられた姉の佛壇の前に、法華宗の坊主が毎夕讀經した哀れつぽい聲は未だに自分等の胸に節(ふし)をなして響く樣な感じがする。

二三日してから姉は谷中の墓地に埋められたが、それから丁度翌年の一周忌に當る時に、母が谷中の陰氣な淋しい土に何うしても姉を一人置くのは不愍だと云ひ出したので、自家に近い日當りのいゝ陽氣な青山の墓地に墓を移すことになつた。

此災難以後、自分の家の家庭は今迄の長閑な愉快さに引きかへて實に暗憺たる淋しいものになつて來た。父は腦を惡くして今迄の氣力が頓と失せ、母は日增しに衰弱して健康を害し、長い間ヒステリーに罹つてゐた。父が明け方抔に蒼く頰のこけた母の靜かな寢顏を覗き込むで、死んでゐるのではなからうかと度々疑つた程であつた。自

分達も何をするにも樂みが拔けて元の樣に腹から笑つたり、騷いだりすることも稀になつた。此以來自分の家庭は春に會ふ事もなく、始終秋や冬ばかりで通して來た樣に思はれる。人數の多い兄弟の中だから、一人位缺ける事は當然な事かも知れないが、死に樣が死に樣であり、死んだ人が人であつた丈けに吾々一家にとつては實に大打擊であつたのだ。自分も日が經つにつれて姉の死を段々に痛切に感ずる樣になり、佛壇の前に一心に讀經する母の後ろに坐つて泣かない事はなかつた。何かにつけてちい姉樣を思ひ出し、又其姿を夢みた。母が其以來鎌倉は愚か、海さへも見るのが可厭になつたのも無理はないと思ふ。

自分が未だ何物も知らなかつた時分に、既に波瀾の多かつた家庭に育つて、母と苦勞を共にして居た姉は、七つか八つの時に他の兄弟にない肺を患つたことがある。醫者は姉の細い胸隔を見て何うしても長命することの出來ない體だと父に云つた相である。そして姉は十二三になる迄始終胸に濕布の繃帶をしてゐた。八つの時に姉は父や母と熱海に行つた事があるが、或時源湯の前を通つた時、姉は一人チョコ〳〵と其立昇る湯氣の側に走つて行つて、小さな手で鐵の門に摑まり乍ら深呼吸をして居たのを父と母が見て、涙を溢ぼした事があつたと云ふ。何れにしても姉は短命であるべく生

れたものと見える。

父が「珠光院秋露妙圓童女」と云ふ法名を附し、自ら墓碑を書いて可愛い花崗石に彫らし、其を谷中の土に立てゝから今年で十八年目に當る。其間に父も死に、總領の兄も死んだ。けれど自分の頭には何う云ふものか一番自分の小さかつた時に起つた姉の死の記憶が今でも最も力强い、新鮮な刺戟となつて繰り返へされるのである。そして其を思ふ毎に普段「センチメンタル」と云ふ事を一概に却けて居た事が如何にも空虛な無意義なものとなつて頭に現はれるのである。

姉は生きて居れば今年で丁度三十四になる。其間に姉は如何に變化したであらうか、其は分らぬ。或はあの時に死んだのが姉として一番花であつたかも知れない。けれども自分の近親の女と云ふ女によつて一趣女性に對する不快と、誤謬とを與へられた自分は、そして其以外に多くの「女」を知合に持たない自分は、只此幼少の時の果かない姉の俤を想ふ毎にのみ眞に女性の溫情を感じ得るのである。從順にして奧床しく、快活にして而も朧ろなる瞳の底に涙の潛むで居た姉は、未だに自分にとつて或意味に於ける美しく優しき偶像であるのだ。

（明治四五、三、五）

兎

其夏の八月末に自分は西那須野にある親戚の開墾地に行つて居た。其處には嫁に行つた自分の姉と、姉の一人子でお竹坊と云ふ其時分わづか九になつて居た女の子と、正助と云ふ向うの家の若い男とそれに二三人の下男や婢が居た。

自分は未だ中學の二三年生で十五六の頃であつた。夏と云ふものは海岸に居て、印度人の様に皮膚の色揚をし、もく〳〵した綿の様な雲を、白く、くづれる波の上から眺めて暮すものと、思ひ込んで居た自分は、此茫々とした原野の中の開墾地に來て全く異境の感を起した。原を横切る凸凹した軟かい轍路は何處迄續くかと思はせ、其兩側には赤松の大木が處々にによき〳〵と立つて、遠くの方に低く那須嶽やら鹽原の方の山が僅か許り眺めらるゝ處に來て、自分は日本にも恁んな廣々した陸地の景が見らるるのかと珍らしく思つた。

此開墾地の中には箒川に注ぐ水晶の様な小川が一筋通つて居た。自分はよくお竹坊を連れて血の様な太陽が原の彼方に傾むいて赤松の梢が銅線の様に美しく輝く頃迄冷たい急流の中で鮎を捕まへて遊むだものだつた。自分は未だに水の底に碧く透通つて見えたお竹坊の可愛らしい白い足を忘れない。川の底と岸とは樺色の粘土なので、うつかりして居ると直ぐ辷り相になる。其れに水の勢が中々強いので野呂馬の自分は半日

掛かつても一疋捕まへるか捕まへないか位だつたがお竹坊はよく小さな網で上手に敏捷く捕まへた。それにも拘はらず自分は何となく此快活な陽氣な女の子と賑かに川遊びをすると云ふ事に珍らしい興味を感じたので飽かず毎日の様に出掛けた。

然し其も遂々飽きた。それで今度は裏に藏つてあつた古い弓を持つて來て遊び出した。其家の下男が差渡し五尺もあらうと云ふ大きな的を何かの箍で拵らへて吳れたので其を原の一丁か一丁半位先きへ持つて行つて其處の松の木の根か何かへ立て懸けて置く。それを遠くの方から無くなつても惜しくない様な粗末な矢を拵へて置いて思ふ存分に引絞つては射る。始めの中は地面の上をかすつたりして黄色い土煙ばかり立てて居たが少し上達して折々ぽつん〳〵と圓味のある音を的から聞く様になると何とも云へない愉快さがあつて的中の度毎に如何にも健康になつたと云ふ様な心持を味つて急に反り返つて青天を仰いで深い息をしたりした。それで今度は何うせ一度で矢は歸つて來ないのだからと云ふので青天へ向つて少し斜に射つて見る事にした。何しろ人に當る危險はないと云ふのだから弱い弓の圓くなる迄引つ張つては放つて見る。矢は空氣に揉み入る様に搖れながら影の失せる迄天高く上つて行く。其氣持の爽快な事と云つたらない。それで色々工風をして今度は裏に飼つてある鵝鳥の白い羽を矢にくつ

附けたり赤や桃色の色紙を結はひ附たりして青天井の中へ射込んで見た事もあつた。

其頃兎が頻りと出て芋の根を掘じくつたり、菜の葉を喰つたりして畑を荒し廻つて仕方がなかつた。其で此家の正助と云ふ人は「ブラ」と云ふ耳の長い牡犬を一匹連れては度々鐵砲を擔いで兎獵に出掛けて行つては譯なく四五匹撃ち留て來るのであつた。

或日自分とお竹坊と一緒に正助に隨いて兎獵を見に行つた。正助は此原の地理を詳しく知つて居るので一番兎の屢々出る近邊に行つて「ブラ」を叢の中に追ひ込んだ。

「此邊に踞んで待つて居て見給へ……兎は屹度此徑に出て來るから」

恁う云つて正助は自分達から十間許り離れた松の木の下に煙草をぷかり〳〵吹かし乍ら二連銃を脇の下へ抱へ込んで立つて待つて居る。

暫くすると「ブラ」の大きな聲でキヤン〳〵啼き乍ら叢の中を馳けずり廻つて居るのが聞え出した。自分とお竹坊とは目を圓くして無言の儘溫和しくして居る。犬の聲は次第々々に荒くれて大きくなつて來た。もう直ぐ兎が出て來相に思はれるので正助の方を一寸見ると未だ中々だと云ふ風に落ち着き拂つて居る。それから六七分の間犬は狂ふ樣に啼いてすさまじく草の間を馳け廻つて居たが少時たつと正助が、

「來たよ〳〵」

と云ふので其の方を見ると犬の聲と全で反對な遠くの徑傍から土の塊でも轉がす樣に兎が一匹此方に向つてピヨン〳〵と飛んで來るのが見えた。正助は引金の處を右の手で押へてチヤンと身構へして立つて居る。兎は此方の居る事には少しも氣が附かないと見えて平氣でドン〳〵近寄つて來て軈て自分達から七八間の處迄來た時「ズドン……」と云ふ音がした。すると兎は急に後足で立つて耳を聳て圓るい愛嬌のある驚いた眼をして此方を見て居たが直ぐ又一足飛で側の叢の中に飛び込んで姿を隱した。

「外したの？」とお竹坊が聞いた。

「なあに大丈夫中つて居るさ」

と正助は自信有り氣に答へたが其儘又松の根にドツカと腰を卸したなり煙草を燻らし始めた。

すると先刻丁度兎が現はれた邊りから「ブラ」が長い舌を口の横からだらしなく下げて涎を流し流し息せき切つて追ひ掛けて來たが直ぐ又兎の跡を追つて叢の中に飛び込んで行つた。それから少し經つと「ブラ」の啼き聲はピタリと止まつた。

「そうら……矢張り中つて居たんだ……」

と正助は急に元氣附いて叢の中に踏み込んで行つたが軈て大きな兎の兩後足を掴んでにこ〳〵し乍ら出て來た。其後には「ブラ」が如何にも職務を果したと云ふ樣に安心したらしく尾を振り乍ら隨いて居た。自分は何となく銃獵をして見たくなつて來た。

それから二日許り經つて午食の時に正助は自分に

「芳郎さん兎擊ちに行つて見ないか。丁度鐵砲も二挺あるから僕も一緒に行くが……」

と云つた。自分は

「是非行きませう……僕は未だ鐵砲を擊つた事はありませんが」

と答へた。然し其時自分の胸は少し騷いで居た。と云ふのは自分は其頃圖體丈けはもう隨分大きくなつて居たが生來臆病な故で大きな音を聞くのが餘り得手でなかつたので、雷なんかも小さな音の間は悠然と構へて居るが少しピカ〳〵と大きな銀の裂け目が强く空に現はれたりすると殆ど本能的に耳に兩手をピツタリと當てゝ居なくては濟まされない方の性質(たち)だつたので、中々自身で雷の樣な音を出すなんと云ふ事は一向得意としなかつたのである。然し此場合男と生れて而も大きな形(なり)をし乍ら鐵砲の火蓋一つ切れない抔と云ふのは體面上甚だ不面目な話だと云ふ名譽心とでも云ふか……そ

んなものから……それに此間からの好奇心もあつたので……手輕に引き受けて了つたのである。

自分は內心少し不安を感じ乍らも食事が濟むと威勢よく鐵砲のある室へ行つて散彈(たま)込めの手傳をしたり掃除をしたりした。それで自分は十六番の二連銃を持つことになり、正助は十二番の古い村田銃を擔いで「ブラ」と一緒に此間と少し別の方向へ出掛けた。

家からかれこれ半道も來たかと思ふ處で正助は

「此邊がよからう」

と云つた。犬はもう何時の間にか叢の中に這入り込んで居た。正助は自分を丁度兎の出相な道の近邊に立つ樣に命じて自身はそれから二十間許り後ろの處に離れて立つた。

犬は間も無く啼き出した。自分の胸は動悸を打ち始めたが何喰はぬ平氣を裝ふ爲めに態とぶら〳〵歩いて見たりした。すると

「動かずに……じつとして待つて居給へ……」

と小さな聲で正助から小言を喰つたので、ダランと銃口を土に向けて靜かに佇つて

居たが、何時か手からは油汗が厭に滲み出て來て銃柄はグツチヨリになつて居た。

「もう直き出るよ……」

と正助の囁く樣な聲が聞えた。正助と自分との距離は割に距つて居るのだが四邊がひつそりとして居るので犬の啼聲の途切れて居る間にはバツタが草の葉から草の葉へ飛び移る音迄聞える程幽かでもはつきり耳に入るのであつた。

「馬鹿に早いな」

と思ひ乍ら自分は引金に右の人指し指を輕く當て、體中の筋肉を可厭つて云ふ程突つ張らして今か今かと待ち構へて居る。二分經ち三分經つても犬の啼聲許りで兎の姿は現はれない。自分は少し氣が拔けて來たので筋肉の緊張を少し許り弛めた。其時カサカサ〳〵〳〵と云ふ草の葉の擦れ合ふ樣な音がしたが直ぐ止つた。すると又カサカサ〳〵と云ふ音がした。其と同時にピヨイと小兎が一匹叢から自分の直ぐ前に飛び出した。兎は自分を見て驚いた樣に此方を向いて停つた。自分も驚いた。然し其時自分は何うしたものか鐵砲を持つて居る事を忘れてポカンとし乍ら只管兎の動勢を見て居た。すると兎は「此間拔け先生」とでも思つたがヨイ〳〵とはずむ樣に二度計り飛んで直ぐ向うの叢の中に隱れて了つた。自分は引金を押へたなり啞然として跡方もな

い兎の飛び込むだ個處を凝視めて居た。そして其處には靜かな草の葉が微かに搖れて居るのであつた。

自分は引返しもせずに只ぼんやりとし乍ら暫く其處に立留つて居た。其時自分は未だ正助から聲を掛けられなかつたので

「あんな小さな兎が一匹僅か一飛びか二飛で此細い道を横切るのだから少くとも正助の目には止まらなかつたらう。結局出なかつたと後で嘘を吐けば其迄の話だ」

と胸算段をした。然し自分の發砲しなかつた心持はハツキリした樣なしない樣なであつた。兎に角自分の神經の作用が魯鈍であつた故とも思はれるが、又兎を見たと同時に擊てなかつたと云ふ事も意識的であつたらしく思はれる。何だか善い事か惡い事は分らない。結局間拔けと云ふ事丈けは何うしても免れ得ないと感じた時少からず不安な氣がした。「ブラ」が夢中で追ひ掛けて來て兎の後から眼の前の小道を通り拔けた。

「ブラ」はムキである。「ブラ」にも濟まない事をしたなと思つた。

「見逃したね……もう駄目だ。外の處へ行かう」

と此時後ろから大きな聲を掛けられた。自分は冷やりとした。

「確かに通らなかつたと思ふんだが……」と自分は赤面し乍ら辯解したが

「だつて今「ブラ」が通つたぢやないか」
と正助はニヤ〳〵と如何にも此方を見拔いた樣な蔑むだ笑ひ方をし乍ら自分の側にやつて來て口笛を吹いて「ブラ」を呼んだ。
「もう一遍外の處でやつて見るか……」
と正助は云つたが自分は
「もう止しませう……」
と脹れ面をしてブツキラ棒に答へた。それから後は何となく憤つた樣な氣分で一口も利かずに鐵砲を持て餘し乍ら歩いた。

晩飯の時姉は
「今日は何うでした……芳ちやんも擊つたの？」
とテーブル越しに尋ねた。自分の隣りに居た正助は自分の代りに
「見逃し」と微笑し乍ら答へた。
「まあ……傳七な」
と姉は如何にも見縊つた調子で云つた。「傳七」とは此家の故郷の辭で「野呂馬の馬

鹿」と云ふ意味の辭なのだ相だ。姉は自分が自身の實の弟なので殊更正助の前で罰する樣な心算と半分は利己的の自己辯護の心持で此「傳七」と云ふ言葉を自分に向つて使つたのだ。正助は笑つた。姉の側に並んで居たお竹坊も自分の顏を見て輕蔑した樣な顏附をした。

自分は赤面もし腹も立つた。然し其時の自分は今の自分ではなかつた。もつと弱く、もつとお人好しの子供であつた。今の自分ならば如何なる失策をも直ぐ自分の誇りに轉じて失策を爲ない者に對して征服的な、侮蔑的な、傲慢な態度に出るのであるが其時の自分は何處迄も受け身で消極的であつた。腹は立ち乍らも「仕方がない矢張り失策は失策なんだから……」と云ふ風に心を押へ樣と努めた。そして自分は只女々しく姉の顏を恨む樣に睨むだ。然し姉は何處迄も冷然として居た。

今になつて自分が其時兎に發砲し得なかつた事に辯解を拵らへれば先づ恁うだ。つまり人は本能的には……道德的慈悲と云ふ樣な觀念を持ち出さずにもあゝ云つた場合に發火し得ることはよく〳〵此方に殘忍な練習によつて殺生の意識が人爲的に醱酵しつゝある場合でなければ起り得ない筈である。自分は其瞬間に全く本能的人間の天性に於て兎と出逢つたが爲めに自分が彼を殺生しに來て居ることを忘れて居た迄であ

る。だから自分が其「忘れ」から早く覺めなかつたと云ふ感應性の魯鈍も單なる魯鈍よりは遙に複雜で意味があると云ふのである。然し此複雜なる魯鈍の後ろにはも一つ叮嚀に輕い臆病が潜んで居た事に氣が附くと今更乍ら自慢は出來ない事になるのだ。自分は矢張り間抜の一語に相當して居たのであらう。

翌日の朝自分は例もになく早く起きた。そして朝飯が濟むと早速一人でこつそりと昨日の鐵砲を持ち出して裏から「ブラ」を連れて早足に昨日見逃した方面へと出掛けた。

朝の冷や〳〵した濃密な空氣が重く澱んで居る中を自分は氣持よく歩いた。路傍の葉には眞珠の樣な露が溜つて遙か前の方に低く那須岳が瑠璃色にハツキリと見えた。一息一息の呼吸は清水の樣に胸に這入つて體中の血液から、臟腑から、筋肉から、骨迄隈なく洗ひ拭ふ如くに感ぜられた。

「午迄の間に何うしても昨日の腹癒せに三四匹は打ちとめてやるぞ」と意氣組み乍ら此處と思ふ處で「ブラ」を徑の片一方へ追ひやつて直ぐ其近所で待ち構へる事にした。然し何う云ふものか何時迄たつても「ブラ」の啼聲は一向に聞えない。「はてな」と思

つて居ると暫くたつて横手から「ブラ」がこそ〳〵と尾を振り乍ら出て來て

「恁んな處に居るものかね」

とでも云ふ樣な面持で自分の顏をチラリと仰向いて又すた〳〵と前へ出掛けるので「さうかな」と自分は「ブラ」の後をお伴をし乍ら歩き出した。

それから少し先の處で「ブラ」が啼き出した。何でも徑に立つてさへ居れば其處を拔ける時に認め得る譯だと知つたので自分は「ブラ」の聲を中心として其聲に近い路傍に佇んだ。「ブラ」は例の通りに少時くの間駈け廻はつて居たが軈て一匹の兎を巧みに追ひ出した。其兎は自分から大分離れた先の方に現はれたので今度は卽座に思ひ切つて一發放つた。途方もない大きな音がして強い反動が自分の體の上半を四十五度許り後ろに反らした。銃口は發火すると同時にグツと上の方に擡つて了つた。何しろ只引金を引いたと云ふ丈けで發火した時は殆ど眼を瞑つて居たのだから狙ひ抔を關つて居る餘裕はない。それで發砲した時は鐵砲を擊つたと云ふ意識が重もで兎を擊つたと云ふ意識はお留守であつた。然も自分は二連銃を持ち乍らそんな事は忘れてやつと一發放したので早速兎の飛び込んだ叢の中に犬の代りに大なる希望と誇とを以つて駈け込んで見たが一向分らない。「ブラ」がやつて來て其後を追つて行つたが何處迄行つ

ても啼き止まないので矢張り外したのだなと思つた。「ブラ」に氣の毒な事をしたと思ひ乍ら正助を眞似て口笛を鳴らして見たが中々先生戻つて來ない。それで今度は大きな聲で「ブラ」の名を呼んで見た。餘り度々擊ち損つたり見逃したりすると犬が馬鹿になつて追はなくなると云ふのを聞いて居たので中々氣が氣でない。其中やつとガツカリした樣な不平相な樣子で「ブラ」は後ろの方から走つて歸つて來た。自分は頻りと「ブラ」の頭を撫でゝ謝まる樣な表情をしてやつた。そして又前へ歩き出した。此儘歸つては愈々名折れを增すばかりだと思ふので決して呑氣ではなかつた。

「兎に角自分は鐵砲を擊つた。大きな音もさせた。鐵砲とは恁んなものか……大したことはない。」などと少し得意を感じ乍らいくらか前よりは落着が出來た。

日は何時の間にか高く上つて四邊は潑剌とした夏の輝きとなり自分の體には汗が滴つて居た。

愈々第三回となつた。「ブラ」君は懲りなく忠實に叢の中で兎を追つてゐる。

「今度こそは何んな事があつても擊ちとめてやる。二發放つたら其中一發位は中らない事はあるまい……」

と自分は全身の精力を注意と發砲とに注ぎ脣を嚙み締めて銅像の樣に身構へて居

る。

兎が近い處から飛び出した。其途端自分は全身の緊張を以ていきなり續け樣に二發放つた。すると兎は全で球でも轉がした樣に前にころ〳〵と回轉したなり動かなくなつた。「それつツ」と自分は鐵砲を放り出して、矢庭に其處へ飛んで行つて見た。兎は未だほんの子供であつたが前足の處と胸とを酷く射拔かれて死んで居た。眞圓い眼は生きて居る樣に、パツチリと開いたなりで體には未だ軟かい溫味があつたが鼻と口からは血を流して居た。そして後足は心持ち腹の方へ縮込めて居た。

「ブラ」が歸つて來て激しく息をはずませ乍ら自分の傍に立つた。疲れたらしく口を開いて長い舌を振はして居たが兎の體を鼻の先で一寸觸れるとさも安心したらしく前足を二本投げ出して其處へのさりと坐つて了つた。自分は兎の後足を握つて釣し上げて見ると血が一滴二滴口から土の上に落ちた。自分は平和な、無邪氣な、愛苦しい眼と小さな圓い顏とを眺めた時急に胸が押し詰まる樣な悲慘な苦痛を感じて來た。堪らなく可哀想な氣がして來た。「なんて自分は馬鹿なんだらう」と思つた。

產々しい軟かい毛と、冷えきらぬ生命の名殘を傳へる微溫とは之に觸れる自分の手を戰かした。そして自分は何の苦もなく毎日の樣に何匹となく兎の生命を奪つて平氣

で笑つて居られる正助の心を卑しむべき者と心から感じ得たのであつた。自分ば「プラ」迄憎くらしくなつて來た。

然し自分は其小兎の屍體を提げて家へ歸つた。自分の胸には豫想した樣な誇りは微塵もなく只切なさがあつた。

臺所で仕事をして居た姉は自分の提げて來た兎を覗く樣に見て

「まあ小さな兎だこと……朝から今迄掛かつてやつと其一匹取つたの？でも芳ちやんにしては大出來ねえ……」と云つて笑つた。其處に居た下男も下女も笑つた。

それから後でも兎の話は度々出たが自分は何時も默つて居た。正助から獵に誘はれても直ぐ斷つた。

一週間許りして自分は東京へ歸つた。開墾地には其から未だ一度も行かない。獵銃にも手を觸れた事はない。二三年前に鹽原に三日許り泊りに行つた事があるが其時も開墾地には寄らなかつた。

近頃は開墾地の樣子も其時分とはすつかり變つて兎も少くなつた相である。

一九一二・十・八

大正六年九月三日印刷
大正六年九月七日發行

（定價金四十錢）

著作者　長與善郎

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町（八〇九番 八九九番）
振替（東京）一七四二番

《結婚の前》

印刷所　東京市神田區宮本町五番地 電話下谷（四〇六七番）　新潮社印刷部
印刷者　高橋治一

長與善郎氏著

戯曲 項羽と劉邦

▼特製全一冊
▼定價
▼送料八錢

序中の一節に曰く、之は恐らく誰が讀むでも面白く讀めるものである。材料其物が既に人の知る如く、戯曲の爲めに出來てゐるやうな興味深い劇詩である。嘗て自分は此材料を或る氣持ちから端的に書いて見た事もあるが、去年の春今少し詳しい此史料の内容を知るに及んで更に深い感興をそゝられ、又此材料が全曲的に扱はれるやうに出來てゐる事を知り、何時か全曲的に之れを書いて見度いと云ふ希望を起した。其後自分は參考の爲めに漢楚軍談を讀み、八月から筆を執つて今年の四月に一先づ完結をさせたが、それは此七月の末迄の訂正と仕上げとによつて殆んど別なものになつたと思つてゐる。つまり自分は全一年の餘を此創作に要した譯であるが、自分は現在の自分の力としてそれ丈けの甲斐を今では十分此作に認めてゐるものである。

（中略）序でながら白樺誌上で一通り此脚本――それは殆んど下塗りで多くの瑕瑾と、不完全とを持つてゐる――を讀んだ事のある人も若し折と氣持とがあつたら何時かもう一度此新らしく仕上げられた「項羽と劉邦」を通讀して貰へれば自分は一層滿足である事を付け加へておく。

新進作家叢書

▼中版百六十頁
▼定價四十錢
▼送料一冊四錢

新人競ひ起つて面目全く改まれる現下文壇の鳥瞰圖を示すべく新進作家中聲望最も高き人々を選び其の自信ある作品を請ひ得て一卷となし以て本叢書を刊せり。果して大歡迎を受け賣行き極めて盛也。

第一■新らしき家　小路武者實篤著
第二■恐ろしき結婚　里見弴著
第三■生あらば　豐島與志雄著
第四■大津順吉　志賀直哉著
第五■生と死の愛　谷崎精二著
第六■結婚の前　長與善郎著
第七■暴君へ　有島生馬著
第八■ギプスの床　相馬泰三著

――以下續々刊行――

江馬修氏著

長篇小說

受難者

第五版

▼大版五百五十頁
▼定價一圓三十錢
▼送料——十二錢

最新文壇に於て最も多く讀まれ、世評の焦點となりしものは『受難者』也。八百五十枚の長篇にして、青春の若々しき戀と新人道の痛切なる叫びと相經緯して成り、熱烈華麗、字々火の如く花の如く、これを讀む何人にも多大の刺戟を與へずんば已まず。今まさに搖動しつゝある新文藝に先聲をなすの一大作としして何人も一たびは讀まざる可からず。和辻哲郎氏は『受難者』の出版は文壇近時の一大事件也と云へり

諸家傑作選集

◎小さき世界　武者小路實篤著　■價一圓二十錢　送料八錢

◎寂しき道　江馬修著　■定價九十五錢　送料八錢

◎彼女の生活　田村俊子著　■定價九十錢　送料八錢

◎鴨川情話　長田幹彦著　■定價八十錢　送料八錢

縮刷獨歩叢書

國木田獨歩作

第一■武藏野及渚■（三版）

『武藏野』は獨歩が始めて公にせる第一の文集にして實に不朽の名篇と稱せらるゝもの。『渚』は其の絶筆たり。

第二■獨歩集■（再版）

目次▼富岡先生▼牛肉と馬鈴薯▼女難▼第三者▼正直者▼湯ケ原より▼少年の悲哀▼夫婦▼春鳥……

獨歩が書簡數百通を收む。中に其情人に贈りて戀を語れるもの最も多く熱烈なる戀愛書簡集たるの觀あり。

第三■獨歩書簡■（再版）

第四■運命■（新刊）

目次▼運命論者▼巡査▼酒中日記▼馬上の友▼惡魔▼畫の悲み▼空知川の岸邊▼非凡なる凡人▼日の出

▼布製天金最美本
▼一冊五十五錢宛
▼送料一冊六錢宛

名作選集

羽二重特製 表紙美本極

一冊送料六錢 五冊宛錢

第一 牛肉と馬鈴薯 國木田獨歩
第二 坊っちやん 夏目漱石
第三 蒲團 田山花袋
第四 透谷選集 北村透谷
第五 第六 春（全二冊） 島崎藤村
第七 わが袖の記 たけくらべ 高山樗牛 樋口一葉
第八 爛れ 德田秋聲
第九 平凡 二葉亭四迷
第十 高野聖 泉鏡花
十一 何處へ 正宗白鳥
十二 今戸心中 廣津柳浪
十三 耽溺 岩野泡鳴
十四 明治詩歌選 詩壇六家
十五 戀ざめ 小栗風葉
十六 別れた妻 近松秋江
十七 はつ姿 小杉天外
十八 お艶殺し 谷崎潤一郎
十九 俳諧師 高濱虛子
二十 廿一 煤煙（全二冊） 森田草平
廿二 子規歌集 花枕 正岡子規
廿三 その妹 武者小路實篤
廿四 旅役者 長田幹彦
廿五 物言はぬ顔 小川未明

——以下續々發刊——